魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

デスサイズ・0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

【Ｎコード】
Ｎ８２６６Ｗ

【作者名】
デスサイズ・０

【あらすじ】
「光の裏には影がある」

全てを失った少年は、飛ばされた世界…地球で一人の少女と出会う

その出会いは…少年と少女を変えた…

魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

派手に始まります

プロローグ「…らしいな。」（前書き）

どうも、デスサイズ・０です

やっちまったぜ…だが後悔はしてねぇ！！

後、Ａ'ｓとか言ってますけど無印の少し前から始まります

プロローグ「…らしいな。」

……どこかの無人世界……

少年「ハァ…ハァ…ハァ…父さん！母さん！何処に…ハッ！」

少年は傷だらけで歩いていた

その周りは炎で囲まれている

そして視線の先には……

一組の男女が腹部に剣が刺さった状態で倒れていた

それは少年の両親だった

少年「あ…あ…」

父「あ痛たたたた…」

少年「えぇっ!?」

母「全く…お腹に剣突き刺して、挙げ句の果てにこの世界を壊していくなんて…なかなかえげつないことするわね…」

少年「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!」

腹に剣か刺さったまま立ち上がる両親

父「お、良かった…生きてたか…」

母「さすが私達の息子ねぇ…あ痛たた…」

少年「いやいやいやいや!!は…腹に…剣刺さってるよ!!」

父「ああ、大丈夫だこの程度平気平気…痛いけど…」

母「とは言え…もう直ぐこの世界は崩壊するわ…私達の魔力もちょ

っと危ないし…」

父「仕方ない…零夜(れいや)！今からお前を地球に転送する。」

零夜「は？」

母「残念だけど、私達はもう無理みたい、あなたを転送するのが精一杯なの。」

零夜「そんな…」

父「…零夜、お前に…俺の相棒を託す…」

母「私の相棒も…託すわ…」

零夜「え…このデバイス…確かかなり危険だっｔ「転送！！」ええええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

そして- - - - -

その世界は崩壊した

地球

海鳴市

零夜「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ドゴドガゴォォォォォン！！！！

零夜「グフッ……」

零夜は気を失った…

魔法少女リリカルなのはA'　S～夜天の光の影～

派手に始まるぜ！！

プロローグ「…らしいな。」（後書き）

俺ははやて好きです

つまりヒロインははやて

派手に行くぜ！

第1話　少女と少年の出会い「…だってさ」（前書き）

第一話

はやての口調が有ってるかかなり心配

間違ってたり、これは違うだろって所はバンバン言ってください

第1話　少女と少年の出会い「…だってさ」

俺に……もっと力が……

力があれば……

父さんも…母さんも…

あの世界も……

守れたかもしれなかったのに……！！！

力を……

もっと……

もっと俺に……力を……

俺に力をくれ……！！

悪魔に魂を売ったっていい……！！

俺に…！もっと…！力を…！！！

零夜「う…」

？？「あ、起きた？」

零夜「ううぅ…」

いまだぼんやりする意識の中、視界はまだはっきりしないが、俺は眼を開ける。

そして目の前に…

零夜「…天……使…？」

？？「？ウチは天使とちゃうよ、普通の女の子や。」

しかし、今の俺には…最初…天使にしか見えなかった。

零夜「あぁ…すまない…うっ！」

起きあがろうとした俺の全身に激痛が走った、だがなんとか起きあがった

？？「あかんよ、一応手当てしといたけど、傷だらけで突然現れて倒れてたんやから。」

零夜「…倒れてた？」

？？「ウチの部屋のど真ん中にな、本よんでたら、突然光ったかと思って振り返ったら、倒れてたんよ。ほんまびっくりしたわ～…」

零夜「そうか…ありがとう…え～と…」

？？「ウチの名前は八神はやて。ひらがなではやて…変な…名前やろ…？」

零夜「いや、綺麗ないい名前だと思うぞ、俺は。俺の名前は零夜、影宮零夜（かげみやれいや）だ。」

はやて「ほんま？ありがとう…零夜君…」

零夜「あのさ…此処って…地球だよな？」

はやて「？そりゃあそうやろ。」

零夜「そう…か…なら…父さんも…母さんも…」

俺ははやてに聞かれない程の声で呟いた

はやて「なんで…泣いてるん？」

零夜「え？」

俺は手を眼に当てた

確かに俺は泣いていた

はやて「なんか…あったんか？」

零夜「ああ…少し…ね…」

はやて「…泣きたかったら、泣いたらええよ。」

その言葉を、聞いた瞬間

零夜「う…ぐっ…ううぅ…」

俺は

泣き出していた。

はやては俺の背中をさすったり、頭を撫でていてくれたらしいが、
今の俺にはあまり感じ取れなかった…

俺はどのくらいの時間泣いていたのだろうか？

俺の感覚では１０分程なのだが…

はやて「落ち着いた？」

零夜「あ…ああ…」

はやて「そうや、零夜君、お腹空いてないか？もうそろそろ、晩御飯を作ろうかと思ったんやけど…」

零夜「…いや…さすがにそこまで世話になるわｋ『グギュルルル…』…あ…」

はやて「どうやら、お腹は減ってるみたいやな、ちょっと待っててな、今から作るから。」

零夜「あ…あの…俺も手伝うよ、俺…料理得意だからさ…」

はやて「いや、怪我してるんやし、無理はせんほうがええよ。料理は、私も得意やし。」

零夜「でも、少しぐらいは手伝わせてくれないか？じゃなきゃ俺の気が済まないんだ…」

当然だ、突然現れて、手当てをしてもらって、ご飯を食べさせてもらうなら手伝わなければ俺の心が持たない。

はやて「う～ん…無理はしたらあかんよ…」

零夜「大丈夫、体はだいぶマシになってきてるから。」

はやて「じゃ、行こか。」

そう言ってはやては車椅子を動かした

俺も立ち上がってついて行く

零夜「車椅子…足…悪いのか…？」

はやて「うん…よく分からんけど、動かないんよ…」

零夜「…そうか…」

はやて「じゃあ何作ろかな～零夜君はなんか、嫌いな食べ物とかある？」

零夜「…いや、特に無いな。」

はやて「じゃあ…カレーでいいかな？」

零夜「ああ、頼むよ。」

そして、俺はカレーが出来るのを待っていた。

少しして、カレーが出来たので、二人で食べ始めた。

はやて「そう言えば、此処は地球か？て聞いてきたけど、何でまたそないな変な質問を？」

零夜「あ～…それはだな…」

俺は自分のことをはやてに話すことにした

続く…

第1話　少女と少年の出会い「…だってさ」（後書き）

零夜がはやてに、そしてはやてが自分達の事を語りあってる間に、
次回は主人公設定とかを書きます

主人公設定とか

名前

影宮零夜
（かげみやれいや）

年齢　　９歳

髪色　　黒

眼の色　スカイブルー

魔力色　漆黒

魔力変換資質　雷、？？？

所持デバイス

極夜　――――日本刀

ソウルイーター　――――両刃剣

Ｓｈａｄｏｗ＆ｌｉｇｈｔ（シャドウ＆ライト）――――二挺銃

極夜は最初から自分のデバイスだがソウルイーターは父親の、シャドウ&ライトは母親の使っていたデバイス

遥か昔から続く戦士（ソルジャー）の継承者

ある日、住んでいた世界が何者かの手により消滅

その際、昔住んでいた地球の海鳴市に両親によって転送され、はやての家に落下。

そのままはやての家に居候

両親は恐らく死亡

しかしチート過ぎるので生きているかもしれない

戦士（ソルジャー）の継承者として両親に鍛えられ、何でも出来てしまうようになった。

また、あらゆる戦闘技術から学問を学ばさせれた。

本人も、積極的に取り組んでいた。

戦士（ソルジャー）とは

金で戦う傭兵とは違い、自分で戦う戦場を選び、人々のために戦う傭兵のこと

戦士（ソルジャー）は戦いではなく、便利屋のような仕事を普段はしていたり、管理局員だったり、普通に働いていたり、これまでの継承者によって様々である

第2話　こういう展開はお約束「…なのか…？」（前書き）

今回は短いです

第2話　こういう展開はお約束「…なのか…？」

はやて「へぇ～…違う世界から…」

零夜「そう、そしてこの刀の形のペンダントが俺の相棒の極夜。」

極夜「…よろしくお願いします。」

はやて「おわっ！！喋った！！凄いなぁ…」

零夜「で、このブレスレットが父さんの相棒ソウルイーター。」

ソウル「よろしく！！」

零夜「で、この白黒のカードがシャドウ&ライト」

S&L「よろしくね。」

はやて「…じゃあさっき泣いてたのは…」

零夜「…父さんも母さんも…死んじゃったからね……あ……でも生きてる気がしてきた…あの二人なら…」

はやて「？」

零夜「なんせ、馬鹿でかいドラゴンに食われたのに普通に生きてた

し、ここに来る前も、腹に剣刺さってるのに普通に喋ってたし、地震を止めるために地層を叩き斬ったり…砲撃で台風を消し去ったり、次元を斬り裂いたり、空間に穴開けたり…ムチャクチャだったからなぁ…なんか普通に生きてる気がする…」

はやて「それチートすぎるやろ！！」

零夜「ほんとチートすぎだったなぁ…なんか今まで自分がよく耐えたと思うよ…でも…ハァ…」

はやて「…まぁ…よく分からんかったけど…一つ確実に分かった事があるわ。」

零夜「…」

はやて「どこも行くとこ無いってことやな。」

零夜「うっ…」

はやて「なら、ここにいたらええよ。1人より、二人の方が寂しくはないから…」

そこで俺は気付いた
この家には他に誰もいないと

零夜「はやては…1人で…？」

はやて「うん…随分まえから…」

俺はすぐに分かった

はやてはずっと寂しかったんだと
だから、俺の答えは…

零夜「…これから、お世話になります……」

はやて「ホンマか！？」

零夜「ああ、よろしく頼むよ。」

続く…

第2話　こういう展開はお約束「…なのか…？」（後書き）

作者：ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆

零夜「作者が壊れたな。」

はやて「ストーリー構成が完璧に出来てないのに投稿したらしいからね。」

零夜「しかもＡ'ｓを今見直してるらしいぞ」

はやて「はよなんとかせんとあかんな。」

作者：だ　が　後　悔　は　し　て　な　い　ぜ！！

零夜「ダメだこいつ、速く何とかしないと…」

作者：ふはははははははははははは！！

はやて「発狂してるなぁ…」

多分続く…

第3話　父の本があるらしい「…マジかよ…」（前書き）

まーたムチャクチャな駄文になっちまった…

だが後悔はしてません

派手に行くぜ

第3話　父の本があるらしい「…マジかよ…」

零夜が八神家に来て数週間

はやて「そう言えば零夜君、普段着は今着てる服以外無いよね？」

零夜「まあ、そうだな。」

そう、俺は普段着を洗濯してるときはバリアジャケットで過ごしているのだ

ただ、真っ黒なロングコートだから町を歩くと視線が凄まじい。

カッコいいと思うんだけどな…俺は…

まあ季節はずれなのは分かってるよ

今は5月の末だからね。

はやて「だから、今日買いに行かへん？」

零夜「いや…家に居候させてもらって、飯も食べさせてもらってる

のに、さすがにそこまでは世話にはなれないからいいよ…」

はやて「遠慮せんでええよ、お金はお父さんの知り合いの人に、いっぱいもらってるから。」

零夜「そう言う問題ではなくてだな…」

はやて「じゃあ自分に似合う服があるか心配とか？」

零夜「そうでもなくてだな…」

はやて「じゃあ何が問題なん？」

零夜「俺の精神的な問題だ…何から何まで世話になるのは…ちょっとな…」

はやて「だからそんな事気にする必要無いって！！なんなら、出世払いにしといたろか？」

零夜「本気でそうさせてもらおうかな…」

はやて「んじゃ決まりやな！準備して行くで！！」

零夜「お…おう…」

零夜「で…どこに買いに行くんだ?」

はやて「あのデパートや!!」

零夜「うおぉ…でけぇ建物だな…」

はやて「さ、行こか。」

零夜「おお…」

零夜「…。」

一番安い服はどれだ…

似合わなくて良いから一番安い服を買おう…それとその次に安いのを…

零夜「これ安いな…」

何?別世界に住んでいた俺が何でこんなに地球に詳しいかって?

前にも言ったが、俺の両親は地球の日本の此処、海鳴市の出身で、

俺自身5歳までは此処にいたからな。

まあ随分変わってたし、あの頃のことははっきり覚えてないから情報は全く役に立たんがな

はやて「零夜君、ここにいたことあったんや。」

零夜「何故にそれを…」

はやて「考えてる事口に出してたよ。それと誰にしゃべりかけてたん？」

零夜「…ちょっと虚無の存在にな…」

はやて「なんやそれ…」

零夜「そ、そんな事より服はコレにするよ。」

はやて「…うわ…ダサ…さすがにこれはいくら何でも無いわ…」

零夜「まぁ…値段安いのを取ってきたからね…」

はやて「あかん！ウチが選んだる！！」

零夜「え、いや…」

はやて「お！これええんちゃう！？ちょっと着てみて！！」

零夜「あ、いや…その…」

値段たけぇ…

はやて「あかんかな…？」

零夜「……分かった…着てみる…」

……無理、断れないよ
上目使いで頼まれたんだぜ…
絶対に断れない…
けど、正直凄くかわいかった
一瞬見とれてしまったな

で…まぁ…なんやかんやで俺の服は買い終わった。

出来るだけ値段は抑えたけど…けっこう高かった…

で、今は昼ご飯を食べ終わって二人でうろうろしている

はやて「ほんなら、また図書館に行こか。」

零夜「分かった、道はこっちだっけか？」

はやて「うん、あってるよ。」

はやては本当に本を読むのが好きだな。

俺もけっこう読むけどね。

けど…図書館…中広いからまだ、ちょっと迷いそうだ…

そんな不安をわずかに抱きながら俺は図書館へはやての車椅子を押しながら向かう

はやて「また本借りてくるから、零夜君もなんか見てきたら？」

零夜「いや、はやてが借りたい本が手の届かない所にあった時の為について行くよ、俺は別にいいからさ。」

つーか面白そうな本が無いんだよ…
見つけた面白そうな本は全部読んだからな…
だから必然的にはやてに着いていくことになるんだが…
もしかしたらいいのが見つかるかもしれん
ちょっと期待してみるか。

はやて「え～と…あったあった…」

零夜「…ん…？なんだ…？」

俺の視線の先には、漆黒の分厚い本が目に止まった

何故か俺は、その本に吸い寄せられるように、近づき…

手に取った

そのままページをめくる

しかし、ページには何語か分からない言葉が書かれていた
数ページ、絵が描いてあるものもあった

零夜「これは…まさか…」

間違いない

これは父さんが昔持っていた…魔導書に違いない…

なぜこんな所に……あ…確かなくしたとか言ってたな…

まあいいや、パクっていこう。

いや、元々父さんの物だから返してもらうと言う方が良いかな。

「れ…く……零…君…夜君……零夜君！！！」

零夜「……ハッ！」

はやて「零夜君、どないしたん？さっきからずっとその本持って突っ立ってるけど…」

零夜「これ…父さんの物なんだ…証拠に…ほら、影宮剣夜って、父さんの名前が書いてある…」

はやて「何でこんなとこに…」

零夜「父さん…確かどっかで落としたとか言ってたけど…」

はやて「訳わからん…」

零夜「俺も訳分からない…」

まぁ今そんな事話したって意味はないのでとりあえずこっそり持っ

て帰った
ってか読め無いけど…

続く…

第3話　父の本があるらしい「…マジかよ…」（後書き）

さて…続きを…

そろそろ出すか…

第４話　新しい家族が増えるらしいぜ「…マジかよ。」（前書き）

ヴォルケンリッター登場の回

そして零夜とはやてのデート？

第4話　新しい家族が増えるらしいぜ「…マジかよ。」

6月3日
夜

とりあえず今はちょっと眠い
…まだ夜8時か…

しかし気になることがあり、俺は眠れずにいた

零夜「なぁ…極夜…」

極夜『どうしました…？』

零夜「あの本…はやての部屋にあった鎖で封印された本…あれって何だろうな…何か知ってるか？」

極夜『いえ…すみませんが…私にはわかりません…』

零夜「ソウルと、シャドウライトは？何か知らないか？」

ソウル『ん～…何か昔…見たことがあるような…無いような…』

S&L『私も…見たことあるような…無いような…感じね…』

今更だが、実はこのソウルイーターとシャドウ&ライト、遥か昔から存在するデバイスらしい
それこそ何千年前とかの領域らしい…

しかしメモリが容量が少ないらしく、記憶は重要な事以外、全て消えていくらしい
だから昔の持ち主の事はほとんど覚えてないとか。
それと、実は物凄い危険だとか…
でも詳しくは全く分からない

極夜はこの二つを参考に、現代の技術で父さんと母さんが作ってくれた

おっと…長くなりすぎたな…

極夜『零夜…誰に話しているのですか？』
やべぇ、また口に出してたか。

零夜「…虚無の存在（読者の方）にだ…」

極夜『…またですか…』

零夜「…それにこの父さんの本…何語だ…？全く読めない…」
S．L『これは…古代ベルカ文字ね…さすがにこれは…ちょっと読むのは難しいわ…』
ソウル『つーかよォ、何でその本…影の書が図書館にあったんだ？』
零夜「この本は影の書って言うのか。」
極夜『お二人とも無理やり話題を変えられたことには突っ込まないんですね…』
零夜「あー…ちょっと眠いな…極夜、今何時？」
極夜『午後九時です。』
零夜「…若干早いがもう寝るか…」
実は俺は今日と明日、はやてと一緒に寝ることになっている
理由は明日がはやての誕生日だからなんだが、俺はプレゼントをあげることが出来んからな、はやてのお願いを何でも聞くと言うことにしたんだが…
そしたらはやてに
「じゃあ今日と明日、ウチと一緒に寝て！！」
と言われた
おっと、虚無（読者の方）の存在に話している間にはやての部屋に付いたな

コンコン

零夜「はやて、入って良いか？」

俺はノックして、呼びかける

はやて「うん、ええよ～」

ガチャ

零夜「はやて、俺…もう眠いから寝ようと思ったんだが…はやてはまだ起きてるか？」

はやて「うん、でもこの本読み終わったら寝るから、もうすぐ寝るよ。」

零夜「んじゃ、俺もう此処に居て良いか？」

はやて「うん！」

零夜「…」

はやて「……」

はやてはまだ本を読んでいたようだ

はやて「あっ…もう12時…」

もうそんな時間か、はやてを待ってたらいつの間にかそんなに時間がたってたとは…

午前0時

その瞬間

本棚の、鎖が巻かれた本が紫色に輝き出した

はやて「?…」

はやては向こう側を向いていたが光に気が付いてこちらを向いた

そして家が揺れた

俺は飛び起き、はやてを守るように移動する

零夜「…はやて…俺の後ろに……極夜、セットアップ。」

極夜『了解…。』

俺は極夜をセットアップし、漆黒のロングコートを着て、少し薄めの黒い鞘の日本刀を、いつでも抜刀できるように構える
抜刀術の構えだ

本は空中に浮かび上がる

紫色の光がわずかに強まり、本が鎖を破壊せんとしている

はやて「零夜君…」

はやては不安なのだろう。
俺の背中にしがみついている

そして、鎖が弾け、ページが凄まじい勢いでめくられていく。

中身は全て白紙だ

『封印を解除します』

本が喋りやがった…

『起動』

床に円のような物が引かれた

そして円の上に突然４人の男女が現れた。

服は、全員黒いインナーのような物を着ている

「闇の書の起動を確認しました。」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士。」

「夜天の主に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を。」

え～～～～……

これどういう状況だよ……

どないせぇっちゅうねん…

……今なんかはやてみたいな喋り方になったな…

とりあえず…

零夜「あの…どちら様で？」

続くぜ…

第４話　新しい家族が増えるらしいぜ「…マジかよ。」（後書き）

ヴォルケンリッターのセリフあってるかな…心配だ…

第5話　とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」（前書き）

さて、今回は守護騎士の登場2

派手に行くぜ

第5話　とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」

零夜「えーと…とりあえず全員椅子に座っていただいて…」

はやて「とりあえず…名前とかから…」

何があってこうなったかって？

それはな…

－－－－－－－－－－－－－－－

零夜「…主…もしかしてはやての事か？」

で、今はピンク色で髪をポニーテールにした女性に

「貴様…何者だ…」

すげぇにらまれてます

とりあえず…正直に答えとくか…

零夜「俺の名前は影宮零夜。はやてに居候させてもらってる魔導士…いや、戦士(ソルジャー)だな。…貴方は…？」

「私はヴォルケンリッターの「あのさ～…」

話している途中で赤い髪を三つ編みにした少女が話しに入ってきた

また物凄いにらまれてるよ…

「二人で盛り上がってるところ悪いんだけど…こいつ…気絶してるぜ…」

零夜「……はやてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

はやて「ほぇ～…」

はやては目を回していた…

その後、はやてを病院へ連れて行ったのだが…

この人達が付いてきて、石田先生に色々言われたが、海外に住んでる遠い親戚で、はやての誕生日に驚かせようとしてきたと説明したら納得してくれた

…あんた少しは疑えや…

ちなみに俺も親戚ってことになってるんだが、なんか俺達二人が一緒に居るのを見てるときだけ、視線が違う…気がする…

なんかニヤニヤしてたし…

- - - - - - - - - - - - - - -

で、最初の場面に戻るわけだ。
分かったか？

はやて「また始まった…零夜君の虚無の存在への語りかけ…」

おっと…口にでてしまったか…

口に出してしまうのはなんとかしなきゃな…

で、そのあとシャマルさんて言う金髪の女性が自分たちの存在や、
闇の書とかについて、はやてに説明していた

俺か？俺はとりあえずお茶を入れていた

零夜「で、はやてはどうするんだ？」

はやて「せやねー…闇の書の主として……」

おそらく蒐集を命じられる思ったのか、全員の表情が真剣になる

はやて「守護騎士みんなの衣食住を私がしっかり管理せなあかんな。」

「「「「…は？」」」」

拍子のぬけたこえが４人からでた

ちょっと面白かったかも

はやて「みんなの服とか、買ってくるから、サイズとか、はからせてな。」

はやて、どっからメジャー出した

はやて「ポケットから出したよ」

勝手に俺の心を読まないでくれ…

はやて「それは出来へんな～」

零夜「……」

ってかいつの間に読心術なんざ身につけたんだ…

しかもしゃべりながらもサイズは計ってるし…

はやて「最近身につけたんよ～（ほんまは読心術なんか身につけてへんよ～零夜君、たまに顔によくでるしな～♪）」

零夜「俺…ちょっと部屋に戻るわ…」

ん？その後か？
服買ってきてみんなが着替えてた

だがザフィーラが犬…あいや、狼になってたから着替えなかったが…
まぁ本人がこの姿の方が楽って言ってたからそれはそれで良いと思う
はやてとシャマルさんが残念そうにしてたが
まぁザフィーラもたまに着るって言ってたから良いだろ。

こうして、守護騎士４人が新しく家族になりました

続く

第5話　とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」（後書き）

作者：ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆

零夜「ダメだ、完全に壊れてやがる。」

はやて「どうする？」

零夜「斬っとくか。」

はやて「なんでいきなりそこへいくん！？」

零夜「斬れば直ると聞いたから。」

はやて「だれに！？」

零夜「蒼いコートの死神に…」

はやて「それ…作者の別作品の人や！」

作者：お前じゃ俺を斬れねぇよ～♪Ａｄｉｏｓ！

零夜「あ、にげた。」

？？「Ｄｉｅ！！」

シャキィィン！！

作者：ギャアアアアア！！

はやて「作者…斬られたんやな…」

零夜「蒼いコートの死神に斬られたんだろうね…」

この悪ふざけコーナーは続く……

…のか…？

第6話　料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ…」（前書き）

さぁ、そろそろ零夜と守護騎士達を絡ませていくか…

派手に行くぜ

第6話　料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ…」

守護騎士たちが来てから一週間ちょっとたった

最初はみんな、表情が硬かったが、今はやわらかくなってきている

まあ俺に対する警戒心はまだごくわずかにあるみたいだがな

仕方ないよなぁ…　最初にあった時に刀構えてたからなあ……

まあ多分、なんとかなるよな。

なんか心配になってきた……

零夜「はやて、俺…まだみんなにごく僅かに警戒されてるけどさぁ…大丈夫だよなぁ…」

はやて「そうか？みんな警戒してるような様子はないけど…」

零夜「普通では気付かないくらいだからな。」

はやて「大丈夫やって！」

零夜「そう…だよな…！ま、なんとかなるか！よし、今日は俺が昼御飯作るよ！」

はやて「なんでそんな突然に…」

零夜「なんとなくな！それに俺の料理をまだ食べてもらってなかったしね。」

はやて「そういえばそうやな、零夜君料理得意って言ってたし。」

零夜「でも、はやてには勝てないかな…」

はやて「期待して待っとくわ。」

はやて「んじゃ、いただきます。」

「「「「「いただきます。」」」」」

昼御飯はとりあえず、シンプルにオムライスを作った。
ちょいと、隠し味を入れたがな

「「「あっ…」」」

シグナム「…これは…」

シャマル「おいしい…！」

ヴィータ「…前食べた時と味がちょっと違う…はやて、味付け変えた？」

はやて「これは私が作ったんとちゃうよ、零夜君が作ったんやで。」

零夜「…はやてには全く勝てないけどな…」

シグナム「いや、とてもおいしい。」

シャマル「とってもおいしいわ！」

ヴィータ「美味い！おかわり、ある！？」

零夜「ああ、あんまたくさんは無いけど少しはあるぞ、ほれ。」

ヴィータ「ありがとう！」

思っきりがっついてんな…

シグナム「ヴィータ…食べ過ぎだぞ…」

零夜「そうだぞ、おやつにいいもん作ってやるから食べ過ぎるなよ。」

ヴィータ「は～い。」

なに？おやつが何かって？

ストロベリーサンデーだよ！！

作者の趣味全開な気がするが美味いから問題ナシ！！

ザフィーラは甘いのが苦手らしいからコーヒーをいれてやろう。

ヴィータ「美味～い！」

はやて「びっくりやなぁ…こんなんも作れるなんて…」

零夜「味じゃあはやてには勝てないさ…」

はやて「でも、私はこんなん作られへんわ…」

結果

味

はやて＞零夜

レパートリー

零夜＞はやて

これが現実

続く…

第6話　料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ…」（後書き）

作者：あ～…続きが浮かばねぇ…

零夜「まさか行き当たりばったりで書いてるのか…！？」

作者：そりゃそうだ

零夜「駄目だコイツ…」

作者：ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆
まぁお前ははやてといちゃつけるから良いだろ？

零夜「そんないちゃついた覚えは無いんだが…」

作者：こっから先がだな。ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆

続くかも

第7話　見た目って結構大事だぜ？「…そりゃあそうだな…」（前書き）

もう無茶苦茶だ…駄文を極めたよ俺…

第7話　見た目って結構大事だぜ？「…そりゃあそうだな…」

はやて「騎士甲冑？」

シグナム「ええ、我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません。」

シャマル「自分の魔力で作りますから、形状をイメージしてくだされば…」

俺達は、図書館にいた。
ザフィーラは狼形態なので、ヴィータと表で待ってるだろう。もしくは、遊んでいるだろう。

はやて「そっか…そやけど、私はみんなを戦わせたりせえへんし…」

零夜「だったら、服にすれば良いんじゃないか？俺のコートみたいな。」

はやて「そうやな！騎士らしい服！それでええか？」

シグナム「はい、構いません。」

はやて「ほんなら、資料探して、かっこええ～の考えてあげなな！」

で、何故にはやて達はオモチャ屋にいくんだ？

ちなみに俺はザフィーラ連れて帰宅している。

晩御飯の準備しときたいからな。

ザフィーラ「零夜、聞きたいことがある。」

零夜「なんだ？」

ザフィーラ「何故刀のみで、その２つのデバイスを使わないんだ？」

零夜「前にも言ったけど…これは父さんと母さんのデバイスで…なんかかなりヤバい代物らしいんだ…だから無闇に使って何かあったら大変だからな…」

ソウル『オイ…零夜…言っとくが次元を斬り裂いたのは俺の力じゃなくて、剣夜の力だぞ…あとお前も次元斬のやり方は教えられてたじゃないか…』

S．L『空間貫通撃ちもね。』

零夜「……そうだけど……まだ一回もまともに出来てない…」

ザフィーラ「危険と言ってるが、そもそも何が危険なんだ?」

零夜「さあ…?詳しくは聞いたことがないから…」

ソウル『ハァ…わかった。』

S．L『私達が存分に教えてあげるわ…』

ソウル『あのな、まず俺達はかなり古い……原初のデバイスの時代の代物だ。』

零夜「原初のデバイス!?そんな事初めて聞いたぞ!!」

S．L『そりゃあそうよ、今初めて言うもの。』

零夜「うぉい！！」

ソウル『原初のデバイスつっても、原初のデバイスの中でも俺は最新型だな。』

S．L『私はその一つ後くらい。』

ソウル『で、何が危険かって言うと原初のデバイス…第一世代の代物は魔力コントロールが非常に難しいと言うことだ。』

S．L『ちょっと魔力を込めただけで凄まじい破壊力が出たり、大量の魔力を込めたのに全く意味が無かったりするからコントロールが難しい。まぁ私の場合は第二世代だから、かなりマシで、普通には撃てるけど…』

ソウル『俺はそうはいかない。まずは魔力を俺に完全リンクさせなければ、扱うことすら出来ん。』

零夜「じゃあ俺は起動すら出来ないのか…」

ソウル『出来る。まあ扱えるかどうかは知らんがな。』

ザフィーラ「まだ起動してないなら一度起動してみた方が良いのではないか？」

零夜「そうだな…やってみるか…」

ソウル『まずは俺からだな。準備はいいか？』

零夜「ああ、ソウルイーター、セットアップ。」

俺は真紅のロングコートに黒いズボンに上半身の、コートの下は素肌と言う、父さんの使っていたバリアジャケットに姿を変える

手には長すぎず、短すぎずぐらいの両刃剣

Wのような形の鍔の中心に翡翠色の宝石のような物が付いている。

ザフィーラ「……素肌にコート…」

零夜「…父さん…何やってんだか…。」

作者の思惑全開な気もするが、父さんのせいにしておく。

ソウル『…魔力をリンクさせてみろ。』

零夜「どうやるんだよ。」

ソウル『魔力を丁度良いくらいにコントロールしながら俺に魔力を込めろ。』

零夜「…難しいな…」

その後、俺は３０分程で完全にリンクさせることが出来た。

ソウル『まさかここまで早く出来るとは…』

え?何?そんなに難しいのか?

ソウル『魔力コントロールが上手すぎるな…これは面白い…だが続きはまた今度だッ!!』

なんでコイツはこんなにテンションが高いんだ…

だがそろそろ晩御飯の準備をしなければ…

晩御飯は…何にするかな…

夕方過ぎ位にはやて達は帰ってきた。

どうやらデザインは大体決まったらしい

ちょっと楽しみだ。

はやて「さて！みんなの騎士甲冑、いよいよお披露目や！」

零夜「おぉ～…」

パチパチパチ…

地味に拍手しておく俺

はやて「さぁ！みんな！着替えるんや！！」

「「「「はい！」」」」

零夜「おぉ～…みんなよく似合ってるな…」

まぁその後、俺も着替えさせられて一緒に並ばさせられたのは秘密。

続く…

第7話　見た目って結構大事だぜ？「…そりゃあそうだな…」（後書き）

作者：はぁぁぁぁぁ…

零夜「作者、落ち込んでるなぁ。」

はやて「ほんまやなぁ…」

零夜「続きがなかなか思いつかない上に、小説に手が着けられてない事に悩んでるらしいよ。」

はやて「なんでや…」

作者：なかなか思いつかず、さらにはＦＦ１３を一昨日始めたからな…

零夜「ヲイ」

続くかもな

第8話　模擬戦と言う名の真剣勝負「いやそれおかしいから！！」（前書き）

サァァテェェェ！！今回は戦闘だァァァァ！！
俺の本領発揮だァ！！

第8話　模擬戦と言う名の真剣勝負「いやそれおかしいから！！」

始まりは、はやての一言だった――――――――

はやて「零夜君はどれくらい強いん？」

零夜「何故こうなったし。」

シグナム「さあ！戦(や)るぞ、レヴァンティン！」

レヴァンティン（以下面倒なのでレヴァ）『ｊａｗｏｈｌ！！』

零夜「何故こうなったし。」

極夜『諦めたほうがよろしいかと。』

とにかく何があったか聞いてくれ

何?そんな事はどうでもいいから話を進めろ?

だが断る

はやて「零夜君は確か自分で戦士（ソルジャー）って言ってたよね？」

零夜「まあな。父さんと母さんもそう名乗ってたからね。」

はやて「で、シグナム達が騎士…どう違うんかよくわからんなぁ…」

シグナム「あ～…その～…なんと言いますか…」

シャマル「えっと…凄くわかりやすく言ったら、ベルカの優れた魔導師って事ですね。」

零夜「んで、戦士（ソルジャー）ってのは簡単に言えば、”戦う場所を自分で決めて人の為に戦う傭兵”だと言われている。」

シグナム「言われている？」

零夜「詳しくは知らん。なにせ、俺の先祖の時代から…地球で言ったら戦国時代ぐらい…向こうで言えば…古代ベルカ時代くらいの時代から名乗ってるらしい…と言うか、別に一子相伝とかじゃないから多分、先祖ってのはあってんのか間違ってんのかわからない……ただ…」

はやて「…ただ…？」

零夜「戦士（ソルジャー）の名を受け継ぐには、先代から継承を許可された時…俺は許可されたけど…まだ自分に自信がない…」

はやて「自信ない言うけど…零夜君はどれくらい強いん？」

零夜「さぁ…前まで居た世界の原生生物は全種類倒したけど…後は父さんと母さんには全く勝てなかったくらいかな…」

シグナム「……！！では主はやて！私が強さを見極めて見せましょう！！」

零夜「いや、しんどいんだが。」

ヴィータ「諦めた方がいいぞアニキ…シグナムは戦闘狂だからな…」

マジかよ…

ちなみにヴィータはなぜか俺のことをアニキと呼ぶ

何でだろうな

シグナム「シャマル！何処かの無人世界かどこかに転送を…！」

ウワァーオ
この人本気で戦るつもりだよ…

で、最初の場面に戻る訳

Ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？（理解したか？）

零夜「ハァ…極夜…頼む…」

極夜『了解。』

うーわ…シグナムの目がめっちゃ輝いてる…
怖ぇ…

今言うのもアレだが、シグナム達に
「家族なのだから敬語は止めてくれ」
と言われたので止めました。

ま、自分達からはやて対しては当たり前だけど敬語になるらしい。

……ヴィータは普通に喋ってるけどな…

おっと…そろそろか…

零夜「…非殺傷設定ですよね…？」

シグナム「安心しろ、絶対に殺しはしない。刃は魔力で潰してある。」

零夜「…要するにそんな便利なもんついてねーよってことか…」

シグナム「さぁ行くぞッ！！」

ゴッ！

いきなり突っ込んできたァーーーッ！！！しかもはえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

ガキィン！！

零夜「ウオッ…！」

シグナム「…クッ…！！」

横薙の一閃を受け止める

シグナムが押し切ろうとするが、俺は押し返す

零夜「タアッ！！」

そのまま俺が押し切る。

シグナムは後ろに跳ぶ

だが俺は追撃する。

逆袈裟からの斬り下ろし――――――――

――――――――避けられる

そのまま斬り上げる――――――――

受け流される

だが斬り上げた勢いで飛び上がり、後ろ回り込み、反転しながら斬りつける

零夜「タァッ！」

ガキン！

零夜「んなっ！？鞘！？」

鞘で防がれるとは…

シグナム「やるな…！」

零夜「クッ…」

俺は後ろに飛ぶ

予想外の事態が起きたときには一度下がり、体制を立て直せ。

父さんに言われた事だ。

シグナム「レヴァンティン！！カートリッジロード！！」

レヴァ『ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ.』

ガコン！！

ゴウッ！！

うおぉ…剣めっちゃ燃えてるし……マジかよ…この人本気で潰しにかかってきてるよ…

魔力で刃潰した意味無いじゃん…

シグナム「紫電…一閃！」

零夜「極夜、やるぞ。」

極夜『分かっていますよ。』

零夜「行くぞ…雷龍爪！！」

バチバチッ！！

極夜が激しく帯電する。

俺は帯電した刀で燃え盛る剣を迎え撃つ。

零夜「オラァァァ！！」

ガキィン！

ゴオッ！！

ぶつかり合った衝撃波だけでクレーターが出来る。
そして鍔迫り合いへなだれ込む

シグナム「ウグッ…」

零夜「ハァァァァ…！」

ガキン！

再び離れる

シグナム「レヴァンティン！！」

レヴァ『ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ！』

零夜「うおっ！？」

剣が伸びた！？
…いや…あれは…蛇腹剣……鞭状連結刃…か…厄介だな…

シグナム「ハァァァァッ！！」

零夜「チッ…」

大地を這う大蛇のごとく、連結刃が迫ってくる。

零夜「…そこかッ！」

シグナム「何ッ！？」

俺に剣が当たる寸前に回避し、先端の少し下を極夜の鞘で叩き、鞘に巻き付けさせる。

零夜「ウオォォォォォォォォォォォォ！！！！」

そのまま鞘に巻きついた状態のレヴァンティンを鞘で引っ張り、剣を落とさせる。

シグナム「しまっ…」

チャキッ

零夜「勝負有り…だな…。」

首に刀を突き付ける

シグナムは息を吐いた後

シグナム「ああ…」

小さな声で言った。

んでもって帰宅。

続くッ！

第8話　模擬戦と言う名の真剣勝負「いやそれおかしいから！！」（後書き）

作者：やはり戦いは良いものだなァァァァァァァァ！！
ヒャハハハハハハハハ！！

零夜「出た…作者の病気が…」

作者：すげぇどうでも良いけど、この小説の話の先が全くみぇねぇ…

零夜「物凄い突然だな！オイ！！」

作者：ま、気分とノリだけで書いてるからだろうけどな

零夜「オイ！」

作者：ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆

続けようかな。

第9話　とりあえず謙遜はしすぎるな「…意味分からん…」（前書き）

相変わらずサブタイが意味不明

第9話　とりあえず謙遜はしすぎるな「…意味分からん…」

零夜「…ただいま…」

はやて「あ！おかえり～！」

ヴィータ「おかえり～…どうだった～？まあだいたい分かってるけどな～。」

シグナム「…私の負けだ…」

ヴィータ「ふ～ん…やっぱりそうk…えええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ザフィーラ「何…だと…」

零夜「たまたまだ…たまたま…多分もっかいやったら負けるさ…」

シグナム「何がたまたまだ、鍔迫り合いで普通に押し返してきたじゃないか。紫電一閃やシュランゲフォルムも使わされてしまったしな…」

零夜「……あん時は正直死ぬかと思った……いきなり剣が燃え出すから…」

シャマル「零夜君だって黒い雷を刀に纏わせてたじゃない。」
零夜「いや、あれは仕方なく…」

ヴィータ「アニキ！今度はあたしに見せてくれ！」

零夜「あ…ああ…」

何か物凄い気迫なんだが…

ま、いっか。

続く

第9話　とりあえず謙遜はしすぎるな「…意味分からん…」（後書き）

零夜「短すぎんだろ！！」

作者：What's you say？（何か言ったか？）

零夜「…斬る！！極夜！」

極夜『…ハァ…了解…』

零夜「うおらぁぁぁぁ！雷龍爪！！」

作者：HA☆HA☆HA☆HA☆HA☆HA☆HA☆HA☆HA☆HA☆！きかねぇよ！！その技、誰が考えたと思ってんだァ！？

零夜「何ッ！？」

作者：わざわざ俺が体現して作った技だぜェ？

ハッハー！！吹っ飛びなァ！！

Real　impact！！

零夜「ギャァァァァァァァァァァァ！！！」

きっと続くさ！

第１０話　なんてことはないただの一日「…まあそれもいいか…」（前書き）

さあ、今回はなんてことのない一日

だがしかし…

今回も派手に行くぜ

第10話　なんてことはないただの一日「…まあそれもいいか…」

もうじき6月も終わり。

後僅かで7月だ

零夜「暑い…」

はやて「ほんまやなぁ…」

ヴィータ「アイス…食べたい…」

零夜「お前さっき3本も食べただろ……これ以上は腹壊すぞ…」

ヴィータ「でも暑いし…」

零夜「まぁ食べたければ食べればいい……どうなるかは知らんがな…」

零夜「昼御飯…何作ろうか…」

はやて「冷麺にせえへん？」

零夜「そうするか。」

はやて「それじゃ、いただきます！」

「「「「いただきます。」」」」

ヴィータ「ん～！やっぱりはやてとアニキの作った料理はギガうまだな！！」

シャマル「負けてられない…今度私も…」

「「「「それだけは止めてくれ！！」」」」

シャマルの料理は…ダメだ…壊滅的とかの次元じゃない…

あれは暗黒物質（ダークマター）だ…

いや、未元物質（ダークマター）か？

まあとにかく不味いとかの話じゃない。

いや…もうアレは食べ物ではない…

一部見た目からヤバいのもあるしな…

食べた俺が3日間寝込んだからな。

さて…夜になった

…そろそろ…

行くか…

第１０話　なんてことはないただの一日「…まあそれもいいか…」（後書き）

作者：さて…そろそろ本腰を入れますか…

零夜「まさか本気ではなかったのか！？」

作者：いや、俺の本領発揮の先を見せてやるよ…戦闘という名のな！！

続けてやるさ

第１１話　戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！

サブタイのネタが分かる方は居るでしょうか…？

あと、感想制限外しました

小説タイトル変更しました

今回も派手に行くぜ

第11話　戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！

深夜

零夜「……こっちか…。」

俺は今、一人で町を歩いている。

はやてや守護騎士たちは全員よく眠っている。

何故、こんな事をしているかと言うと…

少し前から現れる、強力な謎の魔力反応を調べるためだ。

もし、はやて達に危害が加わるようならば、斬り捨て、撃ち抜かねばならない。

零夜「……結界…！！」

Ｂｉｎｇｏ…

零夜「大当たりだ…！数日間粘ったかいがあった…」

極夜『魔力や気配を隠さなくていいのですか？』

零夜「いや、いい。あの状況下で彼女達に気付かれるほど俺は弱くはないだろう?まずはただ隠れて観察だ。」

零夜「行くか…」

数メートル歩いた先

二人の魔導師…年齢は俺と同じくらいの女の子か…

白い服と黒い服…

その二人が今にもぶつかり合わんと対峙している。

よく見れば、間にはなにか…水色の宝石のような物が浮いている。

……ロストロギアの類(たぐい)か…

…あんなモンをあんな女の子達が欲しがるとはな…

恐ろしい時代が来たモンだぜ…

……何で俺こんなオッサンくさいセリフ言ってんだ…？
俺…まだ9歳だぞ…
はやてと同じ年齢だぞ…

極夜『彼女達…話は終わったみたいですよ…』

零夜「む…このままだと戦うになるな…止めた方が…ってもう無理か…！」

二人ともぶつかり合おうと既に突っ込んでいる

極夜『……！何者かが転移してきます！』

零夜「何ッ…！」

二人の女の子の間に黒い服の一人の少年が割り込む。

零夜「…管理局員…か…。」

しばらく様子を見ようとした瞬間。

黒い服の女の子の側に犬のような耳の付いた女性が魔力弾を放つが、少年の障壁に阻まれる。

さらに撃ち続けるが避けられている

その隙に、金髪の黒い服の女の子が宝石を回収しようとした時、真っ黒少年が魔力弾を撃とうとしている。

まさか本気で撃つ気か！？

そして…発射された…

この距離では回避は無理だろう…

そう思った瞬間

魔力弾が叩き斬られた。

俺のバリアジャケットに似た、少しデザインが違う黒いコートの少年が手にした刀で切り裂いたのだった

そして、俺はその少年の右手に握られた刀から目が離せなかった。

なぜなら

色違いの極夜が握られていたのだから…

黒いコートと金髪少女と犬耳の女性がそのまま飛び去った

そして…無意識の内に、俺はそいつを追いかけていた…

そして追いつき…転送される前に…

俺は斬りかかっていた……

ガキン！

？？「チッ…管理局か…！？フェイト！アルフ！先に行け！！俺がこいつを引き受ける！！」

フェイト「でも…火彩（ひいろ）が…」

零夜「うおぉぉぉぉぉ！！！！！」

ガキン！

火彩「急げ！！コイツは俺の仕事だ！！」

アルフ「フェイト…」

フェイト「…絶対帰ってきてね…」

ガァン！

ガキン！ガキンガキンガキン！

ギャリギャリギャリギャリギャリギャリ！

キィン！

火彩「……行ったか…」

零夜「…お前は何者だ…」

火彩「…どうした”刀夜”？もう終わりか？だらしないな。」

零夜「なんだと！負けているのはそっちだろう！！……！？」

突然の問いかけに、俺は初めからどう返せばいいか知っていたかのように返す

そして、”刀夜”と言う名前…

俺の名前は影宮零夜のはず…ならなぜ…〝刀夜〟と呼ばれ、反応した…

火彩「…ヤッパリな……会いたかった…会いたかったぞ!!刀夜ァァァァァ!!!」

ヤツ…ヒイロと言ったか…ヤツが突っ込んで来た

続く!

第１１話　戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！

作者：さて…そろそろ無印に介入を…

零夜「マジか…」

作者：させずにはやてとイチャイチャさせるか。

零夜「うぉい！！／／／／／」

はやて「え…ウチと…零夜君が…あわわわわ……／／／／／／／／／」

零夜「はやてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！しっかりしろぉおおおおおお！」

作者：ぶべらっ！！

バタッ！

零夜「作者が倒れたァァァァァ！？」

作者：我が生涯に…一片の悔い無し…

零夜「なんじゃこりゃァァァァァァァァァァ！！！」

多分まだまだ続くッ！

第１２話　大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」（前

今回は重要な話

第12話　大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」

火彩「刀夜ァァァァァ！！！」

ガキィン！

零夜「クッ…俺は…刀夜なんて…名前じゃ……ない！！！」

火彩「いいや！体は違おうとも、お前の魂は刀夜だ！！」

ガキン！ガキン！ガキン！

零夜「訳のわかんねぇこと…言ってんじゃねぇぇぇ！！」

シャキィン！

火彩「…チッ…やはり…記憶が…クソッ！」

ヤツの刀が燃え上がる

火彩「思い出せ！”刀夜”！！炎龍爪！！」

ゴウッ！

零夜「何なんだよ！お前はァ！！雷龍爪！！」

バチッ！

「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

ズガァァァァァン！！！！！

零夜「ソウル！！」

ソウル『やっと出番だ！！任せとけ！！』

極夜を待機状態に戻しながら、ソウルイーターを展開する。

火彩「フッ…なら！白夜！」

白夜『了ォ解だァ！モード2！バスターソードォ！』

日本刀が巨大な片刃の大剣に変形した。

火彩「サァ！行くぜ！」

だが！！

零夜「うおらァァァァァァァァ！！フラッシュセイバーァァァ

ァァ！！」

高速で踏み込みながら薙払うように斬り込む。

ガギィィィン！

火彩「うおッ！？」

ドゴォン！

大剣の腹で防がれるが、無駄だ。

衝撃で吹き飛ばしてやった。

だがまだ終わらん！

バチッ！バチバチバチ！

激しく帯電し、黒い雷が刀身に集まって行く

零夜「ライトニングドライヴ！」

刀身に集まった雷を吹き飛んだヤツにお見舞いする。

バチバチバチバチバチバチ！
ズガァァァン！

火彩「無駄だ。」

ヤツの前に黒い靄のような壁が発生し、ライトニングドライヴを防いでいた。

火彩「さて…これで少しは思い出せ…よッ！！」

バチバチバチバチバチバチバチバチバチ！！！

零夜「どう言うことだ！何故俺の黒雷を出せる！？」

火彩「…これはお前がやっていたことだぞ？”刀夜”。」

零夜「は？」

火彩「…はぁ…ヤッパリか…マズは話を聞いてもらわなきゃならんな…」

零夜「何なんだよ…」

火彩「俺の名前は　闇咲火彩（やみさきひいろ）　、魔力は影と火炎の魔力変換資質、戦士《ソルジャー》の一人…」

影…？聞いたことがないな…

火彩「一応、影の魔力はお前が使っていたんだぞ？それに俺とお前で伝説とか言われてたらしいしな…」

零夜「俺が…？お前と…？……うっ！！」

頭が…痛い…！？

火彩「おい！？大丈夫か！？」

なんだ…これは…！？

頭の中に…何か…

「うおらぁぁぁ！」

「んなっ！？」

「…勝負あり…だな…」

「チェッ…これで１００戦４０勝４０敗２０引き分けか…」

「記念すべき１００戦目は俺の勝ちだな！火彩！」

「次は負けねぇぞ！刀夜！」

「刀夜！そろそろメシにしようぜ！」

「慌てるな火彩…落ち着け…！」

「……ざっと１０００００００…か…相変わらず無茶だな…火彩…」

「ハッ！刀夜…お前は人のことは言えないだろ…」

「さて…そろそろ行くか？」

「ああ…行くか…」

「夢を抱け…」

「戦士（ソルジャー）の誇りは…！」

「「絶対に忘れるな！！」」

シャキィン！

「「いらっしゃいませぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」」

ダッ！

「よぉ…刀夜…生きてるか？」

「火彩か…まぁ…なんとかな…」

「全部…殺ったか…」「ああ…けど…もう無理っぽいな…」

「…あの子達は…？」

「うまいこと逃げたさ…なに…”彼女”が付いてるんだ…多少なら何とかなる…」

「そうか…だったら…もう良いか…」

「…ああ…」

「なぁ…刀夜…俺達さ…英雄に…なれたかな…？」

「…ああ…きっと…な…」

「もう眠いな…」

「俺も…」

「ちょっと…寝るか…」

「ああ…じゃあ…お休み…刀夜…」

「お休み…火彩…」

零夜「……うああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ！！！！」

火彩「だ…大丈夫か…？」

零夜「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ………夢を…抱け…！」

火彩「…！戦士（ソルジャー）の誇りは…！」
「…絶対に忘れるな…！」

火彩「…刀夜…記憶を取り戻したのか…？」

零夜「だから…俺は刀夜じゃない…零夜だ……記憶は…一部は思い出した…悪かったな…火彩…」

火彩「いや、気にするな…俺も完全に記憶が戻ってる訳じゃない…一部欠けている…」

零夜「…何故…俺達は生きている…？俺達は死んだだろう…」

火彩「ああ…それはな…時空管理局が俺達を蘇らせようとしたらしくてな…何せあの時死んだ後…どう言うわけか、伝説の戦士達とかなんとか言ってちょっと有名になったらしくてな…まあ…肉体は…子孫の体らしいけどな…」

零夜「…とにかく…問題は管理局か…やはり腐ってやがるな…」

火彩「厳密には、”上層部”がだがな。」

零夜「…うかつにつぶしにはかかれないな…」

火彩「オイオイ、何百年かぶりに親友同士が再会出来たんだ、しけた話はまた今度にしようぜ。」

零夜「まぁ…魂は再会できた訳だからな…」

続く…

第１２話　大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」（後

作者：…今回はふざけねぇぜ…さすがにな…

零夜「…。」

火彩「…。」

作者：……。

続く…のか…？

第13話　懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ…「…それでもいいじゃないか…

さぁ、今回は零夜と火彩の会話だけ

ゆえに短いです

だが

派手に行くぜ

第13話　懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ…「…それでもいいじゃないか…」

火彩「英雄になりたければ夢を持て、戦士（ソルジャー）の誇りは決して忘れるな、魂は常に強くあれ。」

零夜「俺が言った言葉だな…覚えてたのか…」

火彩「そうだ…戦士（ソルジャー）ではお前のほうがもともと先輩だったんだよな…」

零夜「ああ…」

火彩「いまはどうよ？何やってんだ？」

零夜「まぁ家族と楽しくやってるさ。お前は？」

火彩「フェイト…さっきの子と捜し物をな。」

零夜「それは、あの水色の宝石みたいなヤツか？」

火彩「ああ、ジュエルシードと言うらしいんだが…」

零夜「…なるほどな…お前は……（ニヤニヤ）」

火彩「……なんだその（ニヤニヤ）って…」

零夜「いや、何でもない。」

火彩「お前はどうなんだ…」

零夜「まあ…色々あったな…住んでた世界が吹き飛んで、両親は生きてんだか死んでんだか分からないし、地球に飛ばされて、…まぁ…今は知り合いに居候させて貰ってる。」

火彩「へぇ…今度、暇ができたら行っても良いか？」

零夜「ああ、いつでも歓迎だ…」

零夜「…もう夜明けか…」

火彩「昔も…こうやってよく日の出を見たよな…」

零夜「ああ…」

火彩「…懐かしいな…」

零夜「……そう言えば…帰らなくて大丈夫なのか？彼女達が心配してるんじゃないのか？」

火彩「そうだった…！悪い！また今度会おう！」

零夜「ああ…！じゃあな…」

――――――――――――――――――――

火彩「…ただいm「火彩！」あぐぼぁぁ！！」

フェイト「火彩ぉぉ…全然帰ってこないから心配したんだよ……」

火彩「あー…すまん…色々あってな……」

フェイト「あの人は…誰？」

火彩「ああ…アイツはな……俺の大切な…

――親友だ――

続く…

第13話　懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ…「…それでもいいじゃないか…」

作者：思い出って結構美化して行くよな

零夜「一部な。」

火彩「古いほどな。」

作者：すぐ記憶が消えていく俺が言うなって話だがなｗｗｗｗｗ

零夜「アレか、お前昨日の晩飯覚えてないとかそんなんだろ。」

火彩「昔の話だされたら、（俺は過去を振り返らない）とか言ってごまかすパターンだな。」

作者：いや、ストレートに覚えてないと言うが？と言うか…興味ないね…

続くと思われる

第１４話　あまり家族に心配はかけるなよ「…お前が人のこと言えるのかよ…」

今回は怒られる話

何？

訳が分からないよ？

なら本文を読むんだ。

派手に行くぜ

第１４話　あまり家族に心配はかけるなよ「…お前が人のこと言えるのかよ…」

零夜「４：３０…よし…まだみんな寝てるな…」

ってか俺傷だらけじゃないか…不味いな…俺治癒魔法なんか使えないぞ…

まあほっとけば治るだろうが、あまり心配を掛けてはな…

まあいいか

そんな事より…眠いな…

零夜「２時間程寝るか…」

本当に2時間後

零夜「うん…？うぁぁぁ……本当に丁度2時間かよ…」

さて…そろそろ起きなければな。

零夜「はやて、おはよう。」

はやて「あ、おはよう零夜君。」

相変わらず朝早くから凄いよな…

零夜「んじゃ、何作る？」

はやて「…その右腕…！どうしたん！？凄いケガしてるけど…！」

零夜「ああ、これか、ちょっと5時位に外走って思いっきり転けたんだ。」

…ってか…これ火傷じゃないか…不味いな…火彩と戦ってたから…アイツの蒼炎が…

はやて「とにかく、後でシャマルに見てもらわな！」

マズい…！バレる…！

零夜「だ、大丈夫大丈夫！これくらいすぐ直るって！ははははは…」

はやて「……ていっ！」

零夜「……ぐっ…」

傷口を叩くとは…なかなか…！
だがソルジャーをなめてもらってはこまる！
こちとら全身に銃弾浴びて剣で切り裂かれて、大砲の直撃を食らっても生きてるのだよ！

だから傷を軽く叩かれた程度では……

はやて「…ていっ！」

零夜「うがぁっ！？」

まさかの締め付け…だと…！？
力が入ってないのに…痛い…だと…！！

はやて「ヤッパリ無理してる！」

零夜「…大丈夫だ…問題ない…」

はやて「死亡フラグ建ててどないすんねーん！」

バコーン！

零夜「うおおぉぉ…痛てぇ…」

はやて…どっからハリセンだしたんだ…

ガチャ…

シャマル「おはようございます、はやてちゃん、零夜君…って…どうしたの!?その腕!?」

零夜「…朝から走って思いっきり転けた…」

シャマル「これ…転けたとかじゃないでしょ!明らかに火傷じゃない!」

零夜「……。」

はやて「れぇぇぃぃぃやぁぁぁくぅぅぅん!!?何があったんやぁぁぁ!?何してたら火傷なんかするんやぁぁぁ!?」

シャマル「とにかく、すぐ治療しますから!後で話はきかせてもらうわ!」

朝から憂鬱だ…

ツイてないぜ全く…

はやて「で?朝早くから何してたんや!?」

零夜「え～…色々細かい話を飛ばすと……深夜からずっと親友と大ゲンカしてました…」

「「「「「友達いたのか!」」」」」

零夜「……居るよ…1人だけ…」

ヴィータ「て言うか…どんなケンカしたら腕に火傷に全身傷だらけになるんだよ…」

零夜「刀で斬り合いを……こっちは黒雷、あっちは蒼炎を纏いながらだけど。」

「「「「「それはケンカじゃなくて殺し合いだ!!」」」」」

零夜「なん…だと…」

ちなみに今の俺の表情

（。□。；）なん…だと…!?

零夜「昔からこうだったからな…」

シグナム「昔って…4歳か5歳くらいからそんな事してたのか…?」

零夜「あ～…そこんとこ説明しなければな…」

続く…

第１４話　あまり家族に心配はかけるなよ「…お前が人のこと言えるのかよ…」

作者：家族に心配を掛けるなよ

零夜「アンタが他人のこと言えんのか！！」

作者：うるせぇ！お前よりはマシだ！

零夜「言ってんのはお前の頭がだよ！」

作者：黙れッ！！そんなお前ッ！修正してやるッ！

バコーン

作者：ガハッ…

はやて「これでよし。」

零夜「はやて…ハリセンなのに物凄い音がなったんだけど…そして作者が気絶してるんだが…」

はやて「気にしたらあかんよ♪」

作者：なかなかやるじゃねえか…グフッ…

続かないと思っていたのか！

第１５話　俺は英雄じゃない、これまでも、これからも…「…お前は英雄じゃな

今回は零夜の昔の回想ｐａｒｔ１

サブタイのネタわかる人いるかな…

ヒントは某固体金属の歯車の蛇

派手に行くぜ

第15話　俺は英雄じゃない、これまでも、これからも…「…お前は英雄じゃな

零夜「そうだな…何処から話すかな……まああの辺で良いか……あれは…もう何百年も前…古代ベルカの時代…ああ、はやてに分かるように言えば…丁度日本の戦国時代くらいだな…まあその頃俺はある傭兵団に居たんだが…」

――――――――――――――――――――

火彩「刀夜！オイ刀夜！」

刀夜（零夜）「なんだよ火彩…うるせぇな…」

火彩「お前、正気か!?この傭兵団を出るなんて、何考えてるんだ!?」

刀夜「…火彩…俺はもう無意味な戦いは嫌なんだ…金だけ貰って、戦い、人を殺し、全てを破壊し…消し去る…それが…それが何になるんだ…!」火彩「だからって、どうするつもりだ!?傭兵団を抜けて、傭兵を続けるにしても、依頼主(クライアント)をどうやって探すつもりだ!?」

刀夜「…もう…俺は兵士(ソルジャー)にはならない……」

火彩「…お前…じゃあ…普通の生活をするのか!?」

刀夜「いや…俺の手は…もう血で汚れすぎているさ…何より…俺の血が…細胞が…遺伝子が…俺のありとあらゆる全てが戦いを欲している…もう普通には戻れないさ…」

火彩「だったら!此処にいろよ!!此処でなら!お前は普通で居られるだろ!」

刀夜「けどな…火彩…俺はな…やりたいことが見つかったんだ…」

火彩「やりたいこと…?」

刀夜「もっと…もっとたくさんの人の為に戦う…金額だけで依頼主(クライアント)の指示を聞くのではなく…もっと”心から助けを求める人達”のために…俺は戦いたい…兵士(ソルジャー)としてではなく…1人の戦士(ソルジャー)として…」

火彩「戦士(ソルジャー)…」

刀夜「それに…団長にはもう話は付けてある…」

火彩「……。」

刀夜「…俺は…明日の朝には出発する…だから…しばらく1人にさせてくれ…」

火彩「…わかった…」

――

刀夜「さて…行くか…」

ドアを開けると、火彩が立っていた

刀夜「…火彩…」

火彩「見送るよ…」

刀夜「…ああ…」

火彩「…」

刀夜「…懐かしい…な…2人でよく失敗をやらかして、団長に謝りに行ってたよな…」

火彩「ああ…そうだな…「自分で戦車潰しちゃいました！」とか、「足止めのはずが間違って全滅させてしまいました！」とか。」

刀夜「その後、団長に何故か「なかなかやるようだが、儂を超えるには、まだまだだな！ワッハッハッハッハ！」とか言われたけど。」

火彩「全く…良い人なんだか…バカなのか…」

刀夜「けど…強さは本物だな…力も心も…」

火彩「頭の良さもな…」

刀夜「さて…見送りは、門までていいぞ、火彩。」

ガチャ…

「「「「「「刀夜さん！本当に此処を出るんですか！！」」」」」」

たくさんの仲間達が建物の外に来ていた。

行かないでくださいよ！

とか

何でなんですか！？

とか

色々と聞かれる。

刀夜「…すまない…」

俺には謝る事しかできない。

団長「コラコラお前ら！そんなんじゃ刀夜が旅立てないぞ？いくら龍神傭兵団最強の雷光（ライトニング）の影（シャドウ）と呼ばれてるからって、ずっと個々に居てくれる訳じゃないだろ？」

刀夜「団長…」

団長「ま、気持ちは分からんでもないがな。今や刀夜と対等に戦えるのは火彩位だからな。」

火彩「対等すぎて決着がつきませんがね…」

団長「…まぁ…とにかく…刀夜！何かあったら儂らに言え！お前は離れても儂らの仲間だ！そして何時でも戻ってきてかまわないぞ！」

刀夜「ありがとうございます…団長…」

火彩「刀夜…元気でな…」

刀夜「火彩…ああ…！」

刀夜「じゃあ！また会おう！みんな！」

火彩「行った…か…」

団長「これからは、お前さんに頑張ってもらわなきゃならんな、火彩。」

火彩「ええ…」

団長「アイツに言われて初めて気付いた…今までの儂らがどんな戦いをしていたのか……「ただ戦うだけでは駄目だ…！」か…」

火彩「…俺も同じ事を言われましたよ…」

団長「しかし…儂らは…戦うことでしか自分を表現できない…だから…せめて…人の為に…戦うことにしよう…」

火彩「…はい…！」

団長「さあ！みんなを集めてくれ！みんなにこれからのことを話さなければならん！」

刀夜「さて…まずは何処に行くかな…」

極夜『魂に従って進むとか言ってなかったか？』

刀夜「だから迷ってんだろうが…」

極夜「目的地が無いくせによく言うぜ。」

刀夜「ま、いいか…適当に進むとしよう…」

続く……

第15話　俺は英雄じゃない、これまでも、これからも…「…お前は英雄じゃな

作者：回想が予想以上に長くなってしまった…
まさか分けるハメになるとは…

零夜「下書き書いたんじゃなかったのか？」

作者：なんか改変し過ぎて原型がなくなりつつある…

零夜「しかも授業中に下書き書いてたんだって？」

作者：懐かしいねぇ…中3を思い出すなぁ…
零夜「確か作者火曜日から中間テストじゃ…」

作者「テスト？興味ないね。」

続く…だと…

第１６話　フラグは建てすぎるのは良くない「…お前は死亡フラグ建てまくってるな」

零夜の回想ｐａｒｔ２

やばい、過去回想編だけでかなり長くなりかねん。

派手に行くぜ

第16話　フラグは建てすぎるのは良くない「…お前は死亡フラグ建てまくってるぞ」

刀夜「さて…次は何処に行くかな…」

あれから、2年が過ぎた

俺は戦士（ソルジャー）として、あらゆる世界を巡り、人助けをしていた

わかりやすく言えば旅する何でも屋だ

今は砂漠のど真ん中を歩いている

刀夜「…流石に…暑いな…」

砂漠を大量の水と少しの食料でわたろうなんざ無茶だったか…

まあ金なかったから水しか買えなかったんだが。

まあしばらく歩き続けた…

刀夜「あ～…くそっ…ふらふらする…今何処だ…？」

俺は地図を取り出す…

刀夜「いまが…このオアシスか…ベルカの王国の近くだな…行ってみるか…」

俺は夜になる前にはベルカにたどり着けた。

入るのに少し時間はかかったがな…

戦争やってるから仕方ないか…

と…まあ俺は城下街にやってきた

此処なら宿もあるし、情報も手にはいるだろうしな。

刀夜「…へぇ…なかなか良い街だな…」

極夜『全くだ。戦争中とは思えんほど綺麗な街だな。』

刀夜「とにかく、今日は宿を探そう。一番安いところでな。」

極夜『…野宿でよいのではないか?野宿ならタダだぞ。』

刀夜「バカか…野宿だと深夜に見つかったら面倒なことになるだろう…」

極夜『それはそうか…戦争中だから敵が潜入してきたみたいに勘違いされたらたまったもんじゃないしな。』

刀夜「…どこが一番安いだろうか…誰かに聞くか……」

俺はたまたま通りかかった通行人に尋ねた。

どうやらこの先の路地の角の所らしい。

刀夜「ありがとうございます…では…」

歩いていると…挙動不審な金髪の少女を見かけた。

周りをキョロキョロと見渡している。

道に迷ったのだろうか…

残念ながら俺はお人好しなので、そう言うのは放ってはおけないのだった…

刀夜「…大丈夫かい…？」

？？「え…あ…いや…」

刀夜「…道に迷ったのかい？」

？？「いえ…そう言う訳では…」

刀夜「…家出…か…？」

？？「え…ええ…まあ…そんな所です…」

刀夜「…帰った方がいい…この国は戦争中なのだろう？いつ何が攻

めてくるか分からない…死にたくなければ悪いことはいわない…」

??「…家の中にいても…何も変わりません…何処に行っても…結局戦いばかりです…」

刀夜「…なら君は…何故人々が戦ってると思う?」

??「え…?」

刀夜「どう思う?」

??「…わかりません…何故みんな戦っているのか…」

刀夜「少し難しかったかな?けど、この答えは人から教えてもらっては駄目なんだ…自分で気付かなければならないモノだからね…」

??「自分で…」

刀夜「…すまない…話がだいぶそれてしまったね…君は家出したのはいいがどうしようもなくて途方にくれていた、そして家には帰りたくない…そう言うことでいいか?」

??「…はい…」

「一番安い宿でいいなら、付いてくるといい…まぁ…数週間くらいはこの街にはいるからな…どうする?」

??「お…お願いします…」

顔が紅いな…何でだ?まあいいか

刀夜「おっと…自己紹介がまだだったな…俺は影宮刀夜。戦士（ソルジャー）をやっている。」

？「戦士（ソルジャー）？」

刀夜「分かり易く言えば、世界中を旅する何でも屋と言ったところだな。」

？「わ…私は…えっと…えっと……ヴィヴィオと言います！」

よく見たら赤と緑の虹彩異色の瞳か…随分珍しいな……ん…？……どっ…かで……気のせいか…

刀夜「じゃあヴィヴィオ、いくか。」

ヴィヴィオ「はい！」

刀夜「ッ！伏せろ！」

ヴィヴィオ「え？きゃあ！？」

俺はヴィヴィオを抱え込み、地面に伏せた

刹那、ヴィヴィオの頭があった場所に弾丸が飛んできて、地面にめり込んだ

刀夜「そこか！」

一瞬何かが光った瞬間に俺は雷を放った

黒雷は夜には認識しにくい

叫び声が聞こえてきた

直撃だな

続く…

第１６話　フラグは建てすぎるのは良くない「…お前は死亡フラグ建てまくってるぞ。」

作者：はっきりとしたＳｔｓフラグとＶｉｖｉｄフラグを建てる俺。

零夜「死亡フラグの塊の作者が死亡フラグ以外を建てるのは珍しいな。」

作者：もはや存在そのものが死亡フラグと化してしまったぜ

零夜「行動、言動、ほとんど全て死亡フラグだからな。」

作者：中学時代で５００００本くらい死亡フラグ建てたぞ。まだ回収されてないけど。

零夜「されたらダメだろ…」

作者：いつでも死ぬ覚悟はできてるぜ

続ける…！続けてみせる！

第17話　秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない「…た

あまりびっくりされなかったサプライズとかね。

今回は戦い！戦闘！バトル！

派手に行くぜ！

第17話　秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない「…た

次の日

刀夜「さて…」

一応、何も無かったな…

しかし…昨夜の狙撃は明らかにこの子を狙っていた…

何故この子が狙われた…？

金髪で虹彩異色、色は紅と翠……

やはりなにか引っかかる…

ヴィヴィオ「…ん…」

刀夜「…起きたか…」

ヴィヴィオ「…ん…ん～…おはようございます…刀夜さん…」

刀夜「ああ……おはよう…」

何にせよ、昨夜のヤツだけで終わるとは思えん。

十分に警戒するか…

いや、狙われるなら何かある…家に帰すべきだろうか…

しかし本人がそれを拒んでいる…

さて、どうするかな…

ヴィヴィオ「あの…刀夜さん…？」

刀夜「ああ、すまなかったな…朝食、食べに行くか。」

ヴィヴィオ「はい！」

俺とヴィヴィオは朝から市場を歩いていた。

ヴィヴィオは昨日とは違う髪型になっている

昨日はくくっていた髪を今日は下ろして、前髪で片目を隠している

オッドアイを隠すためか？

まぁ珍しいからな…

刀夜「おっ、美味そうな果物だな…少し買ってみるか…すいません、これを４つ…」

「あいよ～４つだな～！」

店主よ、なぜ俺達をニヤニヤしながら見る。

「ほい！」

刀夜「……店主…なんか色々多いんだが…」

「オッサンからのサービスだ！兄ちゃん、旅人だろ？この辺じゃ見ない顔だからな。」

刀夜「まあ…そうですね…」

「そこの可愛い嬢ちゃんも、あまり見かけないけどな。」

ヴィヴィオ「え…ええ…まあ…あまりこっちに来てないですから…」

刀夜「じゃあ…そろそろ行きますので…」

「おう！あんがとな！また来てくれよ！」

刀夜「さて…ヴィヴィオ…何か欲しい物は…」

って…なんじゃそりゃあああ！！いつの間にそんなに大量の物を買っていたんだ！？！

ヴィヴィオ「禁則事項です♪」

心を読むなぁぁぁ！！

ってあれ？もしかして……俺より金持ってる！？

刀夜「負けた…」

ヴィヴィオ「？どうかしたんですか？」

刀夜「気にするな…自分の儲けの少なさと言う絶望に打ちひしがれてるだけだから…」

１４歳ぐらいの少女に負けてる俺って…

つらいな…

泣けるぜ…

と、まあいつまでも絶望に打ちひしがれてる暇は無いので、昼になったので昼食を食べることにする

だぁぁ！！やっぱりここでもって自分に対する絶望がぁぁぁぁ！！！

んでもって夜

ヴィヴィオ「今日は楽しかったですね♪」

刀夜「あ…ああ…」

俺は精神がボロボロだけどな…

そう言えば、こんな噂を聞いた

『この国の次期王女が行方不明だ』

…きっと重圧に耐えきれずに逃げたのだろう…

刀夜「この国も大変だな…次期王女かなんかが行方不明らしいし…」

ヴィヴィオ「うえっ!?え…ええ…そ、そうですね…」

刀夜「全くだ……!!……ヴィヴィオ…急ぐぞ…!」

ヴィヴィオ「え?」

刀夜「昨日のヤツか…その仲間だ!」

マズいな…俺一人だけなら全員瞬殺できるが…

刀夜「ヴィヴィオ…どこかに行き止まりは無いか?」

ヴィヴィオ「えと…たしかこっちです!」

刀夜「よし…良い場所だ…上に天井もある……居るのはわかっている……全員、出てこい……ヴィヴィオ…下がってろ…」

ヴィヴィオ「は…はい…」

1、2、3、4…20人か…多いな…

刀夜「…貴様等が何者かなど聞かん。…即刻、斬り捨ててやろう。」

「ほざけ！やれるものならやってみろ！」

「死ねぇぇぇぇ！！」

雑魚ふたりが剣をもち、飛びかかってくる

実力差を見極めろ…

刀夜「まず二人。」

シャリン！

パチン…

神速の抜刀術でまず二人を斬り捨てる

「あ…が…！」

「あぐがが…！」

ドサッ

地面に落ち、絶命。

刀夜「次！」

一足飛びで三人固まって居るところに飛び出し

刀夜「タアッ！」

飛びこみながらの回転切り

さらに回転を加え、極夜を鞘に納めながら再び飛び出し、回転を加えながらの抜刀術で二人仕留める。

そして地面に着地

すぐさま黒雷を放ち、三人痺れさせつつ近づき

刀夜「雷龍爪！」

黒雷を纏った状態で斬りつける。

「くっ…撃て！！」

４人、銃を撃ってくる

ババババババババババババ…！

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン！！

刀で銃弾を斬り捨てながら飛び込み

刀夜「雷龍翼！」

刀の攻撃範囲を雷で延長して、４人全員を斬る。

４人同時に絶命

「ダメだ！逃げろ！」

「勝てるわけ無い！」

二人逃げだそうとする

だが、逃がさん

刀夜「雷龍破！！」

刀に黒雷を纏わせ、突き出す

刀の先端から雷撃が飛び出し、龍のような形になり、逃げだそうとする二人を容赦なく殺す。

残り６人

「う…うわあああああ！！」

一人が発狂したのか、剣を無茶苦茶に振り回しながら、突っ込んでくる。

刀夜「極夜、モード４」

極夜『了解。』

極夜を二挺銃に変え、眉間に銃弾を二発撃ち込む。

残り５人

「トリャアアアア！！」

剣を投げつけてきたか。

大方、捌いた一瞬の隙に魔力弾でも撃ってくるつもりだろう

刀夜「無駄。」

Ｂａｎｇ！Ｂａｎｇ！Ｂａｎｇ！Ｂａｎｇ！

まず二発で剣を”消し去り”残り二発で本人を仕留める

残り４人

刀夜「極夜、モード２」

極夜「了解」

今度は両刃の大剣に極夜を変える

刀夜「フラッシュセイバー！」

一足飛びで踏み込みながら、一人斬り殺す。

刀夜「ソードスピアー！」

極夜を投げつけ、また一人の腹に突き刺す

「隙あり！！」

一人が俺が武器を持ってない隙に切り込んでくる。

だが

刀夜「来い！極夜！」

極夜「了解！」

極夜は瞬時に俺の手元に戻り、相手の剣を受け止める

刀夜「ハッ！」

すぐさま剣を押し返し

刀夜「極夜！モード３！」

極夜『了解！』

今度は長刀に姿を変え、押し返した相手を相手の間合いの外から斬り捨てる。

最後の一人

「…よくもやってくれた…私の部下を皆殺しとはな…」

刀夜「心配するな、今から貴様も後を追う事になる。」

「…そう簡単に行くかな？」

俺も相手も刀を構える

轟ッ！！

一足飛びでぶつかり合う

刀夜「……。」

「くっ…流石は…雷光の影と言うことか…」

刀夜「…何故…わかる…」

「黒雷をはなち、刀を持つ者など、雷光の影、影宮刀夜しかいない……まさか…こんな所で…次期聖王女、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトを連れて歩いているとは思わなんだが…なッ！」

刀夜「…チッ…」

なるほど…金髪に紅と翠の虹彩異色（オッドアイ）…

どちらも聖王家の特徴だな…

まあいい。

刀夜「貴様は…大方、敵国…いや、この国の王家の人間の暗殺部隊…といったところか…」

「さあな…」

刀夜「だが関係ない。今から貴様を……斬る…！」

シャキン！

「ぐ…が…」

ドサッ…

刀夜「八刀一閃…長刀による八回の斬撃を超神速で叩き込む……貴様には太刀筋すら捉えられなかっただろう…」

「流石は雷光の影…いや…戦士（ソルジャー）…です…最後に貴方と戦えて…良かった…」

刀夜「…ヴィヴィオ…いや、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト…」

オリヴィエ「…すみません…」

刀夜「……。」

？？？「オリヴィエから！！！」

刀夜「!?」

?!?「離れろぉぉぉ!!!」

刀夜「くっ…」

何て力だっ!

刀夜「うおッ!?」

まさか吹き飛ばされただと!?

オリヴィエ「ク…クラウス!?何故ここに…!」

クラウス「貴女が行方不明と聞いて、探しに来たんですよ!!あの男が連れ去ったのですね!?」

オリヴィエ「あ、いや、違いま「うおおおお!!!」あ…」

クラウス…

まさかクラウス・G・S・イングァルドか？

覇王…か…

やれやれ…王様二人が揃い踏みか…

まぁ…

どうでも良いな

刀夜「うおらぁぁ！！」

黒雷を放ち、牽制する

クラウス「くっ…」

刀夜「タアッ！」

クラウス「うわあっ！」

刀夜「ハァ…ハァ…ハァ…」

クラウス「…まだ実践では試したことはないけど…！やるしかない！」

刀夜「…少し落ち着けよ…」

クラウス「おおおおお！食らえぇぇぇぇ！断空拳！！」

なるほど…足から練り上げた魔力を拳に載せて放つ…か…悪くないな…だが…

刀夜「遅い。」

軽く避ける

クラウス「なっ！？」

チャキッ

刀夜「勝負有り…だな」

長刀を首に突きつけ、いつでも斬り捨てる事ができるようにする

クラウス「くっ…」

刀夜「…少し頭を冷やせ…」

バコッ！

クラウス「あ痛っ！」

オリヴィエ「人の話は最後まで聞きなさい！この方は、私を助けてくれた人ですよ！」

クラウス「え…」

続く…

第17話　秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない「…た

零夜「おい！八刀一閃って完全にパクリじゃないか！」

作者「まあなｗｗｗ」

零夜「笑い事じゃねぇよ！」

作者「いや、友達にな、「ＦＦのセリフを一部に使ってんなら技も出せよ、ファイガとかサンダガとかさー」って言われたからなｗｗ」

零夜「だからといって何で八刀一閃なんだ！」

作者「いいじゃん別に。超究武神覇斬（ＡＣＣ）くらわせるぞ！」

零夜「お前合体剣持ってないだろ！」

作者「うっせー！ナイフで代用じゃー！！食らいやがれ！超究武神覇斬！」

零夜「おわっ！」

作者「あ、避けられた！腰いてぇぇぇぇぇ！！」

まだ続くのか…

第１８話　何をするか決めるかは自分自身が決めることだ「…まあそうだな…」

今回はまあまあ深い話

派手に行くぜ

第18話　何をするか決めるかは自分自身が決めることだ「…まあそうだな…」

クラウス「ホントーーーーーーにすいませんでした!!!」

刀夜「あ、いや、もういいから…」

クラウス「なんとお詫びしていいやら…」

このやり取り5回目…
よし、話を無理矢理変えるか…

刀夜「…あ、そうださっきの技…なんだった…？」

クラウス「断空拳…ですか？」

刀夜「そうそう、その断空拳だけどな、なかなか良い技だが…スピードが足りないな。」

クラウス「スピード…ですか…」

刀夜「並の相手ならあのスピードで十分だがな…攻撃力を少し下げてスピードを上げてみろ、いくら強い攻撃でもあたらなきゃ意味が

ないからな…さっきのは俺にとっては止まってるようにしか見えなかった。」

クラウス「なるほど…」

オリヴィエ「なんで私を放置するんですかぁぁーーーーーっ！！！」

刀夜「あ、スマン。」

オリヴィエ「全く…」

クラウス「すいません…」

刀夜「…で……これからどうするんだ？」

オリヴィエ「……。」

クラウス「やはり…帰ったほうが…」

オリヴィエ「けど…」

刀夜「…君は何がしたい？」

オリヴィエ「え？」

刀夜「君の魂は…何と言ってる？」

オリヴィエ「魂…」

刀夜「心は…？何がしたいと言っている？」

オリヴィエ「……。」

刀夜「俺は何も言わない。ただ、俺は一言…言うだけだ。」

オリヴィエ「私は……」

刀夜「ま、難しいか。」

オリヴィエ「私は…」

クラウス「…貴方は…」

刀夜「ああそうだ、まだ完璧に自己紹介をしてなかったな…戦士（ソルジャー）いや、こっちを言ったほうがわかりやすいな…元…龍神傭兵団、兵士（ソルジャー）ランク０、雷光の影（ライトニングシャドウ）……影宮刀夜…」

クラウス「あの雷光（ライトニング）の影（シャドウ）ですか！？」

オリヴィエ「あの有名な…」

刀夜「ホントはあんまり言いたくないんだ…色々面倒だからな……俺がやってたことが原因なんだけどな…」

…俺は…今まで何人も…数えられないほど人を殺してきたからな…

刀夜「さて…俺はそろそろ行く…こんな俺といたら…ややこしいことになるぞ…帰るなり、どこかへ行くなり、君が決めるんだ……じゃあな…」

オリヴィエ「……はい…」

オリヴィエ「クラウス…私は…帰ります…やはり、誰かがこの国を治めなければなりません。」

クラウス「では…送っていきます…」

オリヴィエ「（なぜ人々が戦うか…まだ判りません…ですが…必ず見つけてみせます…！刀夜さん・・・！）」

刀夜「さぁて…次はどこに行くかな…」

カチャ

刀夜「ん？なんか踏んだか？…なんだこりゃ？」

小さなひし形の水色の宝石？なんでこんなところに？

刀夜「うおっ！？」

突然宝石が輝きだす

そして

俺はその宝石から出た光に包まれ…

俺はベルカから消えていた…

続く……

第18話　何をするか決めるかは自分自身が決めることだ「…まあそうだな…」

作者「はあぁぁぁぁ…」

零夜「どうした？」

はやて「テストがぐだぐだだったみたいやな」

零夜「じゃあ勉強しろよ！」

作者「だるい」

零夜「ヲイ」

続くしかないなｗｗｗ

第１９話　面倒な事態が続けて起きると呆れる「…むしろイライラする」（前書

まーた厄介な事になった刀夜

派手に行くぜ

第１９話　面倒な事態が続けて起きると呆れる「…むしろイライラする」

刀夜「うおおおおおぉぉぉぉぉぉ！？」

ズガァァァァン！

刀夜「痛てて……何処だ？ここは？」

周囲は何もなく、荒野が続いていた…

いや、刀や甲冑…兜も転がっている…

刀夜「…戦場か……」

これはまた厄介な場所に…

刀夜「とりあえず…逃げるか…巻き込まれると面倒だ…」

脱出だ！！

刀夜「…なんか…随分でかい街に着いちまったな…」

……なんかみんな妙な格好してんな…

ぱっと見、一枚の布を服にして、紐で縛ってるようにしか見えん…

いや…この場合、俺が変なのか…？

今俺は漆黒のロングコート…

…凄い周囲の目線が厳しいな…

とにかく、
ここが何処か誰かに聞いてみるか…

刀夜「…すいません…ここって…何処かですかね…」

やっぱり通行人に聞く俺。

「ここか？ここは、大阪だが…」

オオサカ？ナンダソレハ…
初めて聞いたな…

刀夜「ありがとうございます…」

とにかく…何故俺が此処に来たのか調べねば……いや、この宝石以外思いつかんな…

刀夜「…どうしたもんかねぇ……」

??「ちょっとちょっと！そこのお兄さん！」

刀夜「とにかく…此処がどこの世界か調べて…」

??「おーい！聞いてる？」

刀夜「見たところ…魔法を使ってないな…魔法文化が無いのか…」

??「話を！！」

刀夜「ん？」

??「聞かんかーい！！」

刀夜「イテッ！」

??「さっきから呼んでんのに無視しやんといてくれる！？」

亜麻色の髪の短い少女が、俺の頭を叩いていた。

刀夜「ああ…すまない…少し考え事をしていてな…」

？？「だいたい、どうやって元の世界へ帰るかなー？とか考えてたんやろ？」

刀夜「…まさか…お前も…」

？？「そ、私もお兄さんと同じように、別世界から来たんや。こんな所で話も何やから、とりあえず私の家に来きて！」

刀夜「分かった。」

？「ほんなら、まずは自己紹介やね、私は美月（みつき）、一応出身はベルカ。

歳は１６、よろしく！」

刀夜「俺は刀夜、影宮刀夜だ。出身は…分からん。一応ベルカから飛ばされてきたんだが…歳は１９だ。こいつは俺の相棒、極夜。」

極夜『よろしく。』

美月「刀型のデバイスか…なかなかかっこええな！刀夜さんにぴったりや！」

刀夜「そいつはどうも。」

美月「そや、私の相棒も紹介しとこか、おいで！」

…はい？なぜに呼ぶ？

？「はいはい！何ですか？美月ちゃん？」

美月「紹介するわ、私の相棒、ユニゾンデバイスの風花（ふうか）。」

刀夜「ちっさ！」

俺の手のひらぐらいのサイズの人形みたいな少女が飛んできた。

風花「むー！失礼です！私はちゃんと普通の大きさにもなれます！」

刀夜「あ、そう。それは悪かった。」

風花「で、美月ちゃん、この人は誰ですか？」

美月「刀夜さんって言って、私らと同じように別世界…ベルカから飛ばされてきたんよ」

風花「そうでしたかー！」

刀夜「ここは何なんだ？見たところ、魔法文化は無いようだが…」

美月「さぁ？魔法を誰も使われへんからなぁ…」

刀夜「困ったもんだな…しかも戦いが起こってるんだろ？」

美月「まぁな。でも、この街は大丈夫や。独自の防御策とかがある

から、一回も戦闘は起きてへん。」

風花「しかもここは商業の街ですからね、色んな人が集まってくるのです！」

刀夜「今この世界では、何が起こってるんだ？」

美月「全国の武将…まぁ王様みたいなもんやね、それが全国を統一しようとあちこちで戦ってるってとこやな。」

刀夜「…チッ…俺の行く先は常に戦いか……」

小声で呟いた

美月「何か言った？」

刀夜「いや、何も。」

美月「まあええわ、とにかく刀夜さんは今どこも住むところがないし、金もない、そうやろ？」

刀夜「……ああ…。」

美月「とりあえずこの家に居てくれへん?もしかしたらなんとか三人でならなんとかなるかもしれへんから。」

風花「と言うかこの世界が何なのか全く分からず、飛ばされてきた時点で選択肢は無いんですけどね。」

刀夜「…頼む…」

美月「よっしゃ!!じゃあまずは刀夜さんの服からやね!」

刀夜「別にこれで良いだろ…」

風花「ダメですよー!そんな服だと目立っちゃいますから!」

刀夜「俺は気にしない。」

美月「刀夜さんが気にしなくても私らが気にするんや!此処で暮らすんやから、ちゃんと”此処”での、普通の格好してや!」

刀夜「分かったよ…」

面倒だ…

続く…

第１９話　面倒な事態が続けて起きると呆れる「…むしろイライラする」（後書

作者「まずはその現実をぶち殺す！！」

零夜「ついに現実逃避か…」

作者「一人１教科４０点…基本をマスターすれば、赤点ギリギリでなんとかなるだろう。」

零夜「ガトリング両手に言うセリフじゃないよね！？確かに元ネタのセリフは両手にツインダブルガトリングガン装備してミサイル撃ちながら言ってたけど！！」

作者「…地獄への道連れは！！此処にあるテストと回答用紙だけにしようぜ！！」

零夜「鎌振り回しながら言うなぁぁぁぁぁ！！確かに元ネタはやってたけどぉぉぉ！！」

まだ終わらんよ！！

第２０話　まさかの出会いってのはたまにある事「…そりゃああるだろうな、世

初めにはっきり言っておきます

この話はだいぶ前から書こうと思ってたのですが…

凄まじい事になりました…

読むときは後半を覚悟してくださいね

それでは

派手に行くぜ

第２０話　まさかの出会いってのはたまにある事「…そりゃああるだろうな、世

はい、あれからだいたい２週間たちました勘だから多分だけどな

俺はとりあえずあのひし形の水色の宝石を調べている。

調べようにも機材は無いが、極夜でもある程度は分析出来るし、風花にも手伝ってもらってはいるものの、やはり詳しくは分からない。

刀夜「困ったな…」

風花「困りましたね…」

極夜『…困った…』

刀夜「これ…魔力の塊か…どうしたもんかねぇ…」

風花「私達がここに来ちゃった理由は…多分知らない間にこれに衝撃を与えてしまって、不安定な状態の魔力が暴走してしまい、次元歪んだのが原因でしょうね…」

……俺…次元斬り裂けるんだけど…

極夜『しかも今コイツには魔力があまり入ってないからな…』

美月「…じゃあ…それに魔力を注いで、もう一度もとの不安定状態にして衝撃を与えたら…同じように次元が歪んで帰れたりは…せえへんか…」

刀夜「…いや…間違いではないかもしれん…俺が次元を斬ったときに周囲の空間が歪んで、そこにあったモノが斬れずに消滅したことがあった……それみたいなもんだろう……あの頃は修行中で、コントロール出来てなかったからな…」

美月「今、物凄いヤバい事さらっと言ったよな!?次元を斬り裂くって聞こえたんやけど!?」

風花「しかも空間が歪んで消滅したとか言いませんでした!?それってかなりヤバいんですけど!?」

刀夜「まあ次元斬りなんか、できるのは俺を含めて三人しか居ないからな。空間斬りをするヤツも居るぞ。」

美月「あかん、これから先しばらくなに聞いても驚かれへん気がしてきた…」

刀夜「そうか。」

刀夜「とりあえず、これに魔力をひたすら注いでいくか。」

美月「じゃあ、まず私からやるわ。」

刀夜「分かった、だが3分の1くらいは自分に残しておけよ、なにがあるか分からないからな。」

美月「分かった。」

数分後

刀夜「おい、3分の1くらい残しておけと言ったはずだが。」

美月「え？まだ半分も行ってないけど？」

風花「美月ちゃんの魔力量は凄まじく多いですからねー！」

刀夜「……俺も多い方だが…これは多過ぎだな…ここまで魔力量が

多いやつは初めて見た…」

風花「私達は広域殲滅が得意ですからね、何回も何回もやって、魔力切れを何回も起こしてたらこんなになっちゃったんですよ。」

美月「……よし！だいたいこれくらいかな。」

刀夜「今度は俺だな。」

……あるぇ？

美月「なんかどんどん魔力が宝石から抜けてってんねんけど。」

刀夜「多分俺の影の魔力変換資質が原因かと。」

美月「影？」

刀夜「影の魔力はどんどん周囲の魔力を吸収して俺の魔力に変えていくので。しかもまだコントロール出来てないから勝手に魔力を吸収していくし、勝手に影に変換されるからな。」

美月「すぐ手をはなせぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

バコーン！！

刀夜「グハァァッ！？」

鞘で殴るなよ…

刀夜「鞘はやめろ…鞘は…」

つーか勝手に極夜を使わんでくれ…

刀夜「いてて……」

極夜『大丈夫か？』

刀夜「まあな…追い出されちまったが…」

極夜『まあ彼女の機嫌が直るまで待つしかなかろう。』

刀夜「そうだな……ん…？なんか随分人が集まってんな…なんだ…？」

俺は行ってみることにした

刀夜「火縄銃？」

極夜『この世界の…銃だな。』

刀夜「随分面倒な仕組みだな…あんなに銃身が長かったら取り回しが悪いだろ…」

極夜『単発式でリロードにかなり時間がかかるのか…せめてもっと小さくしたらいいのに…』

刀夜「一挺買って、改造してみるか？」

極夜『好きにすればいい。』

刀夜「値段は…うおっ…高ぇな…」

こりゃ買うのは無理だな…

「すまん、この鉄砲をあるだけくれ。」

……はぁ！？どんな金持ちだ！？

刀夜「……！」

本能的に分かった。

今…この銃を買おうとしている男は…ヤバい…と…

見た目が全身鎧にマント、頭に兜はかぶっては居ないが、左手に抱えている

「ん?…なんだ?我の顔に何かついているか?」

刀夜「…いえ…」

「…ふむ…心地よい殺気だ…」

刀夜「…!」

「貴様…なかなかの使い手と見た…」

刀夜「…買いかぶりすぎですよ…」

「ふっ…無理に隠さずともわかっておる…目を見れば一目で分かる…貴様の目は…幾たびも、修羅場をくぐり抜けた者がする眼……しかも質と量の次元が違う修羅場をくぐり抜けた筈だ…現に貴様も我を見て、同じような事を思ったであろう?」

刀夜「…はい…」

「…どうだ…少し、手合わせ願いたいのだがな。無論、死なないようにだが。」

刀夜「…ええ…構いません。」

「ならば、半刻程後に、街の外に来てくれ。」

刀夜「わかりました。」

「では、待っているぞ。あ、店主、鉄砲は後で部下が取りに来るからその者に渡してくれ。」

刀夜「極夜……俺は…勝てるだろうか…。」

極夜『魔法が使えれば瞬殺できる……だが…魔法文化のないこの世界で魔法を使うのはマズい…純粋な剣術勝負なら……おそらく互角

…いや、ほんの僅かに向こうの方が上かもしれん。』

刀夜「ああ…闘気をぶつけても全く動じないどころか、心地よいとか言ってやがったからな。」

極夜『とりあえず、美月と風花には言っておけよ。』

刀夜「ああ。」

で、俺は先に家に帰った。

刀夜「ただいま。美月ー！風花ー！いるかー！」

美月「…なんや？」

刀夜「…まだ怒ってんのかよ…」

風花「どうしたんですか？」

刀夜「おう。今から街の外で決闘（しあい）してくる。」

美月「なんやて！？」

刀夜「だから、俺の元の服に着替えに来た。その上から一応騎士甲冑…いや…見た目ただのコートだが…それで行くからな。」

美月「…私も行く。別にかまへんな？」

刀夜「ああ。」

刀夜「さて、行くか。」

行ってみると、見物人が何人も居た

「ほう、変わった格好だな。」

刀夜「貴方も人のこと言えないでしょうが…鉄板全身にくっつけてるし…」

「…否、これは西洋の甲冑だ。」

刀夜「…俺のも似たようなもんだ…」

「ふむ…そう言えば名のるのを忘れていたな、我は尾張、織田家当

主。織田信長だ。」

刀夜「…戦士（ソルジャー）…影宮刀夜…」

「刀夜か、覚えておこう。では…」

刀夜「いざ…」

「「勝負ッ！！」」

まずは…無拍子の一足飛びからの…抜刀術！

「クッ…！」

防がれたか…

「…うぉぉ！！」

右薙に振りかぶってくる…ならば…！

刀夜「…ハァッ！」

柄尻で刀を受け止め、押し返しすぐさま納刀、抜刀術へと繋げる。

が

「鬼神！無双斬！」

マズい、と思った瞬間、相手の抜刀術を抜刀術で迎え撃った。

刀夜「ぐっ…」

「うぉぉぉぉぉ！」

刀夜「負けるか…！」

ガキィン！

なんとか防ぎきった…

「ほう…鬼神無双斬を受け止めたか…」

刀夜「今の技…恐らく剣気を刀に纏わせ、鞘内部で剣気を圧縮、抜刀術で一気に解き放つ技だな…」

「その通り。武者たるもの、闘気を自在に操らねばならん。」

刀夜「なら…俺の闘気も見せてやる…行くぞ！」

足に闘気を纏わせるようにして、足の裏に闘気を集め

ーーーーーーーー轟ッ！！ーーーーーーーー

闘気を爆発させ、加速を最大限まで行う

勢いのまま、体を回転させ抜刀術を繰り出す！

刀夜「うおおおおおおお！！」

「おおおおおおおおおおお！！」

そして

ーーーー一閃！ーーーー

ガキィン！

防がれる…が…

「鞘！？」

刀夜「…抜刀術…二頭龍…！」

鞘から刀を半分ほど出したまま、攻撃

防がれた鞘から、刀を抜刀

そのまま

一閃！

「我の…負けだな…」

刀夜「大丈夫ですか…？」

「ああ、大事ない。峰打ちにしてくれたおかげでな。」

刀夜「死なないように、と言ったのは貴方でしょう…」

「まぁ…そうだな…」

刀夜「ありがとうございました…」

「いや、こちらこそ勉強になった、まさかあのような抜刀術があるとは想像もできなかった…」

刀夜「いえ、こちらこそ、闘気を自在に操れば剣圧を強化出来るとは思いませんでしたから…」

「む…少しばかり時刻が不味いな…そろそろ行かねば、尾張に着くのが夜になってしまう。よし、このまますぐさま出発するとしよう。」

刀夜「部下はいいんですか？」

「いや、先に行かせてある。」

刀夜「そうですか、では…」

「うむ…いずれまた会おう！さらば！」

続くっ…

第２０話　まさかの出会いってのはたまにある事「…そりゃああるだろうな、世

作者「結局俺はなにがしたかったんだろうか」

零夜「まさかにも程があるな」

作者「でもこの話はだいぶ前から書くのは決まってたんだよな。」

零夜「マジかよ」

作者「マジだよ」

零夜「なんで織田信長なんだ？」

作者「俺が最も尊敬する偉人だから。」

零夜「絡み方がかなり強引だな。」

作者「いや、でも織田信長は実際に大阪の堺で鉄砲に興味をもって、後の戦いに使っていくようになったんだぞ。」

刀夜「じゃあ何故戦わせたし。」

作者「格好良さそうだったからという俺の妄想１２０％」

刀夜「ヲイ」

続けなければ、生き残れない！

第２１話　ベルカよ！私は帰ってきた！！「…核は撃つなよ？」（前書き）

またサブタイがネタ

ヒントは作者も憧れるソロモンの悪夢

今回はただ帰るだけ

派手に行くぜ

第２１話　ベルカよ！私は帰ってきた！！「…核は撃つなよ？」

刀夜「ハァ…もう２ヶ月か…美月…魔力はまだたまってないか？」

美月「あと…ちょっと…」

刀夜「ホントかよ…」

風花「んー…確かに後少しだと思いますよ、計測不能領域にもうすぐ達しますし。」

刀夜「そうか。」

美月「む…なんで私の事信じへんのに風花の事は信じんの？」

刀夜「お前は見栄張って、ホラ吹く時があるからな。」

この前なんざ作り方をまともに知らない料理を作って俺がえらい目にあったからな。

刀夜「……どうも俺は上手く魔力感知が出来んな…」

そう、俺は魔力の感知が苦手なのだ。
そこに有るか無いかなどは分かるのだが、多いのか、少ないのかなど、細かい事が分からない。

刀夜「何とかしなきゃな…」

美月「ふう…今日はこれくらいにしとこか。」

風花「お疲れ様です、美月ちゃん。」

美月「ありがとう、風花。」

刀夜「…それに…影の魔力コントロールを何とかしなきゃな…」

美月「…刀夜さんは何をぶつぶつ言ってるんや…」

風花「朝からずっとアレですからね…ちょっと不安です…」

刀夜「ま、考えても仕方ないか…」

美月「何をぶつぶつ言ってるんや。」

刀夜「気にするな、大したことじゃない。」

刀夜「さて…腹が減ってきたな…」

美月「じゃ、何か作ろか。」

刀夜「ああ、」

俺は立ち上がり、二歩進んだ瞬間

カチャ

刀夜「あ？」

あの宝石を踏んでいた

刀夜「あ」

美月「あ」

風花「あ」

刀夜「うぉおお！？」

美月「きゃぁぁぁ！！」

風花「うわぁぁぁぁ！！」

以前と同じように光に包まれ…

この世界から俺達は消えていた

刀夜「うぉおおおおおおおおおおおお！！？？」

ゴシャァアアア！！

刀夜「うぉぉぉ！？」

バキッ！バゴッ！

美月「あいたたたた…」

風花「美月ちゃん、大丈夫ですか？」

美月「私は大丈夫やけど…アレ？刀夜さんは？」

刀夜「…お…降りてくれ…」

美月「ご、ごめんなさい！すぐどくから！」

刀夜「いててて…」

風花「ここは…どこですかね？」

刀夜「…ベルカだよ。」

美月「なんでわかるん？」

刀夜「あの馬鹿でかい城を見ろ…あれは…たしか覇王国の物だったはずだ…」

美月「そう言えばそうやったなぁ…」

刀夜「ちょっと行ってみるか。」

続く

第２１話　ベルカよ！私は帰ってきた！！「…核は撃つなよ？」（後書き）

作者「やっと明日でテストが終わるぜ…」

零夜「ずっと小説書いてたから勉強してないだろお前。」

作者「ああ。それがなにか？」

零夜「赤点取ったらえらい目に遭うぞ。」

作者「まぁ数学と理科は訳分からんからな、多分無理。英語と現代社会はまぁまぁ、問題は世界史をまともに覚えずにテスト受けたがらボロボロなんだよなｗｗｗあと明日の古文と数Ａもヤバい。」

零夜「勉強しろよ！！」

作者「期末で頑張る。大丈夫だ、問題ない。」

零夜「とか言って同じ過ちを繰り返すフラグだよな。それ。」

作者「過ちは繰り返させない！！」

零夜「お前が繰り返すんだよ！！」

続ける！それが人の夢！人の業！

第２２話　一線をこえた厨二病は凄く格好いい「…厨二病患者が言ったらなんか

厨二病全開な話

後、この小説が１５０００アクセスを突破しました

派手に行くぜ

第２２話　一線をこえた厨二病は凄く格好いい「…厨二病患者が言ったらなんか

刀夜「なんか…さびれてんな…何があったんだ？」

美月「此処に来たことあるん？」

刀夜「一度だけ旅の途中に物資補給のために立ち寄ったことがある。
」

美月「その頃は、もっと人がいたんか？」

刀夜「ああ、もっと活気があった。」

風花「今は誰もいませんねぇ…」

刀夜「おかしい。」

美月「え？」

刀夜「…クラウスはどこだ…！美月！城に行くぞ！！」

言い切る前に俺は駆けだしていた

美月「あ、ちょっと！！まってや！」

刀夜「ハァ…ハァ…ハァ…クラウス！いるか！？」

チッ…まさか…！

美月「ちょお…まってや…」

風花「つ…疲れたです…」

刀夜「…クラウス…オリヴィエ…」

「刀夜さん！？」

刀夜「クラウスか！？無事だったか！」

クラウス「すみませんが、再会を喜んでいる暇がありません！今から橋を下ろしますので、こちらまで来ていただけませんか！？」

刀夜「わかった！だが橋は下ろさなくていい！跳んでいく！美月、風花、すまん。」

美月「え、ちょっときゃあ！？」

風花「うひゃあっ！？」

俺は二人を抱き抱え、堀と城門を飛び越えた

刀夜「すまんな、美月、風花。」

美月「びっくりした…」

風花「びっくりしたですぅ…」

刀夜「クラウス、なにがあった…あれからどれくらいたった…オリヴィエは無事なのか？」

クラウス「あれからって…もう二年はたってますよ？あとオリヴィエは無事ですよ…」

刀夜「チッ…やはりあっちとこっちで時間の進み方が違うか…」

クラウス「あっち？」

刀夜「ああ、あのすぐ後…どこか分からないが、別の世界に飛ばされていてな…俺にとってはまだあれから2ヶ月程しかたってない…そんなことより、何があったんだ…」

クラウス「魔王…と言えば分かりますか？」

刀夜「チッ…あそこか…」

美月「魔王って…まさかあの…絶望を統べる王（ロード・ディスペアー）とか永久の絶望（エンドレス・ディスペアー）だとか言われてるあの…？」

クラウス「そう、その魔王が…ついに此処まできた…」

刀夜「ッチ…昔…火彩と二人でボコボコにしてやったんだがな……
またバカで厨二病臭い野望を抱きだしたか…あのヒゲ…あんなやつ
でも一応かなり強いからな…」

俺はつぶやいた

クラウス「魔王と戦ったのですか!?」

刀夜「ああ…だいぶ昔な…もう7年ぐらい前だ…あの時は火彩…俺
の親友と二人でボコボコにしてやったんだが…あのヒゲ…言ってる
ことアホな割にはなかなか強いからな…」

クラウス「一応…周辺の国々に協力を呼びかけたのですが…」

刀夜「ああ…それと、龍神傭兵団を雇うといい…アイツらなら余裕
で魔王軍を潰せるだろう。連絡するときは俺は名前を使ってくれて
かまわない。あと俺からの伝言で（火彩を寄越してくれ）と団長に
伝えてくれ。俺はオリヴィエの所に行ってみる。」

クラウス「分かりました、龍神傭兵団を…」

「相変わらず、魔力感知が出来てないな、刀夜。」

刀夜「…！…火彩！？」

火彩「久しぶりだな、四年ぶりくらいか？」

刀夜「何で此処にいるんだ。」

火彩「お前の真似を龍神傭兵団全員でやろうと言うことになってな、今はみんなこっちに向かってるさ。ま、団長とメンバーの半分は、お前の心配する聖王国に向かってるがな。」

クラウス「じゃ、じゃあ…貴方が…魔王を一度倒したという…もう1人の…」

火彩「ああ、俺が蒼天の焔（スカイライト・ブレイズ）こと、闇咲火彩だ。」

刀夜「これは…行けるぞ…！クラウス！この戦力なら逆に攻めても勝てるぞ！！」

クラウス「えええええ！！！」

美月「ちょっとまったぁ！！」

風花「私達を忘れ無いでほしいです！！」

美月「相手の魔王軍は数はハンパなく多いはずや！！」

風花「だから、私達の出番です！！」

美月「超広域殲滅魔法で魔王軍みんなぶっ飛ばしたるわ！」

火彩「おい、刀夜。誰だ？この嬢ちゃんは。」

刀夜「飛ばされてた世界で俺を助けてくれた人とユニゾンデバイス。」

火彩「そうか。よく似合ってるぞ。」

刀夜「なんの話だ？」

火彩「気にするな。」

刀夜「…意味分からん…」

クラウス「さ…さすがに今すぐは無理なので…3日後でよろしいですかね？」

火彩「ああ、直ぐってのは無理なのは分かってる。今の内に、聖王国に連絡して、団長にも伝えておくよ。」

クラウス「ありがとうございます…」

続く

第２２話　一線をこえた厨二病は凄く格好いい「…厨二病患者が言ったらなんか

作者「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ♪今日でテスト終わるぜ♪」

零夜「勉強しないなら寝ろよ！」

作者「昼寝したから眠れない夜～♪」

零夜「じゃあ勉強しろ！」

作者「やーだね♪そんな事するくらいならミリオンスタッブをマスターするね。」

零夜「作者…テンションおかしくないか？」

作者「あははは～♪深夜だからって発狂はしてないぜーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっと！！！」

零夜「十分発狂してんじゃねえか…よし、斬ろう。八刀一閃！！」

シャキィン！

??1「Ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｄｉｅ！ｓｔｉｎｇｅｒ！！」

??2「Ｉｌｌｕｓｉｏｎ　ｂｌａｄｅ！！」

作者「ぎゃあああああ！」

零夜「あ、蒼と紅の二人の死神に作者が…」

この後書きを続ける…それが俺の使命だ！

ようするにまだまだ続く…

第２３話　メタ発言と死亡フラグ建設はほどほどに「いや、無しにしろよ！」

何故こうなったし

普通の話を書いてたのに何故かギャグに…

ともかく

派手に行くぜ

第２３話　メタ発言と死亡フラグ建設はほどほどに「いや、無しにしろよ！」

クラウス「そうだ、刀夜さん。」

刀夜「ん？」

クラウス「断空拳、完成したので見ていただけませんか？」

刀夜「おお、あれを完全にしたか。」

クラウス「はい！」

刀夜「いいだろう、見せてみろ！」

～～移動中～～

刀夜「さあ…来い！」

クラウス「行きますよ！覇王！断！空！拳！」

速い！避けれるか！？

クラウス「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

避けれない…！防ぎきれるか！？

刀夜「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

バゴォォォォォォォォォォォォン！！！！！

この一撃で俺は城外まで吹き飛ばされたとさ

クラウス「ホントーーーーーーーーにすいませんでしたァァァァ！！！」

刀夜「いや…気にするな…問題ない…良い一撃だった…ゴフッ！」

クラウス「血吐いてますけど！？」

刀夜「……後、断空拳を蹴りとか手刀とか他の技でも出せるようにすれば最強クラスの格闘技になるんじゃないかと俺は思う。」

クラウス「話スルーされたーーー！！そしてこの状況下でアドバイス！？ありがたいのですが早く治療しなければ死にますよ！？」

刀夜「…大丈夫だ…問題ｎ「何を死亡フラグ建てとんじゃあああ！！！」アグボアアアァァァ！！」

火彩のドロップキックが炸裂！

クラウス「えええええええええ！？何やってんですか火彩さぁぁぁぁん！！！！」

火彩「主人公がむやみやたらに死亡フラグを建てるなァァァ！！」

白夜『…メタ発言もマズいと思うぞォ…火彩ォ…』

刀夜「ゴフッ…！」

そして俺は意識を失ったとさ

続く

第２３話　メタ発言と死亡フラグ建設はほどほどに「いや、無しにしろよ！」

作者「テスト終わったァァァァァァァァ」

零夜「騒ぐな…バカ作者…」

作者「誰がバカだコラァァァ！！」

零夜「じゃあドアホ作者。」

作者「今死ねすぐ死ね！骨まで砕けろォ！！」

ドカバキボコッ！

作者「これで良し」

刀夜「よくねーよ。」

作者「そうだ、実は零夜がある方の小説の後書きに登場してるんだ！」

刀夜「マジか。」

作者「あしゅきさんの　俺が秀吉で化け物級　と言う小説だ！内容はバカテス、主人公は秀吉の小説です！」

刀夜「よろしければそちらも見に行ってあげてください！」

作者「あしゅきさん！ありがとうございまァァァァす！！」

え？まだ続くの？

第２４話　気持ちはまず言葉にしてから伝えろ「言葉にしなきゃわからないもん

今回は…ちょっと意外な話かも

派手に行くぜ

第２４話　気持ちはまず言葉にしてから伝えろ「言葉にしなきゃわからないもん

刀夜「うおっ！？」

俺は目を覚ました……

刀夜「何故俺は寝ていたんだ…？クラウスの覇王断空拳で吹っ飛んで…どうしたんだっけ…」

美月「その後に火彩さんにドロップキック食らってばたんきゅ～や」

刀夜「美月…」

美月「もぉ…心配したんやで…なかなか目覚まさへんし。」

刀夜「ああ…悪かった…あれからどれくらいたった？」

美月「２日。」

刀夜「…って今日出発じゃないか！」

美月「あー、それ来週になったから。聖王様が一緒に来るとかで延期になったんよ。」

刀夜「オリヴィエが…。」

美月「しっかし…随分ベルカの王様と仲ええなぁ。」

刀夜「クラウスとオリヴィエだけだ…」

刀夜「ふぅ…まだ体が痛むな…」

美月「一応治癒魔法は掛けといたんやけどなぁ…」

刀夜「まあ、一日あれば治るさ。」

カチャ…

部屋の扉が開いて、銀髪の長い髪の女性が入ってきて

風花「美月ちゃーん！ただいまですぅ！！」

美月「おかえり、風花。」

……ゑ？

刀夜「風花…？」

いや、おかしい。

風花は確か俺の手のひらサイズだったはず。だが今目の前で風花と言う女性は完全に美月より身長が高い、しかもスタイルが抜群だ。

いや待て風花はもっと可愛い感じだったはずだ。今目の前で風花と言う女性はどっちかと言うと綺麗と言う言葉が似合うような感じ。

だがあの口調は完全に風花のものつまりこの人は…

以上、思考終了まで0．2秒。

風花「…刀夜さーん、今何か私の見た目について0．2秒ほど思考しませんでしたかー？」

刀夜「あいや、別にそんな事はないぞ！ただ、綺麗だと思っただけだ。」

風花「そんな…綺麗だなんて／／／／／／／／／／／／／／」

美月「…むっ…」

刀夜「いててててっ！！なにしやがる美月！！」

美月「むー……」

美月よ、何故俺を睨みつける

風花「ふふっ♪美月ちゃんは刀夜さんの事がすk「あわわわわわっ！そ、そうや！風花！頼んでたもの！もってきてくれたか！？」むぅ…まぁ持ってきましたが…」

刀夜「…シッ……騒ぐな…」

カチャ…

俺はドアを開けた

火彩「うおっ！？」

オリヴィエ「キャアッ！？」

クラウス「うわっ！？」

団長「おわっ！？」

刀夜「……何やってんだ、アンタ等は…」

火彩「いや、美月ちゃんが刀夜に告ｈ「黙れ！火彩！」
ゴシャァァァ！！！
火彩「あぐべらぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！な、何すんですか団長ォォ
！」

団長「何も言うな、火彩。」

火彩「いや、だけど刀夜は「何　も　言　う　な　！！」　Ｙｅｓ
ｓｉｒ！！」

オリヴィエ「あ…あの…クラウス…／／／／／／／こ、こんな所で
…／／／／／（あ、でもあんまり悪い気は…／／／／／）」

クラウス「すすすすすすすす、すみません！すぐ退きます！！
／／／／／」

ドアが開いて転けた時、クラウスがオリヴィエを押し倒してしまっていたようだｗｗ

風花「ハイそこ！ラブコメ展開しないでください！！」

団長「じゃ、刀夜！！頑張れよ！！」

そう言って団長達は立ち去って行った

……何を頑張れと？

刀夜「何だったんだ…？」

美月「…あ、あの！」

刀夜「ん？」

美月「刀夜さんは…その…す、す、す、好きな人とかは…い、いるんですか？／／／／／／／」

刀夜「いや、居ないが？」

コイツ…どうしたんだ？急に…

美月「…私…私は…と、刀夜さんの事が…す、す、す、す…好きです！！」

刀夜「……ぁ？」

美月「…。」

刀夜「そりゃ、どーいう意味ｄ…むぐっ！？」

言いきる前に、美月に何か柔らかいモノで口を塞がれた

美月の顔が近い…

そう

俺は美月に

キスされていた。

美月「これでまだどういう意味か分からんか？／／／／／／／／／／」

刀夜「いや…」

美月「…で、返事は…？」

刀夜「分かった………俺は…お前の気持ちに答えよう。」

美月「それって…つまり…」

刀夜「ｏｋだ。」

美月「…や…やったあぁぁぁ！！！」

刀夜「うおおお！？」

美月は俺に抱きついてきた

その勢いで俺と美月はベッドから落下した

美月「えへへ～♪」

美月は俺に抱きついたまま、頬ずりしてくる。

俺は思った

美月は必ず守り抜いてみせる…と…

続く…

第２４話　気持ちはまず言葉にしてから伝えろ「言葉にしなきゃわからないもん

作者「ゴブガガゲェェェェェェェ！！！」

零夜「作者が砂糖を吐いた！？」

作者「ま、この程度ではあまり吐かないがな。」

零夜「いきなり砂糖を大量に吐くなんざ怖過ぎるわ！」

作者「この程度で大量だったら流星とか俺、書きながら凄まじいことになってるぞ！」

零夜「病院行け！」

続いたり、続かなかったり、続いたり

第２５話　派手にぶちかませ！「景気よくな！」（前書き）

今回は美月と風花のターン！！

派手にいくぜ！

第２５話　派手にぶちかませ！「景気よくな！」

あれから一週間

魔王軍をぶっ飛ばしに行く日だ

火彩「細かい作戦は、どうする？」

刀夜「美月と風花の超広域殲滅攻撃でぶっ飛ばしまくった後、龍神傭兵団を先頭に全員突撃！！暴れまわる！！美月はぶっ飛ばした後、すぐ戻る！以上！」

火彩「良いねぇ！シンプルで覚えやすい！かつ、上手いこと行きそうな最高の作戦だ！」

団長「バカでも理解可能だな。さすが刀夜だ。」

極夜『ただ単にめんどくさいから細かいとこまで考えてないだけじゃ…』

白夜『極夜ァ…ソレを言っちゃァ…おしまいだぜェ…』

～転送移動中～

刀夜「来たぞ…！！じゃあ…美月、頼んだぞ…」

美月「任せといて！風花！行くで！！」

風花「はいです！！」

美月「ユニゾン！！」

「「インッッ！！」」

髪は長い銀髪、黒と白の服…騎士甲冑に身を包み、黒い帽子を被った美月がそこには居た

美月「じゃあ、行ってくるわ、刀夜。」

刀夜「ああ…気を付けてな…」

背中に四枚の翼を出し、羽ばたいて行く美月。

美月「さあ！派手にぶちかましたるで！！出し惜しみ無しや！！」

風花「はいです！！」

美月「崩壊の音色よ、全てを消し去る闇となり、破壊せよ！ラグナロク・エミッション！！」

いきなり超強力広域殲滅魔法でその名の通り、崩壊を拡散させる。

美月「まだまだや！風よ！切り裂く刃となりて吹き荒れろ！ブラスト・オブ・ウインド！！」

強烈な風があたりに吹き荒れ、風が全てを切り裂く

風花「美月ちゃん、まだいけますか！？」

美月「余裕や！後５発は軽いで！さあ！次や！炎よ！焼き尽くす紅蓮の焔（ほむら）！！インフェルノ・ブレイズ！」

全てを焼き尽くし、消し去る炎が飲み込む

風花「美月ちゃん！右６８度方向に敵が集結しています！」

美月「わかった！黒金よ！裁きを下す鉄槌となれ！クラック・ダウン！」

高圧縮された魔力弾が鉄槌により打ち出される鉄球のごとく降り注ぐ

美月「ハァ…ハァ…ハァ…さすがに…ちょお…しんどいな…」

風花「大丈夫ですか！？」

美月「ちょっと…飛ばしすぎた…かな…」

風花「無理しないでくださいよ？はッ！後ろから攻撃です！！」

美月「大丈夫や。鋼よ！悪を拒絶する盾となれ！シールド・オブ・スティール！！」

鋼の障壁が魔力弾や砲撃を完全に防ぐ

美月「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…これが…最後やな…響け！終焉の笛！ラグナロクッ！」

白銀の集束砲が全て打ち砕く

美月「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…」

風花「大丈夫ですか？」

美月「ちょお…きついな…でも…後は刀夜と火彩さんに任せようか。」

風花「はいです！」

美月と風花は戻って行った…

続く…

第２５話　派手にぶちかませ！「景気よくな！」（後書き）

作者「ははははははははははははは！！！今日は一睡もしてないぜぇぇぇ！！」

零夜「何やってんだ！アンタはァァァァ！！」

作者「ＦＦ１３やってた！」

零夜「おいィィィィィィィ！何やってんだよおォォォォォ！小説書けよォォォォ！！！」

作者「私は…思い出にはならないさ…」

零夜「なんか突然片翼の天使のセリフ言い出した！？ってかそれＦＦ７じゃん！！」

続いたりするらしい

第２６話　さあ！ｐａｒｔｙの始まりだ！「派手に行くぜ！」（前書き）

今回派手に技を決めるぜ！

派手に行くぜ

第２６話　さあ！ｐａｒｔｙの始まりだ！「派手に行くぜ！」

刀夜「美月！」

美月「あはは…ちょっと無理しすぎた…」

刀夜「ありがとう…ゆっくりしていてくれ。」

美月「うん…」

刀夜「さて…全員行くぞォ！！！！！」

「「「「「「「「「「オオーーーーーーーーーーッ！！！」」」」」」」」」」

さあて！派手に暴れるかァ！

火彩「おらおらおらァ！！ザコはどきやがれエぇ！！」

「火彩さん！刀夜さん！あまり魔力を使いすぎないでください！ザコは俺たちが始末します！」

火彩「おお！済まねえな！」

刀夜「だが、俺たちも少しは暴れさせてもらうぞ！」

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」」

俺たちは、刀で切り捨て！剣で叩き斬り！銃を撃ちまくる！

と言うか≫実は…まあ、殺してはいない

俺たちは可能な限り、人は殺さない

やむを得ない場合のみ、殺す

刀は峰打ち、剣は腹の部分は、銃は動きを止める程度に魔力を絞り、圧縮して小型化して打ち出す

刀夜「まだまだ！」

戦場を駆け抜け、道を切り開いて行く

正面を蹴り飛ばし、背後は殴り、上は投げ飛ばし、斬り、殴り、撃ち、

斬る殴る殴る！！

殴る！！

撃つ！！

単純な作業の繰り返しだが、敵に恐怖心を与え、味方の志気は倍以上に跳ね上がる

圧倒的に数が少ないはずの龍神傭兵団と覇王、聖王の軍が圧倒的物量、圧倒的戦闘力を誇る魔王軍を蹂躙していく。

刀夜「面倒だ！一気に行くぞ、火彩！」

火彩「分かったァ！」

刀夜「極夜！カートリッジロード！！」

極夜『了解！』

火彩「白夜！カートリッジロード！」

白夜『了ォ解だァ！』

刀夜「斬り裂け！黒雷龍！雷龍覇斬（らいりゅうはざん）！！」

漆黒の雷を刀に纏い、帯電した刀を振り下ろす

火彩「焼き尽くせ！！蒼炎龍！！炎龍覇斬（えんりゅうはざん）！！」

蒼い焔を刀に纏い、蒼炎の刀を振り下ろす

黒雷が斬撃と衝撃波と共に、発生

黒雷が全てを打ち砕きながら、切り裂き、吹き飛ばす。

蒼炎と斬撃、衝撃波が発生

蒼炎が全てを焼き尽くし、切り裂き、吹き飛ばす

無論、不殺（ころさず）だ

火彩「見えたぞ！！」

刀夜「今度こそ、あのオッサンを…殺す…！」

続く

第２６話　さあ！ｐａｒｔｙの始まりだ！「派手に行くぜ！」（後書き）

作者「今回は短いが…次回は！」

零夜「戦いか！なら長いな。」

作者「とは限らない。」

零夜「はぁ！？」

作者「この過去回想編は…おっと…これ以上は…な？」

続きまくる

第27話　守る物があるヤツは何処までも強くなる「…ああ…」（前書き）

今回はフザケ無し

…派手に行くぜ…

第27話　守る物があるヤツは何処までも強くなる「…ああ…」

刀夜「っらあ！！」

バゴォォォォン！！

扉をブッ飛ばし、厨二病全開な城に侵入する

火彩「出て来やがれ！！オッサン！！」

「オッサン言うな！！私はまだ38だ！！」

何処からともなく、声が聞こえてくる

火彩「十分オッサンだ！」

「黙れ！お前達もいつかはそうなるんだよ！」

火彩「38になってまだ厨二病全開なお前みたいにはならねぇよ！」

刀夜「……グダグダ言ってないで出て来たらどうだ…！」

「ハッ！気付けよ、始めから此処に居るぜ？」

火彩「ハイ隙ありィィィ！」

背後から声が聞こえた瞬間火彩は回転しながら突き刺した。

が

「残念！ハズレだ！」

上から蹴られる

火彩「ガハッ！」

刀夜「火彩！クソッ！」

「ははは！お前らも強くなってるだろうけどな…」

ヤツの姿が、変わっていく

人ではない異形の姿

そう

まるでその姿は…

悪魔だった…

——————————————————————————————

—————————

はやて「ここで終わり？」

零夜「いや、どう言うわけかここで記憶が一度途切れてるんだ…この次が、魔王と戦って…魔王の死ぬ瞬間だ…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

刀夜「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ゴホッ…！」

火彩「グッ…」

団長「ハァ…グハッ…」

「フッ…やはり…か…」

刀夜「何を…ゼェ…言って…ゴホッ！いる…」

「…これこそが…私の…望んだ…結末だ…私が死に…抑止力は失われ…世界は…さらなる戦いへと…導かれる…そして…その戦いを…終わらせてこそ…真の平和が訪れる……願わくば…その戦いを終わらせるのは…刀夜…お前達で…あっ…て…ほしい…もの…だ…ガハッ！…」

刀夜「…最初から、それが目的だったのか…？」

「初めは…ただ戦いを止めて世界を平和にしたい…そう願って…戦っていた…だが…力をつけ…強くなり過ぎた…するとどうだ…何処の国も…こちらから行かなければ…誰も戦わない、だが他の所とは戦う…通り道に我々がいれば…諦める…こんな抑止力があっては…

永遠に平和は訪れん…だから私が死に…この国が無くなることで…
世界に平和は訪れる…そう考えた…」

刀夜「だか…本当にそうなるとは限らないだろう…」

「いいや、必ずなるさ…少なくとも、私が死ぬことで、世界は変わる……人は…変革していかなければならない…変われなかった者達の…代わりに…変わっていかなければ…ならないのだ…変わることで…人は…世界は前に進んで行く…」

火彩「あぁ…？つまりお前は始めから死ぬつもりだったのか？」

「そう言う…事になるな…」

刀夜「だったら…今此処で…俺が…とどめを刺す…」

「…その前に…これを…お前達三人に…渡したい…」

刀夜「なんだ…この光球は…」

「悪魔の力さ…私の体に宿りし悪魔の…力の最も強い力を込めたものだ…受け取れ…」

光が俺と火彩、団長の元へ飛んでいき、

刀夜「うおっ…」

火彩「うっ…」

団長「ハァ…」

光球が体の中に入った

さぁ…

刀夜「サヨナラだ…クソ親父…」

「サヨナラだ…我が息子よ…」

――――斬ッ!!――――

刀夜「……。」

俺は…城の外で一人たたずんでいた

火彩「…泣いてるのか…？」

刀夜「…いや…雨だよ…」

火彩「…雨なんざ降って無いが…？」

刀夜「俺は…悪魔だ…悪魔は泣かないもんさ…」

火彩「…そうか…だけどな……家族のために…仲間のために…恋人のために涙を流せる悪魔も居るんだろうな…」

刀夜「…さあな。」

火彩「ところで…」

Ｂａｎｇ！Ｂａｎｇ！

突然銃を発砲した火彩

弾は現れた兵士に直撃した

火彩「残党か何かしんねぇけど、やったら兵士が現れてるぜ？まぁ全員ぶっ飛ばしてやるけどな。」

刀夜「……ざっと…１０００００００か…お前も無茶するよなぁ…火彩…まぁ美月と風花、オリヴィエやクラウスの所へ行かせないためにここで全員ぶっ飛ばすか…そう言えばあの子達は…？」

火彩「刀夜…お前もだろう…上手いこと団長が逃がしてくれてるさ…ま、美月ちゃんが付いてるんだ、大丈夫さ。」

刀夜「そうだな…さて、早速この悪魔の力とやらを試すかな…」

火彩「ああ！」

刀夜「じゃあ…そろそろ行くか…！」

火彩「…ああ…！」

行く前に、刀を掲げ、俺は言う

刀夜「夢を抱け…」

火彩「兵士（ソルジャー）…いや、戦士（ソルジャー）の誇りは…！」

火彩が続ける

「「絶対に忘れるな！！」」

刀を振るい、二人同時に叫ぶ！！

シャキン！

「「いらっしゃいませぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」」

俺と火彩は戦った

目の前の敵を全て駆逐するため…

生きて帰るため…

無意識に刀を振るい続けた

撃たれても、刺されても、斬られても、殴られようとも

ただただ、戦い続けた。

気が付けは、周りには誰もおらず俺は倒れていた。

火彩「よぉ…刀夜…生きてるか…？」

火彩が地面を這って近寄ってくる。

刀夜「ああ…まだ…なんとかな…だが…もう無理っぽいがな…」

火彩「俺もだ……へへ…俺達…１００人斬りどころか、１００００人斬り達成しちまったぜ…」

刀夜「あぁ…火彩……雨…降ってきたな…」

火彩「ああ…」

刀夜「…あの子達は…もう…行ったか…」

火彩「ああ…けど…彼女がついてるんだ…心配ない…団長もいるしな…」

火彩「俺…ちょっと眠いな…少し眠らさせてもらうわ…」

刀夜「俺も…もう眠いや…」

火彩「なぁ…刀夜…俺達…英雄に…なれたかな…」

刀夜「ああ…きっと…な…」

火彩「へへ…じゃあ…お休み…」

刀夜「…美月…すまない…後で…迎えに来てくれ…俺は…ちょっと眠ってるからさ…じゃあ…な…」

そして

俺…影宮刀夜
と
アイツ…闇咲火彩
は…

死んだ

……続く

第27話　守る物があるヤツは何処までも強くなる「…ああ…」（後書き）

作者「…今回は…俺一人でやらさせていただきますね…」

今回の話…いや、この過去回想編で言いたかったのは

繰り返される悲劇は、必ず終わりを告げる時が来る

と言うこと

そして最も言いたかったのは

魂は受け継がれ、必ず還ってくる

と言うことです。

では…続く…

第２８話　夢を持て「…。」（前書き）

さて…今回も…まじめに…

派手に行くぜ

第２８話　夢を持て「…。」

零夜「…とまぁ…こういう訳だ…うおっ…！」

うつむいていたから気付かなかったが、話が終わって顔を上げて驚いた

全員が、涙を流していたのだから…

零夜「…あー…朝からする話じゃなかったな…」

はやて「零夜君の…アホ…そんな…辛い事なんでずっと一人で抱え込んでたんや！」

零夜「昨日…火彩と出会って思い出したんだ…俺は…一度死んで…生き返らされたからな…いや…体は違うけど…記憶と心と…魂をな…俺を生き返らせたのは、時空管理局の…最上層部…伝説の戦士（ソルジャー）と呼ばれたらしい俺を生き返らせることで戦力としようとしたのだろう…まぁ…火彩は早くに記憶を取り戻し、すぐ逃げたらしいけど…俺は何も覚えてなくて…父さんと母さん…ああ、刀夜の方じゃなく

て、零夜の方の…両親に助けられた……で今に至るわけだ…つまり、”影宮零夜”の体に”刀夜”の細胞と魂を入れたのが俺だ…だけど…俺はもう影宮刀夜じゃない…俺は影宮零夜だ…」

はやて「でもッ…悲しすぎるやんか！そんなんッ…！」

零夜「はやて…俺達は…産まれてくる時代を選ぶ事はできない…けど…どう生きるかは…自分で決められるんだ…だから…俺は魂に従って生きた…だから…俺は自分の人生を後悔はしていないよ…それに、今ならはやて達が居るから…家族が居るから…そして…夢があるから…」

零夜「今更言うけど…もう１２時…」

「「「「「あ」」」」」

ってことは俺…4時間ぶっ通しで喋りっぱなしだったというのか

どうりで喉が痛いわけだ。

零夜「の…喉が…」

――――――――――――――――――――――――――――――――

零夜「…何故こうなったし…」

現在、俺はソファに座りながら、はやてとヴィータに左右から抱きつかれている

零夜「何故こうなったし。」

極夜『諦めた方がよろしいかと。』

どうでも良いが、右がはやてで左がヴィータだ

零夜「（ザフィーラ…ヘルプミー…）」

俺はこっそりと念話を送る

ザフィーラ「（…無茶を言わんでくれ…シグナムとシャマルが買い物から帰ってくるまで耐えきるんだ…）」

孤立無援かよ…

零夜「…二人とも…離れては…くれないよな…」

「「あ　た　り　ま　え　だ／や　」」

……もう一度言う…何故こうなったし。

はやて「なぁ、零夜君」

零夜「ん？」

はやて「今の零夜君の夢って…何？」

零夜「俺の夢は…戦士（ソルジャー）として、もっとたくさんの人の役に立つこと…それと…この平和を…はやて達を守り抜くことかな…俺の命尽きるまで…な…」

はやて「ふーん…じゃあ、ヴィータは？」

ヴィータ「あたし？うーん…はやてやアニキ達とずっと静かに暮らしていくこと…かな。」

零夜「はやての夢は？」

はやて「う～ん…今は…やっぱりみんなでずっと一緒にいることやね…後…ちゃんと自分の足で歩きたい…かな。」

零夜「…夢を持て…何かを成し遂げたいなら、夢を持つんだ…」

はやて「え？」

零夜「俺が…刀夜が昔火彩に言った言葉だ…夢を…なにか目標があるヤツはそれに向かって全力を出せる。だから夢を持つヤツは強いんだ。アイツは…火彩は英雄になることを夢にしていたから…強くなれた…」

はやて「じゃあ、零夜君の昔の夢って何やったん？」

零夜「…さあな…覚えてない…いや…最初は無かったのかもしれないな…戦士（ソルジャー）になってからはたくさんの人の役に立つこと…だったけど。」

ヴィータ「いってることとやってることが矛盾してるじゃねえか！」

零夜「…今考えたら、おかしなモノだよな…けど、気付けてよかったと思う。」

はやて「なあ、もっと…話を聞かせてくれる？」

零夜「ああ…いいとも…」

火彩「さて…こんなもんかな…俺の話は…な。」

零夜と同じように火彩もフェイトに自身と知りうる限りの刀夜の話
聞かせていた

続く…

第２８話　夢を持て「…。」（後書き）

では、次回はもっと細かい話などを…

キャラ紹介とかとかとか（前書き）

これまでの設定とあらすじまとめ

ネタバレ注意

キャラ紹介とかとかとか

主人公

影宮零夜（かげみやれいや）

年齢：９歳

髪色：黒

魔力光色：漆黒

魔力変換資質：黒雷、影

備考

何百年も前、古代ベルカを中心に活動していた戦士（ソルジャー）

もともとは龍神傭兵団と言う傭兵団に所属していた

その頃の名前は影宮刀夜（かげみやとうや）

魔王と呼ばれたベルカの王の息子にして悪魔の力を受け継いだ刀夜の血と記憶と魂と細胞を受け継いだ存在

傭兵、刀夜時代は戦いばかりで自身を見失いかけていたが、傭兵をやめ、戦士（ソルジャー）となることで自分の夢を再び見つけ、世界中を旅し続けた

旅の途中で聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと覇王クラウス・G・S・イングァルドと出会い少しばかりともに行動した

その後、地球、日本の戦国時代に何らかのロストロギアによって飛ばされる

そこで美月と風花と出会う

そこでたまたま出会った織田信長と出会い少し戦う

その戦いで、闘気を自由自在に操ることを学んだ

そしてしばらく暮した後、再びベルカへと帰る

その後、オリヴィエとクラウスと再会し、魔王に攻められかけていると知り再会した親友、火彩と龍神傭兵団のメンバーとも再会、魔王軍を逆に攻め、魔王と刀夜、火彩、団長とともに魔王を破り、魔王と呼ばれた王が自身の父と知る

魔王自身が体に宿した平行世界の別次元の悪魔の力を受け継ぎ、その直後におよそ１０００００００以上の魔王軍の残党と火彩とともに美月やオリヴィエ、クラウスを守るため戦い、その戦いにおいて死

亡した

そして、管理局の最上層部によって伝説の戦士（ソルジャー）と言われた自身と親友の火彩を戦力とするためとともによみがえらされた

その後、”零夜”としての両親に助けられ、現在に至る

後、個人的にはＣＶは風間勇刀さんだと思っている

デバイス：極夜

もともとは一つのデバイスだった極夜をかつての持ち主が３つの変化機能を
分解し、それぞれ個別のデバイスとして受け継がれていた

刀夜としての記憶を取り戻した零夜があるべき姿に戻したことで、
元の力と人格を取り戻した

あと、作者的には　極夜のＣＶは置鮎龍太郎さんだと思っている

モード１
日本刀
黒い鞘に黒い刀身の刀

モード２
大剣
黒ずんだ銀色の刀身の両刃の大剣

わかりやすく言うならＤｅｖｉｌ　ｍａｙ　ｃｒｙの主人公ダンテのＤＭＣ１の剣、フォースエッジを長くしたもの
長さは１７０ｃｍ程

モード３
長刀
漆黒の刀身の２ｍ以上の長刀
攻撃力と攻撃範囲の長さに特化
ただし重いので攻撃速度は落ちる
それでも十分速いのだが

モード４－１
２挺銃
コルトＭ１９１１ガバメントがデザインのモデルに改造を施し、大型化

連射性と誘導性と魔力圧縮など、複雑な作業に優れている

モード４－２
ツインバスターライフル

速い話がウイングゼロカスタムのツインバスターライフル

魔力集束と砲撃と殲滅など、破壊に優れている

親友

闇咲火彩（やみさきひいろ）

年齢：９歳

髪色：ブラウン

魔力光色：蒼

魔力変換資質：蒼炎、光

備考

龍神傭兵団のエース

刀夜が去った後、刀夜の言った言葉に習い、戦いを変えた傭兵団において最強を誇った

刀夜より先にクラウスのもとに行き、魔王軍の出現にひそかに準備を進めていた

そして刀夜と再会し魔王と戦い、その後約１０００００００人の魔王軍残党と戦い、死亡

現在はフェイトとともにジュエルシードを集めるため行動している

デバイス：白夜

昔から火彩の相棒

逃げ出した際に研究所からもちだした

極夜の兄弟機であり同じ原初のデバイス

第零世代ともいえるデバイス

モード１
日本刀

白色の鞘に白銀の刀身の刀

モード２
バスターソード

片刃の大剣

わかりやすく言えばＦＦ７のクラウドが持ってたバスターソードを
細長くしたもの

長さは１８０ｃｍ程

モード３
籠手、具足
直接格闘戦に特化、攻撃力と破壊力に特化
攻撃範囲が非常に短くなる

モード４－１
銃（リボルバーハンドガン）
Ｍ２９がデザインのモデル　改造して、弾を２発同時発射可能
攻撃力と誘導性と魔力圧縮などに優れている

モード４－２
アサルトライフル
Ｍ１６がデザインのモデル　改造して大型化、狙撃可能なようにスコープが取り付けられ、バレルも延長されている
連射性と砲撃、狙撃、集束などに特化

個人的には白夜のＣＶは岡本信彦さんだとおもっている（喋り方がまんま一方通行なので）

その他

影の魔力変換資質

能力は”あたった魔力変換資質の一時的なコピー、魔力吸収、存在隠蔽”

コピーは自由にｏｎ／ｏｆｆできる

コピー可能時間はおよそ３０分

ただし、

魔力変換資質で攻撃された場合、魔力吸収はできない

強力な攻撃は吸収しきれない
ただし吸収した分の攻撃力は減衰可能

存在隠蔽は影の魔力を纏うことであらゆるレーダー、センサーや感覚に反応されなくなる

しかし、五感の聴覚以外は隠せない

光の魔力変換資質

能力”触れたモノの破壊、魔力相殺”

破壊能力は生物には適用できない　理由は不明

魔力相殺は破壊能力の応用

あらゆる魔力を相殺する

ただし、限界は存在する

が、刀夜の影の魔力よりも限界値ははるかに高い

続く…

第２９話　やりすぎには注意「…クッ…ｏｒｚ」（前書き）

やりすぎには注意

派手に行くぜ

第２９話　やりすぎには注意「…クッ…ｏｒｚ」

どうも、影宮零夜です

あれから約２週間が経ちました

あれからと言うもの、はやてがやたらと俺にくっ付いてくる

え？今もかって？

今俺は…

「「待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」」

シグナムとヴィータと戦闘中で追い回されてるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！

理由!?知らん!多分、俺が伝説になってるとか言ったからだと思うがな!!戦闘狂め!!

零夜「クソォォォォォォォォォォォォ!!!事実を若干ねじ曲げてもう少し弱く見せれば良かったぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

さすがに記憶が戻ったからと言って俺が強くなる訳じゃねぇんだよォォォォォォ!!

第一俺自身の記憶じゃなくて”影宮刀夜”の記憶だから!!

さすがに俺自身では二人相手はキツいから!!

シグナム「飛龍…一閃!!」

零夜「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!?」

ズガーン!!

ヴィータ「グラーフアイゼン！カートリッジロード！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

ヴィータ「ラケーテン…ハンマァァァァァァ！！」

零夜「うぉあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

おいィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！？
なんかエンジンで飛んできたンですけどォォォォォ！？
逃げられねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

極夜『ハァ…モード３使えばいいのに…』

零夜「八刀一閃まだマスターしてねぇ！」

極夜『けど、アレがまだマシかと思うのだが？それに一応記憶はあるんだ、やってみる価値はあると思うがな。』

零夜「クソッ！どうせ逃げられん！やるしかない！極夜！モード３！」

極夜「了解…」

全力疾走を止め反転し、迎え撃つ

極夜『落ち着いて、記憶をたどれ…刀夜がどうやって八刀一閃をやっていたか、どんな修行をしたか、魂を呼び起こせ！』

零夜「魂を…呼び起こす…！」

ヴィータ「うおらぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

零夜「…八刀…一閃…」

シャキン！

ヴィータ「うわぁぁ！」

零夜「…夢幻刀…」

掲げた右手の上に黒い魔力で形成されたで刀が現れる

零夜「…行け…」

シグナムが飛んでくる所に投げつける

無意識下でその作業を俺は行っていた。

シグナム「なッ！？クッ…！」

夢幻刀は回避されたようだな

ならば

零夜「夢幻刀・八閃。」

今度は８つ同時に投げつける

シグナム「紫電…一閃！！」

刀は炎を纏った剣で叩き落とされた。

ならば

零夜「極夜、モード４－１、一撃で仕留める。」

極夜『極めて了解。モード４－１』

零夜「…チャージ…」

右手の銃に魔力を収束、左手の銃は連射による牽制を行う

極夜『完了。』

零夜「…バーストシュート。」

Ｂａｎｇ！

僅かに誘導性がある収束魔力弾を放つ

シグナム「こんなモノッ！」

レヴァンティンで叩き斬ろうとするシグナム

通常の弾なら、十分だが…残念ながらこの弾は…

特別製だ

シグナム「ッ！？」

叩き斬ろうと、剣が魔力弾に当たった瞬間、爆発が起きる

バーストシュート…その名の通り、当たったり、衝撃が加わると、大爆発を起こす。

これは魔力収束を僅かに行い、微妙なタイミングで収束を止め不安

定な状態にあえてする事で、収束魔力弾に魔力爆発効果を付与する。

複雑作業が得意なモード４でのみ可能だ。

零夜「…ハッ！やりすぎた…！」

極夜『…まぁ、大丈夫だろう…』

続く

第２９話　やりすぎには注意「…クッ…ｏｒｚ」（後書き）

作者「今回は…なんとゲストが来ておりまーす。」

零夜「何ぃ！？」

作者「俺が秀吉で化物級から主人公の木下秀吉君が来てくれましたァ！ではどうぞー。」

秀吉「どーもー、木下秀吉でーす。」

零夜「なんだアンタか。」

秀吉「そうだ。ちなみに、零夜は俺のトコの小説、俺が秀吉で化物級の後書きにもでているぜ！」

零夜「誰に言ってんだ？」

秀吉「お前の言葉を借りるなら、虚無（読者の方）の存在にだな。」

零夜「なるほど。」

デスサイズ・０「秀吉、動くなよ。」

秀吉「え？ああ、わかった。」

デスサイズ・０「Ｄｉｅ！！」

秀吉「うぉぉぉぉ!?いきなり刀で何しやがる!」

デスサイズ・０「ハーレムとか!!死にさらせ!!」

秀吉「うぉぉ!?なんかス○ンドみたいなのがでた!?」

デスサイズ・０「死ねぇぇぇぇぇ!」

秀吉「クッ!」

ブンッ!

デ・０「うぉぉ!危ねぇな!ッてコンパス!?」

バチバチッ!

デ・０「スタンガンだと!?小癪な!叩き斬る!」

シャキィン!

「って今度は鎖鎌!?ギャアアアアアアアア!!」

秀吉「鎖鎌が頭に刺さったァ！？」

零夜「大丈夫だ、うちの作者はこの程度では死なない」。

秀吉「いや！大量出血してるぞ！？」

零夜「問題ない。」

「アガガガガ！」

秀吉「さらにスタンガン！？アレ生きてんのか！？」

零夜「生きてはいるな。」

「「秀吉に手をだすな！」」

零夜「あしゅきの言うところの秀吉ラバーズとやらか…」

続く…だろうな…

第３０話　魂（前書き）

今回はサブタイに零夜コメント無し

派手に行くぜ

第３０話　魂

「「負　け　た　…」」

零夜「……。」

シグナムとヴィータが二人してｏｒｚになっている。

いや、まさか八刀一閃が出来るなんて思ってなかったし…その後の夢幻刀もバーストショットも無意識下の行動だったし…

あるぇ？

なんで無意識下でこんな事出来たんだ？

んでもって、もう夜になっていた

まあ、俺は寝ているわけなんだが

――――――――おい――――――――

ん？なんか聞こえる。

…気のせいか

――――――――おい――――――――

…気のせい…だよな…

――――――――起きろ！――――――――

…起きろって？寝かせろよ…朝からあの二人に追い回されて、戦って、疲れてんだよ…

ーーーーーー起きろつってんだろ！！ーーーーーーーー

零夜「うるせえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！こっちは疲れてんだよォォォォォォォォ！つか誰だコラァァァァ…あ？なんだ…ここは…？」

「おお！やっと起きたか！」

零夜「…俺…？」

ここがどこなのかわからない　よくわからない真っ黒な空間だ

さらにおかしなことに、俺の目の前に”俺”がいる

と言っても、身長ははるかに俺より高く、体つきも完全に大人だ

そう、俺…”影宮零夜”ではなく、俺の目の前には

”影宮刀夜”がいたのだ

刀夜「おい…なんか、鳩が砲撃食らったみたいな顔してるぞ?あ、いや散弾だったっけ?まあなんでもいい」

零夜「お前は…誰だ?」

刀夜「分かってんだろ?俺が誰で何者なのか。」

零夜「俺…いや、俺の記憶、魂、血…か。」

刀夜「そう、俺はお前でお前は俺だ。」

零夜「何の用だ…」

刀夜「ん?ああ、記憶を取り戻したろ?まあ”俺の”だが…ん?だが俺はお前でお前は俺だからお前の記憶でもあるわけか。まあそんなことはどうでもいい、記憶は完全じゃあなかったはずだ。」

零夜「ああ。」

刀夜「いや、それでイライラしてるから色々話をしてやろうと思ってな。」

零夜「なら早くしてくれ、眠い。」

刀夜「まあ面倒だから単刀直入にいくぞ、お前の魂は半分しかない。」

零夜「…は?」

刀夜「半分は俺のだからな。まあ速い話意識が二つあるわけだ。」

零夜「まさか今日無意識で戦ってたのは…」

刀夜「俺が体を拝借して戦ったからだ。」

零夜「じゃあ俺の記憶は！」

刀夜「俺が封印してる、悪いが、記憶を解放するわけにはいかない。」

零夜「何故だ。」

刀夜「お前が知るにはまだまだ早い。ま、俺が良いと思ったら思い出させてやるよ。」

零夜「…わかった…」

刀夜「へぇ…意外と素直だな。」

零夜「どうせ何を言っても無駄だろう?それにしつこく迫られるのは苦手なのは分かってる。」

刀夜「まぁ…そうだな。よし、そんなお前に1つ、プレゼントをや

る。右手を出せ。」

零夜「はいよ。」

刀夜は俺の右手を自分の右手で掴んだ。

刀夜「俺のクソ親父から受け継いだ力。悪魔（デビルブリンガー）の右腕を目覚めさせてやるよ。ああ、あと、見た目がえらいことになるが、ちゃんと元に戻るから心配するな。じゃ、また会おう。」

その瞬間、俺は意識を手放した。

続く…

第３０話　魂（後書き）

作者「さぁぁぁぁてぇぇぇぇ！！今回も”俺が秀吉で化物級”の主人公、木下秀吉がゲストで来てくれてますぜぇぇぇぇぇ！」

秀吉「どうもー！」

零夜「作者、１つ問いたい。」

デ・０「なんだ？」

零夜「あのバイクは何だ？」

デ・０「後で分かる。」

零夜「そうか。」

秀吉「そう言えば、うちの作者が遅れて来るらしいぜ。」

作者「そうかい、ならば回し蹴りでも練習しておくか。」

零夜「秀吉、毎日大変らしいが…体は大丈夫なのか？」

秀吉「ああ、問題はねぇよ。…多分…」

零夜「まぁ…いざとなったら俺と火彩を呼んでくれてかまわないからな。」

火彩「そうだ、なんならお土産も持って行ってやるぞ。」

秀吉「おう！ありがとうよ！」

デ・０「奥義！５回転回し蹴りィィィィィィィィィィ！！！」

あしゅき「すんませーん！遅れまアグボァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

デ・０「あ」

秀吉「あ」

零夜「あ」

火彩「あ」

あしゅき「グフッ…」

デ０「…ヤベェ…」

秀吉「大丈夫だ。多分生きてる。」

零夜「すごい生命力だな。うちの作者の奥義、５回転回し蹴りを食らって生きてるとは…」

デ０「今だ…！秀吉ィ！覚悟！」

ドゥルン！ドゥルゥン！

火彩「あのバイク、秀吉をひくためかよ！！」

秀吉「アホ作者！後は頼む！」

あしゅき「うん？なんだ？ッてなんかすごいのが来たァァァァァァァァァァァ！！」

デ・０「食らいなァ！」

秀吉「ほいっ！」

あしゅき「ギャァァァァァァァァ！」

零夜「自分とこの作者を盾にしたァァァァ！？」

デ・０「貴様ァァァァ！逃がすかァァァァ！」

火彩「あ、どっか行っちまった…」

あしゅき「なんで…こんな…ガクッ」

この後書きは終わらぬよ！

第３１話　結局の所親友は一番頼れる「…まあな」（前書き）

ようやく本来の主人公登場

派手に行くぜ

第３１話　結局の所親友は一番頼れる「…まあな」

悪魔（デビル）の右腕（ブリンガー）

最初は意味が分からなかった

だが、目覚めて俺は気付く。

確かに、悪魔の右腕（デビルブリンガー）だと。

零夜「……。」

朝起きて、とりあえず右腕の包帯を取ってみた、が特に変化はないようだった。

……ハッタリか？

それともただの夢だったのか？

零夜「…まぁいいか…」

俺はリビングへ向かった

おっと、その前に顔を洗うか。

零夜「おはよう、はやて，シャマル、シグナム、ザフィーラ。」

はやて「おはよう、零夜君。」

シグナム「おはよう、零夜。」

シャマル「おはよう、零夜君。」

ザフィーラ「…ああ…おはよう…」

零夜「…ヴィータは？まだ寝てるか？」

はやて「うん、ゆっくり寝てるわ。」

シャマル「ヴィータちゃんは朝弱いですから。」

零夜「ま、仕方ないさ。っと、噂をすればたな。」

ヴィータ「ん～…おはよ～…」

零夜「…まずは顔洗ってこい…」

ヴィータ「ん～…」

ヴィータはそのまま洗面所までふらふらと歩いて行った。

零夜「はやては、今日病院だったっけ。」

はやて「うん、今日はシャマルとシグナムに着いてきてもらうから、零夜君はゆっくりしてて。」

零夜「ああ、そうさせてもらうよ。」

零夜「と言う訳で…市内をうろついてみることにしたが…」

極夜『零夜、久々に虚無(読者の方)の存在への語りかけが口に出ているぞ。』

おっといけねぇ…油断するとすぐ口に出ちまう…

零夜「さて…どうするかな…」

そう

俺は道に迷ったのだッ！！

零夜「参ったな…まぁ…いざとなったら飛んで行きゃあいいンだが…極夜…どうすればいいだろうか？」

極夜『私に聞くな。』

零夜「どーすっかねぇ……歩き回るか…」

極夜『…間違い無く余計に迷うぞ。』

「あの～…」

零夜「ん？」

声を掛けられ、振り返ると、栗色の髪を二つに結んだ女の子が居た

……たしか…火彩と戦う前…反対側に居た子だな…

「もしかして…火彩君のお友達…ですか？」

まて…火彩を…知っている…！？この子からすれば敵側では？

零夜「どうして火彩の事を知っている！？」

「あわわわわっ！！そ、そこはちゃんとお話するから離して～～～！！」

零夜「あっ…す、すまない…」

つい肩を揺すってしまった…

「だ、大丈夫……確か火彩君から多分こうなるって聞いてたから…」

零夜「アイツ…」

「にゃはは…でも、火彩君、”アイツは良いヤツだ、何かあったら俺の名前を出して助けてもらえ”って言ってたよ?すっごく仲が良いんだね。」

零夜「まぁ…仲は良いな…」

「あ、名前を言うの忘れてたね。私、高町なのは。」

零夜「一応名乗っておく、影宮零夜だ。よろしく。」

なのは「道の真ん中で立ち話は駄目だよね、ちょっと着いてきて。」

零夜「ああ。」

零夜「喫茶店…？」

なのは「そ、喫茶翠屋。私のお父さんとお母さんが経営してる店なの。」

零夜「なるほど…」

零夜「…聞かせてくれ、火彩と…あの…火彩の横に居た…あの子…たしか…フェイト…だったか？それと君の後ろに居た、あの水色の服の…」

なのは「氷雨(ひさめ)君かな？」

零夜「出来るだけ聞かせてほしい。」

なのは「うん、まず私が魔法と出会ったときの話から…」

続く……

第３１話　結局の所親友は一番頼れる「…まあな」（後書き）

「どーも、作者のデスサイズ・０、略してＤ０です。」

零夜「主人公の影宮零夜です」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉でーす。」

Ｄ０「さて、早速だが秀吉、何故君はそんなにハーレムを形成してしまい、一瞬で女性を落とすのかね？」

秀吉「作者の趣味だな。」

Ｄ０「そうか、ならＹｏｕ　ｓｈａｌｌ　ｄｉｅ！」

秀吉「うおッ！？」

零夜「相変わらず作者は嫉妬の力で無駄に強くなるな…」

Ｄ０「アンタは一体何なんだァーーーーッ！！！」

あしゅき「通りすがりの仮面ライ「アンタには聞いてない！！」

…ｏｒｚ」

ヒュウウウウ…

ドゴォォォォン！！

零夜「…何の音だ？」

秀吉「なんか機動戦士みたいなのが降ってきたァァァァァ！？」

あしゅき「アレだね、秀吉ラバーズね科学力を結集したんだろうね。
秀吉の首を狙うデスサイズ・０さんを粛正するために。」

零夜「本当にウチの作者がご迷惑を…」

Ｄ０「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！？なんか殴ってきた！？」

零夜「死んだな。」

秀吉「死んだね。」

あしゅき「死にましたね。」

Ｄ０「ところがギッチョン！そうは問屋が許さないぜ！」

秀吉「機動戦士モドキの拳を刀で受け止めた！？」

あしゅき「まるでＤＭＣ４の最後の方のシーンみたいだ。」

Ｄ０「…勝ったか…」

零夜「ん？なんだ？メモ書き？どれどれ…『この機動戦士は機動後３分で爆発します』……逃げろォォォォォォォ！！」

Ｄ０「あ！ちょ！くそったれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

ドゴォォォォン！！

Ｄ０「ギャァァァァァァァ！！」

秀吉「煙がドクロｗｗｗ」

あしゅき「ヤッ◯ーマンみたいだなｗｗｗ」

零夜「確実に死んだな。」

Ｄ０「あー、死ぬかと思った。」

「「「生きてたァァァァァァァァ！！」」」

謎の戦いはまだまだ続く！

第３２話　悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…（前書き）

もう今回みたいな話の時はサブタイの「」内は無しで。

派手に行くぜ

第３２話　悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…

……あああああ…なんか…話が…ループしてる…
とりあえず…重要だと思ったところだけどうぞ…

なのは「で、私と氷雨君が出会ったのが、ユーノ君と魔法の練習してた時でね、私に魔法の事をたくさん教えてくれたの！」

その…氷雨と言うヤツ…あってみたいものだ…

なのは「で、どこから来たのか聞いたけど、分からないって言うから今はうちに居てもらってるの！今は…多分散歩に行ってるんじゃないかな。」

零夜「うんうん…」

なのは「でね！氷雨君が私がピンチの時に……

Ｏｋ…なのは…君がどれだけその”水川氷雨”と言うヤツの事が好きなのかよーく分かった…

頼むから火彩の話を…

なのは「で、最後にフェイトちゃんと戦ったた時に火彩君と氷雨君も少し離れて戦ってたの。」

零夜「…分かる範囲でいい、その話を聞かせてくれないか？」

なのは「う～ん…私は…分からないなぁ…」

「なのはー！」

なのは「あ、氷雨君！」

なるほど…彼が…
右目の眼帯が気になるが、聞かずに置こう…

氷雨「なのは、この子は？」

零夜「影宮零夜、だ。よろしく。」

氷雨「ああ、君が火彩の言ってた零夜君か。僕は水川氷雨（みずかわひさめ）、よろしく。」

なのは「氷雨君、どうしたの？」

氷雨「うん、フェイトと火彩からまたビデオレターが届いたから知らせに来たんだ。」

なのは「本当に！？」

零夜「ああ…アイツら…今は管理局にいるんだったか……」

氷雨「君も見に来ないか？」

零夜「いや、遠慮しておく。帰りが遅くなると家族が心配する。ああ、ビデオレターなら返事するだろう？火彩に俺からの伝言を伝えてくれ。”いざとなったら俺の両親、影宮剣夜、影宮零華、この二人の名前を使えばいい。大体は何とかなる。”と。」

氷雨「分かった。確かに伝えておくよ。」

零夜「さて、俺はそろそろ帰るかな。お土産に…何か買って帰りたいんだが…何がオススメかな？」

なのは「う～ん…」

零夜「…まぁ…金があまり無いんだが…」

なのは「あ！じゃあ、シュークリームとかは？」

零夜「シュークリームか…よし、そうするか…」

と言うのが俺がまとめた結果だ。

本来はこの倍以上の長さがあった

だがぶっちゃけどうでもいい話（俺にとって）が7割で、重要な話（俺にとって）は3割だった

つまりスルーしてしまった訳だ。

そして俺は今、帰宅途中である。

零夜「もう4時か…はやてはもう帰ってるかな。」

極夜『私達と同じくらいだと思うが。』

零夜「図書館行ってる可能性もあるな。」

極夜『零夜、どうやら私の勘が正しかったようだぞ。』

零夜「あ？」

はやて「あ、零夜君！」

極夜『な？』

零夜「ああ…お前、よくわかったな…」

極夜『まあな。』

はやて「何の話？」

零夜「いや、大したことじゃないよ。それよりはい、お土産。シュークリーム、買ってきたよ。」

はやて「これ、翠屋のやつやん！」

零夜「そんなに有名なのか？」

はやて「めちゃくちゃ有名やで！？知らんかったん！？」

零夜「うん…まあ…知らなかった…」

はやて「よく買えたなぁ…」

零夜「まあ…な…ある意味…火彩のおかげみたいなもんだけど…」

はやて「ふぅん…一回、あってみたいなぁ…今度、連れてきてくれへん？」

零夜「あ～…ちょっと…アイツ、しばらく遠出するから帰るのはかなり後になるって言ってたから…しばらくは会えないなぁ…」

はやて「そっかぁ…それは、ちょお残念やなぁ…。」

零夜「ま、帰ってきたら連絡はくれるらしいから、その時に…な？」

シグナム「主はやて、零夜、そろそろ、家に…」

零夜「そうだな、速くコレを食べよう。」

そして、翠屋のシュークリームはみんなでおいしくいただきました

零夜「はぁ…」

俺は、自室で寝そべりながら考えていた

戦士（ソルジャー）として、これからどうするか

俺の夢…戦士（ソルジャー）として人々の役に立つなら、ここを…はやてのもとを離れなきゃならない

けど…けど、その夢と同じくらいに…このままはやてたちと一緒にここで暮らしていたいと言う気持ちが強い…

夢…と…心…

俺は…どうしたらいいんだ…

零夜「俺は…俺は…どうしたらいいんだ…夢を実現したいのに……
はやてと離れたくない…なんなんだよ…これは…」

極夜『…零夜…それはな…お前がはやての事を好きだと言うことだ
と思うぞ…』

零夜「俺が？はやての事を好き…？俺は…はやての事が…好きなの
か…？」

――――――――その通りだ！――――――――

頭に声が響く

零夜「グッ…」

激しい頭痛に襲われる。

そのまま、俺は意識を手放した。

零夜「……またお前か…刀夜…何の用だ？」

刀夜「いや、お前の悩みを解決する方法を教えてやろうと思ってな。まぁ、ヒントだけだがな。」

零夜「ヒント？」

刀夜「まず一つ。…あの子…はやてだっけか？あの子の気持ちを考えてやれ。二つ目。お前はもう少し欲張れ。欲が無さ過ぎだ。三つ目。お前の魂はなんと言ってる？心は？なんと言ってる？考えてわかんないなら、頭で考えるな。魂に従え。お前のお前自身の魂に…な…」

零夜「魂…に…」

刀夜「ああ、そうだ最後に一つ。お前はあの子の事が好きだろう。ただ、それが”ｌｉｋｅ”なのか”ｌｏｖｅ”なのか、よーく考えてみろ、わかんなかったら……コレばっかりは知らん！！」

そして、再び俺の意識は遠のいていった…。

零夜「……ハァ…」

わざわざ俺の魂を自分の魂の空間に呼び出して言うことか…？

いや…まぁ…ヒントにはなったかな…

零夜「はやての…気持ち…か…」

また悩む事になっちまったな…

続く…

第３２話　悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…（後書き）

Ｄ０「Ｔｈｉｓ　ｐａｒｔｙ､ｓ　ｇｅｔｔｉｎｇ　ｃｒａｚｙ!
Ｌｅｔ､ｓ　ｒｏｃｋ!!」

零夜「どうも、主人公の零夜です。」

火彩「後書きに久々の登場、闇咲火彩だ。」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

Ｄ０「Ｈｅｙｈｅｙｈｅｙｈｅｙ!!Ｗｈａｔ､ｓ　ｕｐ!
？　Ｉｓ　ｔｈａｔ　ａｌｌ　ｙｏｕｒ　ｔｈａｔ!?」

あしゅき「Ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｄｉｅ!!」

零夜「何言ってんだ?」

秀吉「和訳するとこうだな←」

Ｄ０「オラオラオラオラオラ！どうしたァ！？それがお前の本気か！？」

あしゅき「死ねッ！」

秀吉「こんな感じだな。」

零夜「さすが秀吉。」

火彩「あの二人は何で戦ってんだ？そして何故、あしゅきは仮面ライダーフォーゼに変身してるんだ？」

秀吉「…俺の所の後書きを見ればわかる」

零夜「あと此処の２話くらい前の後書きもな…」

Ｄ０「くらいやがれ、超必殺、Ｒｉｓｅｉｎｇ ｄｒａｇｏｎ！！」

あしゅき「ギャアアアアアアアアア！！！！」

秀吉「やっぱ負けちまったか」

零夜「ああ。」

火彩「元の戦闘能力の差だな。」

秀吉「昇竜拳だもんな、あの技。うちの作者がいくらフォーゼに変身しても圧倒的差がある。」

Ｄ０「っしゃあ！！」

あしゅき「我が生涯に…一片の悔い無し…」

火彩「死兆星指しながら倒れたぞ。」

秀吉「大丈夫だ、問題ない。」

意味ＷＡＫＡＲＡＮが続く！

第３３話　余計なことはするもんじゃない　「全くだ。」（前書き）

初、零夜以外の視点で書いてみた

派手に行くぜ

第３３話　余計なことはするもんじゃない　「全くだ。」

ｓｉｄｅはやて

私は、零夜君の部屋にお風呂上がって、開いたから入ってって言いに行った、そしたら部屋の中から零夜君の声が聞こえてきた

零夜「…やっぱり俺…はやての事が好きなんだ…」

驚いてつい部屋の前で呆然としてた…

でも、嬉しかった

だって、私も零夜君の事が好きやったから。

だから――――――――

はやて「零夜君…」

私は零夜君の部屋に入った

零夜「はやて…どうした?」

零夜君の顔が紅い

けど…多分私の顔はもっと紅いと思う…

それでも…言わなあかんことがあるんや…

はやて「零夜君…あの…その…零夜君は私のこと…好き？」

零夜「へえあっ！？／／／／／／／／／／／／／／／」

はやて「・・・どお？」

零夜「…それは…その…」

はやて「私は…大好きやで、零夜君のこと／／／／／／／／／／／／／／／」

零夜「……そう…か…そういうことか…うん、俺も…俺も、はやてのことが大好きだ…！家族として…だけじゃない…はやてのことが、一人の女の子として。／／／／／／／／／／／／／／／」

はやて「じゃ、じゃあ…」

零夜「……ストップ…」

はやて「？」

零夜君がドアを開けた

ヴィータ「うわっ！？」

シャマル「きゃあっ！？」

シグナム「おおっ！？」

零夜「…やっぱりか…」

どうやら三人が聞いてたみたいや

はやて「…はぅぅぅぅ…／／／／／」

零夜「どっから聞いてた？」

零夜君が刀を持って尋問してる。

本気で怒ったみたいやな…

シャマル「その～…け、結構始めから…」

はやて「私が部屋に入ったくらい…？」

ヴィータ「そ、その少し後…」

零夜「…よーし！三人共、言い訳は後で聞くから正座して目をつぶれ！」

「「「は、はいぃぃぃぃ！！」」」

零夜「よし…！まず一発！」

パコーン！

ヴィータ「あだっ！？」

零夜「次、もう一発！」

パコーン！

シャマル「きゃあっ！？」

零夜「これで最後だ！」

パコーン！

シグナム「っ！？！？！？」

な、なんて威力のでこぴんや…あの三人、ましてやシグナムまでもが威力だけで思っきりのけぞったで！？

零夜君マジギレやん！

あ、でも私も後一発ずつ後でやっとこ。

せ、せっかく私が勇気出したのに…

盗み聞きはあかんで…

ってまだ同じ威力のを！？

はやて「れ、零夜…その…あんまりやりすぎたらあかんで…」

零夜「はっ!?俺は一体何を!?」

「「「「まさかの無意識!?」」」」

零夜「…えーと…はやても俺も実はお互いの事が好きでドアを開けたら三人が居て…ってことは／／／／／／／／／／」

はやて「き、聞かれてたみたいやな…／／／／／／／／／／」

シャマル「（今の内に！）！シグナム！ヴィータちゃん！行くわよ！」

ヴィータ「え？うえぇ！？」

シグナム「な、何をする！？」

……二人ともシャマルに引きずられていった…

…ナイスや、シャマル。

零夜「……」

はやて「……」

…あかん…めっちゃ気まずい…

零夜「…はやて！」

はやて「ひゃあっ！？！？」

あわわわわわ…／／／／／／／／／／／／と、突然抱きしめられたぁぁぁぁ！？／／／／／／／／／／／／

か、顔が…近い…／／／／／／／／／／／／

零夜君…顔もカッコイイから凄いドキドキする／／／／／／／／／／／／

零夜「ごめん、はやて…俺…何を言えばいいか…分かんなくなって…思い切って…つい…」

はやて「…はふぅ……」

零夜「…はやて？」

はやて「ふにゃあ～…」

零夜「……どーしよ…はやてが…」

…こんな幸せが…ずっと続いたらええなぁ…

続く…

第33話　余計なことはするもんじゃない　「全くだ。」（後書き）

ＤＯ「アグボァァァ！！」

火彩「…またか…」

秀吉「おいいいい！？いきなり錐揉み回転して飛んでるぞおおおお！？」

「「秀吉君に余計な手をだすなぁぁぁぁぁ！！」」

ＤＯ「あぎゃあああああ！！！ってふざけんぁぁぁ！！」

秀吉「リンチ！？」

火彩「怖ろしいな…」

ＤＯ「やっと帰ったか…」

ドゥルン！ドゥルゥゥゥゥン！

火彩「あ？バイクのエンジン音？」

あしゅき「遅れてすいませーん！」

ドゴッ！

ＤＯ「オンドゥルルギッタンディスカァァァァ！！」

キラーン！

火彩「あ」

秀吉「あ」

あしゅき「あれ？デスサイズ・０さんが居ない？零夜君も居ない？」

火彩「…零夜ならあそこで…」

あしゅき「ああ…なる程ね…はやてと…ねぇ…（ニヤニヤ）よし！秀吉、帰るぞ！サイドカーに乗れ！」

秀吉「わかった。」

あしゅき「じゃ！」

ドゥルウウウウウン！

秀吉「オイ！なんかモンスターみたいなのが出たぞ！」

あしゅき「まかせな！」

（ＢＧＭ：ＦＦ７戦闘曲、たたかう者達）

秀吉「って何でＦＦ風バトル！？」

あしゅき「サンダガ！」

秀吉「って何やってんだよ！」

あしゅき「お前も戦え！」

秀吉「わかったよ！ええと…とりあえず〝たたかう〟だ！」

ドカバキボコッ！

テテテテーテーテーテッテテー

あしゅき「さすが秀吉…チートだ…まぁいいや、帰るぞ。」

秀吉「ってまたきたぁぁぁ！」

あしゅき「面倒だ！」

ジャキン！

秀吉「バイクから剣がでてきたァ！？」

あしゅき「食らえ！」

秀吉「何てヤツだ…」

まだオワランヨ！

第３４話　二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねぇよ…／／／／／」

今回は甘いです

自分でもびっくりくらい甘いです

ブラックコーヒーかカカオ８０％くらいのチョコを用意して覚悟してお読みください。

それでは

派手に行くぜ

第３４話　二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねぇよ…／／／／／」

Ｓｉｄｅ零夜

数日後…

はやて「零夜君、今日は昼ご飯…何作ろかな？／／／／／／／／／／／」

零夜「そ、そうだな…８月になって…まだまだ暑いから…ざるそばとかは…？／／／／／／／／／／／」

ヴィータ「…く、空間全てが…甘い…」

シグナム「…甘い…しばらくは砂糖がいらない気がするな…」

シャマル「いいわねぇ…（ニヤニヤ）」

ザフィーラ「…主が幸せなら、それで良い…」

四人がなんか言った気がするが、気にしない、気にするつもりなど毛頭ない

そんなことよりはやてと居る方が大事だ。

はやて「じゃあ、買い物行こか♪／／／／／／／／／／」
零夜「ああ、行こう／／／／／／／／／／」

零夜「なぁ、はやて。」
はやて「ん？どないしたん？」
零夜「はやて、俺って欲が少ないかな？」
はやて「うん。」

零夜「即答か…」

はやて「もうちょっと私らを頼ってほしいかな～。」

零夜「…そうするよ…よく考えたら…ほとんど自分でなんとかしてたもんな……」

はやて「まぁ、そこが零夜君の良いとこであり悪いとこやね。」

零夜「けど、はやても…ちょっとそんなとこあるだろ？」

はやて「う…言われてみれば…ちょっと…」

零夜「…じゃあ…お互い、みんなで頼って行くって事で…／／／」

はやて「うん！／／／／」

「「ただいま！」」

はい、色々すっ飛ばして帰宅。

零夜「はやて、大丈夫か？」

はやて「うん、大丈夫やで。」

零夜「よかった、今日はやけに暑かったから心配だったんだ…」

はやて「もう…心配し過ぎやって…嬉しいんやけど／／／／／／／」

零夜「まぁ…はやてに何かあったら大変だし…／／／／／／／／」

ヴィータ「…今ならブラックコーヒーでも飲めそうだ…甘過ぎて…」

シグナム「…普通の人なら糖尿病になりそうなくらい…甘い…」

シャマル「あ～もう見てて楽しいわぁ～…（ニヤニヤ）」

ザフィーラ「…楽しいのか…？」

ザフィーラ…的確なツッコミ、ナイスだ…俺も思ったぞ…

はやて「じゃあ、早速始めよか♪」

零夜「ああ！」

はやて「じゃあ、５分計ってくれる？」

零夜「わかった！」

はやて「じゃ、食べよか。いただきます！」

「「「「いただきます！」」」」

零夜「お～…やっぱりはやてが作った料理は何でも美味いなぁ……
…毎日食べていたい…」

はやて「もぉ…／／／／／そんな事…言わんでも毎日食べさせてあげるのに…／／／／／／／そもそも二人で作るから美味しいわけやし…／／／／／／／／／」

ヴィータ「…甘過ぎる…甘過ぎてもう蕎麦が砂糖の味しかしねぇ…」

零夜「はやて、今日は何を読む？」

今は、図書館に家族全員で来ている。

はやて「そうやなぁ…また、童話を読もうかな…」

零夜「Ｏｋ、じゃあ向こうだな。」

すげぇ今更だけど、前に見つけた父さんの本

古代ベルカ文字読めるから読んだら

全部マスターしてる魔法でしたとさ

ハハッ　ワロスｗｗｗ

全く訳にたたねぇ

零夜「さてと…俺は何を読むかな…」

何となく適当に小説を手に取ってみる。

……何だこの本…

俺が秀吉でお兄様!?

……どっかで見たような気が…

ま、いっか。

はやて「零夜君、珍しくたくさん借りたなぁ…」

零夜「まあね。」

つい面白くて…俺は全巻借りてしまったのだった…

はやて「じゃあ、帰って晩御飯の準備や！」

帰宅！

ヴィータ「はやてー！今日の晩御飯、何？」

はやて「ふふふふふ…今日はな…お好み焼きや！」

ヴィータ「おお！アレか！アレは美味かったからなぁ～楽しみだ！」

はやて「さぁ！みんなで準備するで！まずはシャマル、野菜切ってくれる？で、ヴィータは山芋するのを手伝って！」

「「はーい！」」

零夜「よし、俺はホットプレートを用意する。」

シグナム「では、私も手伝おう、一人では重いだろう。」

零夜「いや、いいよいいよ、はやてを手伝ってあげてくれ。」

一応悪魔（デビルブリンガー）の右腕だから力は凄い

はず…

零夜「っらあ！」

よし、やはりこの悪魔（デビルブリンガー）の右腕は見た目が通常の右腕でも力は凄まじいな。

力の調節はまだ完璧には出来ないけど。

この前なんて突然箸を握りつぶしてしまったり、ボールペンが砕け散ったり…

色々大変だった…

零夜「はやて、準備出来たぞ。」

はやて「こっちも準備Ｏｋや！さぁ、焼くで！」

零夜「楽しみだ。」

はやて「はい、零夜君。」

はやてに豚肉のお好み焼きを取ってもらう

零夜「ありがとう、はやて。」

シグナム「シャマル、その海鮮のを取ってくれ。」

シャマル「はい、どうぞ。」

シグナム「ん、ありがとう。」

ヴィータ「アニキ、あたしにも豚肉のを取ってくれ！」

零夜「はいよ。」

ヴィータ「ありがと！」

はやて「れ、零夜君…」

零夜「ん？」

はやて「あ、あーん…／／／／／／／／／／」

零夜「え／／／／／」

マジですか…ここでそれをやるんですか…

ま、いいけどな／／／／／／

零夜「あ、あーん…／／／／／／／／／」

はむっ…

はやて「ど、どう…？／／／／／／／／／／」

零夜「あ、ああ…美味しいよ…／／／／／／／／／／」

実際は、緊張で味など解らなかったが。

…ハァ…

いいものだな…

続く…

第３４話　二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねぇよ…／／／／／」

ＤＯ「どうも、最近友人にマテリアルゴーストの疑いを掛けられた作者、デスサイズ・０でーす」

零夜「主人公、影宮零夜です。」

はやて「ヒロインの八神はやてでーす！」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

あしゅき「で、その作者、あしゅきです。」

ＤＯ、あしゅき、秀吉「「「ゴブハァァァァァァァァァァ！！！」」」

秀吉「な、なんて甘さだ…危うく死ぬところだったぜ…」

あしゅき「この俺が…ここまで吐糖するとは…恐ろしいもんだ…」

ＤＯ「書いた俺が一番つらかった…書きながら吐糖して何度気絶したことか…」

はやて「なぁ、零夜君…／／／／／今日は、零夜君と一緒に…寝たいなぁ…／／／／／」

零夜「あ、ああ…いいよ…むしろ、いつでも…大丈夫…／／／／／／／／／」

DO、あしゅき、秀吉「「「ゴブゲバァァァァァァァァァァァァ！！！！！」」」

あしゅき「だ、駄目だ…精神力が持たない…俺のもう一つの人格がッ…」

秀吉「……」（返事がない。ただのしかばねのようだ。）

DO「クッ…しかたあるまい…きょ、強制終了だ…」

続かなければ生き残れない！！

第３５話　海へＧｏ！！「楽しみだ…」（前書き）

みんなで海に行く話

派手に行くぜ

第３５話　海へＧｏ！！「楽しみだ…」

あれは…今から2日前の事…

はやての一言から始まった

はやて「海にいくで！！」

零夜「何故こうなったし」

はやて「ふふふふふ～♪」

零夜「何故こうなったし」

極夜『あきらめたほうがいいかと』

零夜「なあ、なんでまた急に海に行くなんて言い出したんだ？」

はやて「なんとなくや！！」

…マジか…

ま、いいんだけど

と言う訳で、俺たちは海…ビーチにいる

パラソルもたてた！

ビニールシートもひいた！

椅子も置いた！

飲み物も準備した！

零夜「じゃ、いくか。」

はやて「私は、ここで待ってるわ。」

シャマル「あ、私もここで待ってまーす。」

ヴィータ「なんだよ、シャマル泳げなかったっけ？」

シャマル「まあ、そんなところね…」

シグナム「では、仕方ない。我々だけで行こう。」

零夜「まあ、まずはすぐ戻ってくるよ。」

零夜「よーし…最速を目指すか…」

そういえば昔（刀夜の時）、海でサメみたいなのに出会って、ぶっ飛ばされたな…

むかついて三枚に下ろして食ってやったけど

…アレはなかなか美味かった

零夜「うおおおおお！！」

ヴィータ「速っ！！なんつー速さだ！」

シグナム「あの速さはどう見ても１００ｍ１０秒前後だぞ！」

そりゃそうだ、鍛えてるからな

水中戦もなんども経験している

水中では地上とはかなり力の使い方が違い、体力を消費しやすい。

しかし、水中で何度も経験すれば、なんとかなる

何事も経験が大事なんだな、経験が

零夜「ふぅ…」

今は泳いだ先の岩の上で休憩中

零夜「さて…もどるかな…」

「（おーい零夜、聞こえるかー！）」

零夜「…あ？火彩？」

火彩「（おー！聞こえたか！いや、超長距離思念通話のやり方を思い出したからやってみたんだ。）」

零夜「…そういや昔そんなのやってたなお前…」

火彩「（で？今は何してんだ？）」

零夜「海のど真ん中にいる。」

火彩「（…すまん、何をどうしたらそんな状況になるんだ？）」

零夜「（家族で海に遊びに来て泳ぎまくったらこうなった。）」

火彩「（…Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ…もう何もつっこまねぇよ…）」

零夜「そういえば、この間…高町なのはと…水川氷雨だったか？あの二人に会ったぞ。」

火彩「ああ、知ってるよ、ビデオレターで言ってたしな。二人ともいいヤツだったろ？」

零夜「……ああ……まあな…」

火彩「（その様子じゃ…大方、フェイトの話を延々と聞かされたんだな…）」

零夜「ああ…軽く2時間近くな…」

火彩「（……お疲れ…）」

零夜「…一つ聞きたい」

火彩「（ん？なんだ？）」

零夜「…いつ頃こっちに来れる？」

火彩「（そうだな…勝利確定の裁判だが…まぁしばらくかかるな…
…ま、うまいこと行って今年中にはそっちに行けるさ。）」

零夜「そのときには連絡してくれ。家族にお前の事を話したら会いたいと言ってたからな。」

火彩「（あいよ。…フェイトか？なに？時間？わかった、すぐ行く。）」

零夜「…時間切れみたいだな。」

火彩「（ああ、残念ながらな。そっちに行く時は、フェイトも連れてくわ。）」

零夜「わかった。暇なときにでも連絡してくれてかまわない。」

火彩「（あぁ、じゃあな。）」

零夜「ああ。またな。」

はやて「あ、零夜君おかえりー」

零夜「ただいま。」

はやて「聞いたで、物凄い速さで泳いでいったらしいやん。」

零夜「ああ…まあ…ね…」

はやて「随分遠くまで行ったみたいやな。だいぶ帰って来るの遅かったし。」

零夜「いや、火彩から連絡が入ってね。ちょっと話してたんだ。アイツ、今年中には戻れるからその時にはには家に来たいってさ。」

はやて「それは、楽しみやなぁ。」

零夜「どうやら、友達も連れてくるらしいぞ。」

はやて「ますます楽しみや！」

零夜「もう昼か…」

はやて「じゃ、お弁当食べよか！私と零夜君の最高の弁当やで♪」

零夜「は、はやて…大げさだ…」

シャマル「ちなみに私も手伝いました！」

シグナム「なん…だと…」

ヴィータ「…大丈夫なのか？」

零夜「大丈夫だ、問題ない。」

はやて「具材を切ってもらったりしただけやから、大丈夫や。」

シグナム「まぁ…主はやてがおっしゃるなら…」

ヴィータ「アニキも言ってることだしな…」

零夜「つーかそれだけで何か起きたら逆に凄いぞ…」

ヴィータ「…いや、シャマルは何が起こるかわかんねぇからな…」

「「「「確かに」」」」

シャマル「え～～～!?ひーどーいー!!」

はやて「じょ、冗談やって!なぁ!」

零夜「あ、ああ…。」

ヴィータ「お、おう…。」

シグナム「は、はい…。」

ザフィーラ「……。」

なんか言え…ザフィーラ…

零夜「と、とにかく気を取り直して…いただきます！」

「「「「「いただきます。」」」」」

ちなみに弁当箱はでかい重箱で3段になっている

中身は一段目がおにぎり、二段目がおかずで、玉子焼きとか野菜とか、そう言うのが入ってる。

で、三段目は、唐揚げとか、ウインナーやらが入っている。

さらに別に、クーラーボックスの中に俺特製アイスが入ってる。

ヴィータが物凄い楽しみにしていたな

ヴィータ、アイス大好きだからな。

零夜「はやて、あーん…／／／／／／／／／／」

はやて「あーん…あむっ…／／／／／／／／／／」

零夜「美味いか？」

はやて「うん！」

零夜「んじゃあ、食べたからまた泳いでくるよ。…そうだ、はやても一緒に泳ぎに行こう、俺がおぶって行くから。」

はやて「いや、私はいいって…無理はせんといて…」

零夜「大丈夫、余裕だから。」

はやて「うーん…じゃあ…お言葉に甘えて…お願い…」

零夜「よし、よっと！！」

はやて「きゃあッ！？／／／／／／／／／／」

俺の右腕をはやての肩に、左腕を脚に滑り込ませ、抱き上げる

まぁわかりやすく言うなら　お姫様抱っこ　だ

うん、コレされてるはやても恥ずかしいだろうけど

してる俺も相当恥ずかしい

じゃあなんでやったんだって言われそうだが気にしない

零夜「はやて、しっかりつかまってろよ…」

はやて「う、うん…」

静かに海に入っていく

始めは浅い所にいたが、しばらくして深いところに泳いでいった

零夜「はやて、大丈夫か？水が口とかに入るようなら肩を叩くなりしてくれ。」

はやて「うん…大丈夫…」

零夜「よし、もう少し行くぞ…」

はやて「零夜君…そろそろ…戻りたいんやけど…」

しばらく泳ぎ回って、あちこちを見て回った後、はやてが俺の耳元で呟いた

零夜「ん、了解。急ぐよ。」

最高速度、とは行かないがかなりの速さでビーチまで戻っていく。
俺に掴まるはやての腕の力が少し強くなる。

零夜「はやて、もう直ぐ、着くぞ。」

はやて「…うん…」

気のせいか、声が少し残念そうな感じがした。

零夜「ふぅ…よっと！！」

はやて「きゃッ！？」

再びお姫様抱っこをして、戻っていく。

はやて「うぅ…やっぱり恥ずかしい…／／／／／／／／／／／」

零夜「が、我慢してくれ…コレが一番早いんだからさ…／／／／／／／／／」

はやて「う、うん…／／／／／／／／／／」

零夜「……／／／／／」

はやて「……／／／／／」

「「た、ただいま…／／／／／／／／／／」」

ヴィータ「…マジではやて背負って泳ぎ回ったのかよ…」

零夜「ああ…／／／／／／／／／／」

はやてをシートの上に降ろしながら、答える。

シグナム「しかし…その小さな体のどこにそんな体力があるんだ…」

零夜「鍛えてるからな…」

シグナム「…鍛えてるとかそんな話ではすまない気がするのだが…」

零夜「……戦士（ソルジャー）だからな…経験だよ経験。水中戦とか、何度も経験していたらだいたい何とかなる……多分…」

シャマル「まぁ、とにかくお疲れ様。はい、スポーツドリンク。」

零夜「お、ありがとう。のどが乾いてたんだ…」

５００ｍｌペットボトルの中身を一気飲みする。

零夜「フゥ…俺はちょっと休憩する…疲れた…」

ヴィータ「疲れない方がおかしいと思うぞ…」

零夜「そりゃそうだ…」

ヴィータ「んじゃあ、あたしらはまた泳いだり、うろうろして来るから。」

シャマル「私もついていくわ。」

シグナム「では、行くか。」

マズイ、非常にマズイ…気を使って二人きりにしてくれたのはいいが…何をどうして良いかわからん…

零夜「…はやて…その……ア、アイス…食べるか…？あ、暑いから…／／／／／／／／／／（何言ってんだ俺ェェェェェェェェェ

エエエエエ！？！？さっき食ったばっかだろォォォォォォォォォォォォォ！！）」

はやて「あ、いや…遠慮しとくわ…／／／／／／／／／／」

零夜（ほら見ろォォォォォォォォォォォォォォ！
やっぱりこうなったアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！どどどどどどどうすりゃあ良いんだ！？どうする！？どうする！？どーすんの俺ェエエエエエエ！！！）

と、テンパってる俺の右手をはやてが握ってきた。

はやて「……／／／／／／／／／／」

はやては何も言わず、力を強くして手を握ってくる。
そして俺も握り返す。
お互いに何も言わないが、そのまま指を絡めて手を握る。
多分俺の顔は真っ赤だろう…

無論、はやての顔も真っ赤だろうけど…

はやて「ッ…零夜君…」

俺ははやてのそばにさらに近づいた。

ギリギリ体が当たらないくらいの近さだ。

二人でそのまま、ぼうっとしていると、はやてが俺の肩に頭を乗せて、寄り添ってきた

俺は、背中側にあるクーラーボックスに体を預けると、急に眠気がしてきて、そのまま意識を手放してしまった…

零夜「…ん…」

どれくらい眠っていたのだろうか…

辺りはすっかり夕焼け空になっており、人々は片付けて、帰る準備をしている。

シグナム「あぁ、すまない、起こしてしまったか…」

零夜「いや、大丈夫だ…」

よく見ると、ほとんど片付けを4人でやってくれていたようだ…

零夜「はやて…」

はやての肩を揺すってまだ眠っているはやてを起こす

はやて「ん…んん…」

零夜「はやて…起きろ…」

はやて「ん……あれ…？私…眠ってもうた…？」

零夜「ああ…俺もな…」

ヴィータ「二人とも、早く着替えないと帰るのが遅くなるぞ。」

はやて「ほんまやな…じゃあ、着替えよか…」

さすがにここは…割愛だよな…

はやて「それじゃあ、帰ろか！」

零夜「ああ……そういや晩御飯どうするよ…」

はやて「……忘れてた…」

「「「「「え～～～～！？！？！？」」」」」

はやて「…どうしよ…」

零夜「俺が買い物行ってくる…それでなんか簡単に何か作って食べて今日は早く寝よう…疲れたし…」

はやて「じゃあ、そうしよか…」

来年も…みんなでこうやって過ごせたらいいな…

続く…

第３５話　海へＧｏ！！「楽しみだ…」（後書き）

ＤＯ「昨日、自転車がぶっ壊れた作者、デスサイズ・０です。」

零夜「最近はやてに依存してき始めたような気がする主人公、零夜だ。」

はやて「零夜君をさらに落とすにはどうするか毎日考えてるヒロイン、八神はやてや。」

秀吉「ゲストを超えてもはや後書きレギュラー化、木下秀吉だ。」

ＤＯ「いきなりだが、この後書きに名前をつける。」

零夜「超唐突だなオイ」

ＤＯ「うるせぇ、タイトルは、”夜天の影ラジオ”略して”夜影ラジ”だ」

秀吉「略す必要あったのか？」

ＤＯ「気分の問題だ気分の。」

はやて「けどこの名前、ついさっき友達にメールで…」

ＤＯ「何も言うなーーーーーーーーーーーッ！！」

続くのか！？

第３６話　１日１日を大切に（前書き）

大切にね

派手に行くぜ

第３６話　１日１日を大切に

夏も終わり、もう秋になったある日

俺は朝、いつもより少し早く起きた。

いや、目が覚めたと言った方がいいかな？

まぁそんなことはどうだっていい。

そんな事より、目の前の問題を解決する方が大切だ。

俺は昨日、いつもより少し早く就寝した…

無論、1人でだ。

だが何故

はやてが俺の隣で、しかも抱きつきながら寝てるんだ!?

しかもご丁寧に俺の体の向きを横にむけて向かい合わせの状態で!!

何があってこうなった!?

零夜「……どうする…俺…」

…とにかく起こさないように起きるか…

と、思った瞬間

ギュ…

あ、あるぇ？　な、ななななななななにゆえにさらに俺を強く抱き締めるのでせうか？／／／／／／／／

………まさか…

零夜「はやて…起きてるだろ…」

はやて「！！………」

零夜「……起きてるな…？」

はやて「…ばれた？」

零夜「当たり前だ…俺が起きようとした瞬間に抱き締める力が強くなったからな……そんな事より…何で俺の部屋で寝てるんだ？」

はやて「だって…ずっと一緒に居たかったんやもん…／／／／／／／／／／」

零夜「ったく…」俺は改めて起きようとする

はやて「ん～～…もうちょっと一緒に寝てようやぁ……／／／／／／／／／／」

零夜「いや、朝ご飯作らねば…」

はやて「心配あらへん、昨夜作って後は温めるだけやから…それに、みんなには協力してもらってるし…」

全員共犯！？

零夜「何故こうなったし」

はやて「だから…今日は二人でゆっくり寝よ…」

零夜「…何故こうなったし」

零夜「そろそろ起きないとマズくないか？」

はやて「今何時？」

零夜「１０時３０分」

はやて「ふぇぇ！？寝過ぎた！」

零夜「だったら早く起きよう…よっと…」

俺ははやてを抱きかかえて車椅子に乗せてやる

零夜「じゃ、朝ご飯食べて、昼御飯の準備をちょっと始めようか。」

はやて「おはよう！」

シグナム「おはようございます、主はやて。」

シャマル「おはようございます、はやてちゃん。」

ヴィータ「おはよー！はやて！」

ザフィーラ「おはようございます。」

零夜「あ、俺には何もないのね…ははは…」

零夜「はぁ…疲れた…」

俺は朝ご飯を食べた後、今日まさかの買い物行くのを忘れていたと言う事態が発生し、全力疾走で買い物に逝って来たのだ…

はやて「零夜君、字が違うで…」

はやて、地の文に突っ込みを入れるのはやめてくれ…それとあれはそれだけ疲れたと言うことだから…

はやて「ふ～ん…とにかく、お疲れ様！」

零夜「ああ…」

はやて「じゃあ零夜君は休んでて、今日は私が作るから。」

零夜「ああ…そうさせてもらうよ…」

はやて「よっしゃ、できた！ヴィータ！食器用意してくれる～？」

ヴィータ「はーい！」

零夜「ふぅ…」

俺はソファに座ってくつろいでいた

さすがに１０分間全力疾走は疲れる

まぁ昔の俺（影宮刀夜）なら余裕だったが

零夜「…もう…10月か…」

残暑も無くなり、そろそろ少しずつ肌寒くなり始める時期だ。

零夜「…平和だな…」

つくづく思う。

かつて(刀夜の時は)は戦うしかなかった

戦うことしかできなかった

それしか知らなかったから…

一度死んで、”零夜”としと生きて、記憶が戻って、何故が刀夜が俺の中に居て、俺と刀夜が別人なのか同一人物なのか解らないけど

刀夜の記憶は受け継いでいる

そのせいなのか

平和に過ごしているとなんだか僅かに違和感を感じるときがある

平和なのは嬉しいが、もっと戦いたい

そんな感情が、俺の中にある

結局…

俺は戦うことしかできない…

けど…

ここに…はやて達と一緒に居る間くらいは…

そんな事を忘れていたい…

だから…

もっと…

ヴィータと…

シャマルと…

ザフィーラと…

シグナムと…

はやてと…

ずっと…ずっと…一緒に…

平和に…暮らしていく…

その平和を守るために…

俺は戦う…！！

はやて「零夜君？」

零夜「ん…あぁ…」

はやて「もぅ…さっきからずっと呼んでるのに…」

零夜「ごめんごめん…ちょっと考え事をね…」

はやて「昼御飯、できたで。」

零夜「わかった、今行くよ。」

…やっぱ…平和が一番だな…

けど…

この平和が崩れるなんて…

このときの俺には予想も出来なかった…

続く……

第３６話　１日１日を大切に（後書き）

…今回、夜天の影ラジオ…まぁりゃくして夜影ラジオは無し…

次回から、Ａ'ｓ編突入

それでちょっと注意と予告?みたいなのをします。

まず、今まではほぼ全て零夜視点で進んできましたが、次回からはそうは行きません

基本は第三者視点か零夜視点で進めます

どうしてもと言う場合、そのキャラの視点に変わります

だから突然変わってややこしくなるかもしれません。

ではA'ｓ編の予告的なやつを…
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ!っぽくやってみました…

「あの男…ただ者じゃない…」

「話を…聞いてってばー!!」

「悪いな、これもアイツの為なんだ…」

「てめぇ…何者だ…」

「…友達だ…！」

「…ただの戦士（ソルジャー）さ…」

「俺が…お前を止める！」

「僕も忘れないでよね…！」

「……来い…」

「…その仮面の下はどんな面してんだろうなァ…オイ…」

「もう…止まれん…止まれんのだ…！！」

「邪魔を…するな…！！」

「悪魔で…いいよ…」

「…何で…何でこうなったんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

「…見せてみな…お前の本気をよぉ…！」

「消え去れ！！」

「お前じゃ俺には勝てねぇよ」

「目を覚ませ！」

「もう…遅すぎたのだ…何もかも…」

「違う！夢は…！他人から与えられる物でもなく、他人にかなえてもらうものじゃない！！自分で掴み取る物だ！」

「名前をあげる――――――――」

「やっぱ、最後は主役に譲んねぇとな！」

「お膳立てはしたよ！」

「うおおおお！！このッ！一撃でッ！！」

「これでいい…」

「…さて…そろそろ行くか？」

「「ああ！」」

「「「さぁ！派手に行くぜ！！」」」

と…まあこんな感じでしょうかね…

まぁ…今書いたセリフを必ず使うとは限らないんですがね…

ではでは…次回、

A'ｓ編第１話　突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？

…派手に行くぜ！！

A' s第1話　突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？（前書き）

ついにA' s突入！

Let' s rock！！（派手に行くぜ！！）

A' s第1話　突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？

12月2日

俺は相変わらずぼんやりと毎日を過ごしていた

大して変わった事もなく…

そういえば、最近みんながよく出歩いている

まぁ夕方か、夕食前には帰ってくるから良いんだけど。

俺や守護騎士たちが八神家に来てもう半年だ

きっとみんなもこの町でやりたいことが見つかったのだろう

俺もはやてもそう考え、特に何も言わないでいた

まぁ、別段問題があるわけではないしな

と、言いたいところだが…

残念ながら俺には全員何かを隠してるようにしか思えない

まぁ…しばらくは待つか…

零夜「じゃあはやて、また後で

はやて「うん、じゃあ」

今は図書館に居る。

さぁーて…今日は何を読むかな…

あ？

目に止まったタイトルは…

俺が秀吉で化物級

……またお前か…

零夜「とかいいつつ…借りてしまうんだよな…俺は…」

さて…早くはやてのとこに行かなきゃな…

零夜「あ？」

はやてがいない？

零夜「…どこ行った…？」

……ま、歩き回りゃすぐ見つかんだろ…

零夜「お、いたいた…」

はやてが誰か知らない子と話している…

珍しいな……

…これは行った方が良いのだろうか…？

それとも成り行きを見守った方が良いのだろうか…？

どうする？どうする！？どーすんの俺ーーー！？

…とかいってもポケットには何も入ってはないのだが。

何？意味が解らない？

なら気にしないでください。

零夜「…先に出口で待っとくか…」

零夜「あ、シャマル。」

シャマル「零夜君、…あれ？はやてちゃんは？」

零夜「友達と仲良く喋ってるよ。もう来るんじゃないかな……俺は先に出ておくよ。」

シャマル「わかったわ。あ、それと多分外にシグナムが居ると思うから…」

零夜「ん、わかった。」

さぁーて…今日の晩御飯は何が良いかな…

零夜「お、シグナム」

シグナム「零夜？…主はやてとシャマルは？」

駐車場でシグナムは待っていた
…なんで駐車場なんだ…？

零夜「はやては友達と楽しくお喋りだ。ま、もう少しで二人とも来るさ。」

シグナム「そうか…」

シャマル「はやてちゃん、寒くないですか？」

はやて「うん、平気。シャマルも寒ない？」

シャマル「私は、全然。」

零夜「っと…噂をすればきたな…と…」

はやて「シグナム！」

シグナム「はい…」

はやて「晩御飯、シグナムとシャマルと零夜君は何食べたい？」

シグナム「ああ、そうですね、悩みます…」

零夜「そうだな…何がいいかな…」

シャマル「スーパーで材料を見ながら、考えましょうか。」

はやて「そやね。」

零夜「そう言えば、ヴィータは今日もどこかに出かけたのか？」

シャマル「あ…えっと…そうみたい…」

はやて「最近、よぉ出かけてるなぁ…」

シグナム「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラが着いていますので、あまり心配はいらないですよ。」

はやて「そっか…」

シャマル「でも…少し距離が離れても、私達はずっとあなたのそばにいますよ…」

シグナム「はい、我らはいつでも、あなたのそばに…」

零夜「…俺も…な…」

はやて「…ありがとう…」

最近、みんなが時々意味深な事を言う時がある…

…それに…騎士としての風格？オーラ？

まぁそんな感じのものが戻ったと言うか…

何と言うか、鋭くなった感じがする。

俺やはやてに対する態度なんかは変わってはいない

むしろ、はやてに対しては優しくなった気がする。

…それに…以前からだが…監視されている…

さらに…最近監視がより厳しくなった気がする…

家のすぐ近くに魔力反応がある…

そして…監視が厳しくなった時期と、みんながよく出掛けるようになった時期が一致している…

やはり…なにかあったな…

ま、今日の夜中にでも問いただすか…

続く…

A' s第1話　突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？（後書き）

ＤＯ「イヤッハー！夜影ラジオ！始まるぜ！ＦＦ１３をＦＦ１３－２発売までにクリアしたい作者、デスサイズ・０です！」

零夜「有り得ないなんてことは有り得ない。主人公の影宮零夜だ。」

はやて「いかに零夜君の布団に忍び込むか悩んでるヒロイン、八神はやてです。」

秀吉「この場所にくるまで命懸け。俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

零夜「ってかはやて…そんなこと考えてたのか…」

はやて「え！？いや、作者に言ってくれって頼まれて…」

ＤＯ「ちげぇよ！秀吉だよ。」

秀吉「…違う！あしゅきだ！」

零夜「なるほど…ちょっと行ってくる…」

はやて「…計画通りや…！」

秀吉「…新世界の神みたいなこと言ってんぞ…」

Ｄ０「…狸の片鱗をみせ始めたか…」

秀吉「狸…？意味わかんねぇ…」

Ｄ０「…まだ君が理解する必要は無い…まぁ、いずれ…君にもわかるさ…」

秀吉「零夜も大変だな…」

Ｄ０「ちびたぬはやて…ぶごはぁぁぁぁ！！」

ドサッ！

秀吉「血吐いて倒れた！？」

続かなければ生き残れない！！

A-s第2話　大切な約束は絶対に破るな。例えどんな理由があっても…だ…

大切な人との約束は何があっても守ろう

Let-s rock!!（派手に行くぜ!!）

A-s第2話　大切な約束は絶対に破るな。例えどんな理由があっても…だ…

零夜「…1時…か…」

無論、深夜1時だ。

俺はこっそり出かけたヴォルケンリッター全員が帰ってくるのを待っている…

…彼女達は…確実に最近戦闘行為をしている…

理由は3つ

血と埃の混じった独特の匂いが僅かだがする。

つまりただの喧嘩などの戦闘行為ではない

命懸けの戦いだ

ま、血の匂いなど普通は解らないのだが…俺は解る…

もう一つの理由は妙に焦っていること

最後は、時々意味深なセリフ聞く

自分たちは、はやてと一緒だ、とか、どんなに離れても一つだ…とか…

まるで、はやてを安心させるように…

一度だけ何をしてるか遠回しに聞いて、あの時は上手くごまかされた振りをしたが…

やはり今回はそうは行かない…

今なにが起きてるか…しっかり話してもらう…！

シグナム「よし、バレないように、静かに行けよ…」

ヴィータ「おう…」

零夜「こんな時間まで何やってんだ…？」

ヴィータ「アニキ！？」

零夜「ま、何やってんだかはだいたい解るんだがな。とりあえず、リビングに来い。はやてを起こさないようにな。」

零夜「ま、とりあえず俺の予想はここ最近、みんな戦闘行為をしている、理由は帰ってきた時に血と埃の混じった独特の匂いがする。そしてそれははやてにと闇の書に関係している。最後に何か期限があり、それは近いと言うこと。どうだ？」

シグナム「全く持ってその通りだ…」

零夜「…話を…聞かせてくれ…」

シグナム「…わかった…」

零夜「…」

俺は全てを聞いた。
はやての足の麻痺は病ではなく、闇の書の呪いであること、さらにその麻痺が上に進行しつつあり全身に回れば死に至る、もしくは植物状態になりかねないということ。

麻痺を治す、少なくとも進行を止めるためには闇の書を完成させ、はやてを真の主にしなければならないこと。
完成させるためにはリンカーコアから魔力を蒐集しなければならず、魔導師を襲撃し、ついに管理局に見つかってしまったこと。

零夜「…なるほどな…」

シグナム「すまない…お前には、主はやてと一緒に居てもらいたかった…」

零夜「…なるほど…つまりお前達ははやてとの約束を破った訳か…」

シグナム「それは…」

零夜「大切な約束を破るのは最低だ。…例え…理由があったとしても…」

ヴィータ「けど！…そうしなきゃ…はやてが死んじゃうんだよ！アニキだって、はやてには生きていてもらいたいだろ！？」

零夜「…ああ…当たり前だ…！それに…何故はやてにそのことを伝えない？はやて自身の命に関わることだぞ。」

シャマル「そ、それははやてちゃんが駄目だって言うだろうし…」

零夜「…本当にそう思うか？俺達は家族だぞ…本当にはやての事を信用しているのか…？」

ヴィータ「違う！違う！あたし達は家族だ！はやてやアニキの事だって、本当の家族と思ってる！！」

零夜「なら何故…道を一つに絞った…？何故…約束を破った…！はやてに言えないなら俺に言うなり、何かあったはずだろう…！」

俺は怒っていた

はやてが信頼されてないんじゃないかと思ったからだ

俺が信頼されてなくても、はやては信頼してほしかった。

シグナム「…それでも…主はやてと…零夜と…共に暮らせる平和な未来を創りたいのだ…！！」

零夜「…！」

…思い出した

そう言えば、昔同じような事を言ったヤツが居たはずだ…

あれは…誰だ…？

思い出せない…

まあそんな事はどうだって良い。

零夜「…わかった…はやてには黙っておく…。」

シグナム「…すまない…」

零夜「…何人殺った…？」

シグナム「1人も殺してはいない…」

ヴィータ「はやての未来を、血で汚したくないからな…」

零夜「…そうか…」

甘いな…だが…これで良いのかもしれん…

零夜「シャマル、闇の書の蒐集はリンカーコアから魔力を蒐集するんだったな？」

シャマル「ええ…そうだけど…」

零夜「だったら…人間以外の生物からも蒐集は可能か？」
シャマル「ええ…でも…思ったより効率は良くないわ…」

零夜「…なら…できる限り魔導生物から魔力を蒐集するんだ…魔導師から蒐集するときは向こうから来た場合のみに限る。それならある意味、正当防衛にする事も不可能ではないかもしれん…」

シグナム「だが…生物から蒐集する場合は手強い割には魔力があまり蒐集出来ない事の方が多い…」

零夜「わかってる…だから…俺が出る…まぁ、俺が出れば少しはマシにはなるだろう…それに、生物のほうが、魔導師を相手にするよりはマシだ。」

シャマル「でも…それじゃはやてちゃんが…」

零夜「…ああ…だから、俺はあまり出られないだろう…深夜か、はやてがいない時か、お前達が危険な状態になった時連絡してくれた時くらいだろう…」

シグナム「なら…その時は頼む…」

零夜「…了解した……そう言えば、管理局に見つかった時、

顔は見られたのか…？」

シャマル「ええ…変身魔法でも使っておけば良かったわ…」

零夜「今更使っても遅い…俺だけでも変装して、影で魔力反応を消して、探知不能にしておくか……それと、もし捕まったら、俺が闇の書の主だと言え…俺ならばそれなりの相手でも逃げることくらいは出来る…」

シグナム「…わかった…」

零夜「それと…気付いてるか解らんが…俺達は何者かに監視されている…」

シグナム「何…！？」

零夜「…おそらく…今は大丈夫だが…朝７時前後から…夜１１時前後まで監視されている…何者かは解らんが…おそらく目的は闇の書…もしくは主であるはやてだろう…」

シャマル「なら…家の周りにセンサーや通信妨害とかをしておいた方がいいかしら…」

零夜「ああ、特に、はやての部屋と、闇の書がおいてある場所を重点的に…な……もう3時か…もう寝よう…続きは明日だ…」

続く…

A-s第2話　大切な約束は絶対に破るな。例えどんな理由があっても…だ…

夜影ラジオ、派手に始まるぜ！

ＤＯ「どうも、世界歪みを具現化した存在、作者のデスサイズ・Ｏです。」

零夜「覚悟は決まった、もう迷わない。主人公の影宮零夜だ。」

はやて「計画通りに物事が進んで楽しいヒロイン、八神はやてや。」

秀吉「自分がゲストである事を忘れて来た、俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

ＤＯ「…あしゅきさんは…？」

零夜「…さあな…」

ＤＯ「秀吉…どうなったんだ…？」

秀吉「…俺の口からは言えねぇ…あいつはよくやった…だが…零夜には…な…」

ＤＯ「…何があったし…」

はやて「ふふふふふ…計画通りや…！」

秀吉「…なんか…はやてちゃんがどんどん黒くなっていくような…」

零夜「…はやて…可愛いな…／／／／／／／／／／／／」

Ｄ０、秀吉「「ダメだコイツ…はやく何とかしないと…！」」

零夜「はやて…今日はもう一緒に…」

はやて「うん…一緒…」

「「ブゴハァァァァァ！（吐糖）」」

続かなければ生き残れない！！

A's第3話　再会、そして引っ越し！？「Ｈａ…なかなか面白そうじゃねぇか」

今回は火彩の視点

そして大切な話が有りますのであとがきを見てください

では

Ｌｅｔ's　ｒｏｃｋ！！

A's第3話　再会、そして引っ越し!?「Ha…なかなか面白そうじゃねぇか」

12月2日　PM8：00

火彩「クソッ…俺が…俺がもっとはやくたどり着けていれば…」

なのはも…フェイトも…氷雨も…怪我をせずに済んだかもしれなかったのに…！

火彩「…俺の…俺のミスだ…！！」

氷雨「火彩…」

火彩「…！氷雨か…久しぶりだな…なのはとフェイトは？」

氷雨「大丈夫みたいだね。なのはもリンカーコアの再生がもう始まってるし、フェイトの怪我も軽いものだから…今は二人で話してる。」

火彩「…氷雨…お前は大丈夫なのか？」

氷雨「うん、僕は大丈夫、かすり傷だから。」

火彩「そうか…もっと俺がはやくたどり着けていれば…」

氷雨「来てくれただけでも十分だよ…」

火彩「そうか…そう言ってくれると有り難い…」

クロノ「火彩、面接の時間だ。」

火彩「ん、わかった。」

氷雨「面接？」

火彩「ちょっとな。」

クロノ「ちょうどいい、氷雨、君も来てくれ…」

氷雨「…僕も…？」

ったく…管理局なんざ信用したくねぇし上層部は腐ってやがるし…めんどくせぇな……仕方ねぇ…フェイトの護衛くらいの気持ちで行くとすっか…

クロノ「失礼します」

…あああああ…めんどくせぇぇぇ…よし…俺の話以外は右から左へ聞き流すとしよう…

「クロノ、久しぶりだな」

ソファに腰掛けた柔和な笑み浮かべる温和そうな老人がいた…やっぱり上層部の人間か…めんどくせぇぇぇ…

とか言いつつ…俺達はソファに腰掛け、対談を始める

たしかこのじいさん…名前は…ギル・グレアムだったか…？

時空管理局顧問官…だったはず…

「保護観察官といっても、まあ形だけだよリンディ提督から、先の事件や君の人柄は聞かされたしね…とても、優しい子だと…」

フェイト「有り難うございます……」

…フェイトが顔を少し紅くして頭を下げた。

そして、俺の方を見てきた。

グレアム「そして…火彩君は自分の記憶が無いにも関わらず彼女を護るために何度も戦った…どんなときも彼女を信じ、彼女の事を案じ…彼女を守るため戦ったそうだね…」

火彩「…はい」

…普通の人間ならここで大喜びするんだろうな…

で…この後は氷雨、なのは、フェイトは話を真剣に聞き、質問に答えていた。

ま、俺は適当に答えていた。

…気のせいか…クロノが額に常に青筋が浮かべてたな…

ま、どうでも良いことだ…

で、対談が終わり、退出するときクロノは俺を睨みつつ、去り際にある報告をしていた

クロノ「既に聞き及びかもしれませんが、つい先ほど、自分たちがロストロギア”闇の書”の捜索担当に決定しました…」

グレアム「そうか…君がか…言えた義理ではないが…無理はするなよ…」

クロノ「大丈夫です。”窮地の時こそ冷静さが最大の友”…提督の教え通りです…」

グレアム「…そうだったな…」

クロノは冷静に伝え、そのまま俺達は退室した

クロノ「火彩…何をやってるんだ…あの態度は…確かに君は管理局が嫌いと言っていたが…あの態度は無いだろう…！」

フェイト「ま、まあクロノ、落ち着いて…火彩も悪気があった訳じゃないと思うから…」

クロノ「いーや、あの態度は悪気があった！どうなんだ！火「…何かあるな…」…は？」

火彩「あのじいさん…何か隠してやがる…それもかなり厄介な何かを…」

なのは「でも、優しい方だったと思うけど…？」

氷雨「火彩…やっぱり君もそう思うかい？」

火彩「ああ…普通の人間は特殊な訓練を受けるなどしなければ、何か隠し事があると、必ず何かその兆候が見られる。そしてその隠し事に近い人間がそばにいればなおさら分かり易くなる。」

…ま…大したことでなければいいんだが…

火彩「…フェイト、バルディッシュはどうだ？」

フェイト「うん…かなりひどいみたいで…部品交換が必要みたい…」

火彩「そうか…レイジングハートもかなりやられたみたいだな…」

…状況はよくない…エース二人を欠いた状態ではかなりキツい…

ヤツらに正面から対抗できて動けるのは三人…いや…クロノは…微妙だから外すか…

つまり実質俺と氷雨か…

地球周辺が事件の中心…

零夜に頼んで協力してもらうか…？

いや、ダメだ…あいつの家族には魔力を持つヤツが居たと言ってた…

間違いなく零夜は家族を守るから協力は見込めない…

…二人か…

刀夜…お前ならどうする…？

敵は４人…それも全員がかなりの使い手…

対するこちらは４人…いや、現段階では２人…

刀夜…何か良い策はないか…？

お前ならどんな時でも、策を張り巡らして俺達を助けてくれるだろ…？

俺はもう居ない親友に語り掛けた

火彩「はぁ…だめだ…訳わかんねぇ…」

作戦とかを考えるのは昔は零夜か団長に任せてたからな…

白夜『お前に考えるなんざ似合わねェよ…』

火彩「全くだ…」

氷雨「火彩」

火彩「氷雨か…」

氷雨「今回の事件資料借りてきたんだけど見てみるか？」

火彩「いや、いい。」

氷雨「なんで？」

火彩「読んでもさっぱりわからん。とりあえず敵は自分で戦って戦い方を確立させりゃ問題ないし、今まで何人が犠牲になったかなんざ全く興味はねぇ、場所が解ってりゃ十分だ。感覚で覚えれる。」

氷雨「本当に火彩ってバカなのか天才なのかわかんないよね…」

火彩「…よく言われる…」

で、そのあとまさかの事態が発生した

なんとアースラがぶっ壊れて（戦闘訓練中に俺がぶっ壊したのだが）修理中だから地球のなのはの家のすぐ近くに臨時作戦本部を建てるというのだ。

…色々めんどくさそうだが…ま、フェイトが居るからいいか…

ちなみに今のセリフを本人達の前で言ったらアルフに「アンタどんだけフェイトのこと好きなんだよ…」と言われてしまった。

そのときフェイトは顔を真っ赤にしてうつむいて何か言ってたが聞こえなかったから気にしないでおいた

…で

地球…海鳴市……だったっけ…？あってるよな？

氷雨「誰に言ってるんだよ…？」

火彩「……虚無（読者の方）の存在にさ…」

氷雨「なるほど…」

火彩「さて…俺はちょっと散歩に行ってくる、なのはとフェイト達に言っといてくれ。よっと！！」

俺はベランダから飛び降りた

上から叫び声が聞こえるが気にしない

気にするつもりはこれっぽっちもないね

俺は自由にやらせてもらう

さーて…どうすっかな…

零夜の所にでも行ってみるかな…

火彩「よし…（零夜、聞こえるかー？）」

……

反応が無いな…何か用事か？出掛けてんのか？

また今度にするか…

…余計に暇になっちまったな…

ま、ブラブラすっか…

火彩「臨海公園か…ちょいと行ってみるか…」

ベンチがあるので腰をかけた

で、ふと横を見てみると…

火彩「…あ？」

零夜「…あ？」

…何やってんだ…？零夜…

火彩「こんな所で何やってんだよ零夜…」

零夜「火彩こそ…いつこっちに戻ってきたんだ…」

火彩「今日、ついさっきさ…最近どうよ…」

零夜「はっきりいってあんまり良くないな…」

火彩「何かあったのか…？」

零夜「大したことじゃない…お前の手を借りるまでもないさ…俺が守りきるからな…」

火彩「…そいつぁ…最近この世界の周辺で発生してる魔導師襲撃事件からか…？確かお前の家族には魔力持ちが居るって言ってたからな…」

零夜「ああ…だが…デバイス…ましてや魔法の使い方すら解らない…だから俺が何とかする…！」

火彩「…俺やフェイト、なのはや氷雨もはやく事件を解決するように何とかする…」

零夜「火彩…俺達のことは管理局には言わないでくれないか…？魔力を持ってるとかで何かとうるさいから…家には影で魔力反応が無いようにしているのだが…」

火彩「解ってるよ…静かに暮らしていきたいんだろ?大丈夫だ、管理局には俺に記憶は無いと説明してある。だから大丈夫さ。記憶があることと事情を知ってるのはフェイトとアルフとお前とくらいだからな…」

零夜「そうか…すまないな…」

火彩「何、大した事じゃねぇよ、親友の頼みだからな。」

零夜「さて…俺はそろそろ行く…」

火彩「そうか、どっか行くのか?」

零夜「なに、ちょっと図書館にお姫様(はやて)を迎えに行くんでな。」

火彩「Ｈａ…そうかい、気を付けてな。」

零夜「ああ、お前もな…事件が解決してからでもウチに来てくれ…」

火彩「そうさせてもらうぜ…」

零夜「またな…」

火彩「ああ…」

続く！

A's第3話　再会、そして引っ越し!?「Ha…なかなか面白そうじゃねぇか」

夜影ラジオ、派手に始まるぜ！

DO「50000アクセス突破ァァァァァァ！狂喜乱舞中の作者、デスサイズ・0です。」

火彩「まさかの俺が呼ばれるという事態。闇咲火彩だ。」

フェイト「えっと…火彩と一緒に呼ばれて来た、フェイト・テスタロッサです…」

秀吉「相も変わらずここに存在する。木下秀吉だ。」

火彩「…作者、零夜はどうした。」

DO「…今回は火彩視点だったから零夜は来ない。と言うか、ここはその話の視点のキャラともう1人しか呼ばねーよ。しかも俺は零夜か火彩か氷雨か三人称視点しか書かない。つまり呼ぶのは零夜×はやて、火彩×フェイト、氷雨×なのは。この組み合わせ以外有り得ない。」

フェイト「それって主人公とヒロインの組み合わせなだけなんじゃ…」

DO「そこは突っ込まないでくれ…」

秀吉「三人称の時は誰を呼ぶんだよ。」

Ｄ０「俺と秀吉だけ。」

秀吉「ヲイ」

Ｄ０「さて…この小説がついに５００００アクセス突破したわけですが…何か記念の話を書きたいのです。つー訳で、アンケートを取ります。どんな話を書いてほしいか、感想、メッセージ、どんな方法でも構いませんので答えて頂ける方はよろしくお願いします。期限はとりあえず日曜日の朝１０時までにします。１人一回でお願いします。あと、少なかった場合、多分書く話は独断と偏見だけで決めるかもしれませんがご了承ください。では！」

続かなければ生き残れない！

A's第4話　蒐集（前書き）

今回はちょっと戦闘

Let's rock!!

A'ｓ第４話　蒐集

深夜１時

海鳴市内、某ビル屋上。

零夜「悪い、遅くなった。」

シグナム「いや、問題はない。」

シャマル「管理局の動きも本格化してくるだろうから今までのようには行かないわね…」

シグナム「少し遠出をする事になるな…なるべく離れた世界での蒐集を…」

零夜「…今何ページだ？」

俺が聞くとシャマルはページをめくって確かめる

シャマル「今、３４０ページ…こないだの白い服の子でかなり稼いだわ」

ヴィータ「よし、半分は超えたんだな…！ズバッと集めてさっさと完成させよう！はやく完成させて、ずっと静かに暮らすんだ…はやてと…アニキと…いっしょに…」

シグナム「……」

シャマル「……」

ザフィーラ「……」

ヴィータの発言に、全員が沈黙するが全員の心は同じだ

俺だってみんなと一緒に静かに暮らしていきたい。

ザフィーラ「行くか…もう余り時間も無い…」

シグナム「ああ…行くぞ！レヴァンティン！」

レヴァ『Ｓｉｅｇ』

シャマル「導いて、クラールヴィント！」

クラ『Ａｎｆａｎｇ』

ヴィータ「やるよ！グラーフアイゼン！」

グラ『Ｂｄｗｅｇｕｎｇ.』

零夜「行くぞ…極夜…」

極夜『極めて了解』

全員セットアップする。

シャマル「それじゃ、夜明け時までに、此処で」

シグナム「ヴィータ、余り熱くなりすぎるなよ」

ヴィータ「わーってるよ！」

零夜「俺は誰について行けばいい？」

シグナム「では、シャマルについて行ってくれ、その方がすぐさま蒐集できる。この中で一番強いのはお前だからな。」

零夜「…買いかぶり過ぎさ…」

俺は髪を上げ、オールバックになり、顔の左側を仮面で隠す

そして、俺達は飛び出した。

零夜「ターゲット確認…シャマル、今から一撃で仕留める。」

目の前に巨大な岩龍がいる

この程度の龍ならさして問題はない。

一撃で十分だ。

零夜「ライトニングドライヴ！」

魔力をモード2の状態で刀身に集め、雷を帯びた状態で剣を振り上げ、一気に打ち出す。

魔力の圧縮率を可能な限り高めた雷は一撃で岩龍の意識を刈り取る。

シャマル「すごい…一撃で…」

零夜「シャマル…蒐集を頼む…」

シャマル「うん、闇の書、蒐集」

『Ｓａｍｍｌｕｎｇ（蒐集）』

岩龍のリンカーコアから魔力が闇の書に流れ込んでいく

零夜「今ので何ページ集まった？」

シャマル「今ので…３ページ」

零夜「３ページか…よし、次行こう…」

次のターゲットはバカでかいマンモスみたいな奴だ。

体長５０ｍくらいありそうだ。

草食なのだが、侮ってはならない

メチャクチャ強いのだ

ヴィータやシグナムでも苦労する生物だ

その分、リンカーコアの質はかなり高かったらしい

零夜「こいつは一人じゃ少し骨が折れるな…シャマル、手伝ってくれ…」

シャマル「初めからそのつもり。ヴィータちゃんや、シグナムでも苦労したんだもの、いくら零夜君でも一人じゃ…」

会話している間にヤツが巨大な牙を振り回し、突っ込んでくる。

巨大な体に見合わないスピードだ。

俺は高く飛び上がって回避

そのまま

零夜「極夜、モード３」

極夜『極めて了解』

長刀を構え、突撃

零夜「八刀一閃！」

八回の斬撃同時に叩き込む

ゴアアアアアアア！！

うるせえぇ！

零夜「うおらあああああああああ！！！」

悪魔の右腕（デビルブリンガー）の力を解放、この世界に存在しないはずの魔力で形成された巨大な右腕を出現させ、頭を殴りつける

そのまま倒れた

零夜「仕留めたか…？…ガハァッ！？」

しくじった…長い鼻で殴り飛ばされた…

シャマル「零夜君！」

マズイな…腕の骨1本か足の骨くらい逝ったか？

零夜「うおおおおおおおおおおお！！！！！」

再び悪魔（デビルブリンガー）の右腕でつかみ何度も腕を前後に振り回し、地面に叩きつける

とどめに投げ飛ばす

零夜「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…シャマル…蒐集を…」

シャマル「…うん」

闇『Ｓａｍｍｌｕｎｇ（蒐集）』

零夜「フゥ…」

シャマル「零夜君、大丈夫？」

零夜「あー…全身が痛むな…」

シャマル「ちょっとみせて」

零夜「ああ、頼む…あいててて…」

シャマル「骨は折れてないわね…だったら大丈夫、なんとかなるわ…」

零夜「そりゃよかった…」

シャマル「でも、しばらくは動かない方がいいわ、それにもうすぐ夜明け前だから…」

零夜「今のヤツは何ページ集まった?」

シャマル「一気に１０ページ集まったわ。」

零夜「…シグナムとヴィータとザフィーラもそれなりには集めてるだろうから…２０ページは集まっただろ…このまま…とりあえず帰ろう…いててて…」

ヴィータ「だいじょーぶか？」

零夜「体中が痛い。とりあえず少し寝れば多分治る。」

シグナム「アイツとやりあったのだろう？良くそれですんだものだ…」

零夜「…まあな…」

続く！

A's第4話　蒐集（後書き）

夜影ラジオ、派手に行くぜ！

Ｄ０「中学から肩の痛みと凝りが治らない。作者のデスサイズ・０です。」

零夜「俺の最速理論に揺るぎはない。主人公、影宮零夜だ。」

はやて「最近微妙に出番が減ってる気がするヒロイン、八神はやてや。」

秀吉「部屋の隅は俺のテリトリー、木下秀吉だ。」

Ｄ０「なぜだ！何故なんだァァァァァァ！何故アンケートに誰も答えてくれないんだ！ＺＥＲＯは俺には何も言ってはくれない！教えてくれ！」

零夜「駄作だからさ。」

はやて「修行が足らんな。」

秀吉「頑張れ。」

零夜「それにこんな駄作者の書いたヤツなんか誰も読みたくないんじゃね？」

ＤＯ「ウヅダドンドコドーン！！」

秀吉「オンドゥル語は止めい。誰が理解できるんだ。」

あしゅき「オルァキサマヲムックルス！！」

はやて「おった…」

秀吉「うちの作者は仮面ライダー好きだからな…」

ＤＯ「ウェイ！ウェイ！ウェイ！」

零夜「誰か止めろ！」

アンケート

５００００アクセス突破記念話に何を書いてほしいか

１人一回一つのみ

期限は１１／１３午前１０時まで

ちなみに、誰も答えてくれなかった場合、友人に聞いて帰ってきた答え、ＤｅｖｉｌＭａｙＣｒｙの世界かとある魔術の禁書目録ｏｒ超電磁砲の世界に零夜を飛ばすか、俺の妄想１２０％の話になります。

A'ｓ第5話　非日常の日常の1日「ややこしいな…」（前書き）

今回はかなり長い（俺にしては）

Ｌｅｔ'ｓ　ｒｏｃｋ!!

A' s第5話　非日常の日常の1日「ややこしいな…」

5：35

零夜「さて…行くか…！！」

朝から、俺はトレーニングの最後のランニングにこれから出かける

まあ、朝飯を俺が作るから6：00には帰るが

零夜「よし…！いい朝だ…！さあ！振り切るぜ！」

何を振り切るんだ、って突っ込みは無しで

5：40

火彩「さて、行くか！」

5：40

Ｂａｎｇ！Ｂａｎｇ！Ｂａｎｇ！Ｂａｎｇ！

氷雨「…右に…2度かな…左にわずかにずれたな……狙撃は、ちょっとしたズレが命取り…僕はなのはみたいに砲撃はそんなに強くないから、完全に命中させないと…」

5：55　臨海公園

零夜「ふぅ…」

火彩「…あ？零夜？」

零夜「…火彩？」

火彩「何してんだよ、こんな朝からこんなとこで…」

零夜「トレーニングだよ、お前は？」

火彩「俺もだ。毎日ここに？」

零夜「雨が降らない限りな」

火彩「なら、俺もそうするかな…そうすりゃあ、互いの状況を報告とかもできるしな」

零夜「そうか、そういえば事件はどうなってる？」

火彩「あんま進展はねえな…なかなか尻尾をつかめねえ…ただ、正体は少し分かった。闇の書の騎士…だな…最近、もう一人増えたが…」

零夜「闇の書…か…」

火彩「なあ、この画像みてくれないか？」

零夜「…これは…闇の書の騎士か…」

火彩「ああ、そしてこれが闇の書だ…どう思う…？」

零夜「どうって言われてもな…」

火彩「？覚えてないのか？昔、美月ちゃんが似たようなのを作ってたろ？」

零夜「…はっきりと思い出せん…もともと名前があったはずだ…」

火彩「ああ…それが俺は思い出せん…」

零夜「…名前だけ覚えている…夜天の書…だ…」

火彩「…そうだ、それだ！」

零夜「（思ったよりばれているな…）」

火彩「…零夜、お前この騎士たちの事を知ってるだろ？」

零夜「…何故そう思う…？」

火彩「この騎士たちの事をみるお前の眼がほかのデータをみるときと明らかに違った。こちらのデータを暗記しようとするかのごとく…そして、最近ふえたメンバー…この黒いコートに顔の左を仮面で隠した男…あらゆるセンサーに反応せず、なおかつ黒い雷を放って

いる…そしてこの長刀…極めつけは右頬のこの十字傷…これらの情報からこいつはお前だと俺は確信した…どうだ?」

零夜「おいおい…お前…馬鹿なのか天才なのかホントよくわかんねえな…」

火彩「大当たりだろ?」

零夜「ああ…」

火彩「話を聞かせてくれ……安心しろ…管理局には絶対に言わねえ…話すとしても俺が信頼できる奴だけだ…」

零夜「…分かった…」

火彩「なるほど…な…かなり厄介な状況だな…」

零夜「…完成させても…破壊以外に使用された記録がない…か…そして無限再生と無限転生…美月がそんなややこしい機能を付けるとは思えない…」

火彩「どっかの誰かが改変したんだろうよ…」

零夜「完成させてもさせなくてもはやては死ぬのか…！？」

火彩「いや、解らん。もしかしたら何か方法が有るかもしれん…今はまだ情報が少なすぎる…」

零夜「…とにかく…毎朝、情報交換だな…」

火彩「ああ、その…”はやて”って子を助けるためにも…これ以上闇の書の悲劇を引き起こさないためにも…な…」

零夜「ああ…」

零夜「俺はそろそろ帰る…朝飯作んねぇと…」

火彩「そうか…」

零夜「また今度、ゆっくり話し合おう…」

火彩「ああ…じゃあな…」

零夜「ただいま～っと…」

はやて「おかえり、零夜君。」

零夜「ちょっと遅かったか…」

はやて「シグナムとザフィーラがそこで寝てるから静かにな」

零夜「わかった」

で、俺は野菜を切ってサラダを作っていた

はやては味噌汁を作っている

シグナム「ん…んん…」

零夜「お、悪いな、起こしたか？」

シグナム「あ、いや…」

はやて「ちゃんとベッドで寝やなあかんよ、風邪引いてまう」

シグナム「す、すみません…」

はやてが掛けたであろう毛布をたたみながら言うシグナム

はやて「シグナム、昨夜も夜更かしさんか？」

シグナム「ああ…その…少しばかり…」

零夜「早く寝ろよ…？」

俺は部屋の電気を付けた。

はやて「シグナム、はい」

シグナム「あ…」

はやて「ホットミルク…温まるよ…」

はやてが盆に載せて持ってくる

シグナム「ありがとう…ございます…」

はやて「はい、零夜君も」

零夜「お、ありがとよ」

はやて「ザフィーラにもあるよ、ほら、おいで」

いや…おいでって…ザフィーラ一応狼だぞ…犬みたいに言うなよ…

ザフィーラ「（一応は止めろ一応は…）」

心を読むな…そしていきなり念話するのはやめい…びっくりする…

シャマル「すみません、寝坊しました！」

大慌てでシャマルがリビングのドアを開けて入ってくる

零夜「おう、おはよう」

はやて「おはようシャマル」

シャマル「おはよう！うぅ…もぅ…ごめんなさいはやてちゃん、零夜君…」

はやて「ええよ～」

ヴィータ「おはよ～…」

ヴィータがウサギのぬいぐるみを引きずりながら超眠そうに入ってくる

はやて「おぉ…めっちゃ眠そうやな…」

ヴィータ「眠い…」

零夜「ったく…顔洗って来い…」

ヴィータ「ミルク飲んでから…」

零夜「はいよ」

ヴィータ「んん…」
シグナム（…温かい…な…）

零夜（…やっぱ…こう言うのが一番だよな…）

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

フェイト「じゃあ、行こっか、火彩。」

火彩「おう」

フェイト「し、失礼します」

火彩「失礼しまーす」

フェイト「あの、フェイト・テスタロッサと言います、宜しくお願いします…」

火彩「えー…闇咲火彩だ…宜しく…」

俺とフェイトは今小学校にいる。

何故かって？

まぁ話しを聞いてくれ。

火彩「小学校？俺が？」

フェイト「うん、明日から私も行くから…」

火彩「…一応…俺の実年齢３１歳位なんだが…」

フェイト「でも今は９歳だよね」

火彩「まぁな。昔と今じゃ俺も違うからな…」

フェイト「一緒に学校行こうよ、私は火彩と一緒に学校行きたいな」

火彩「よし行こう、すぐ行こう、学校行こう。俺もフェイトと学校に行きたい。」

フェイト「ホントに！？」

火彩「ああ。」

と言う訳だ

要するにフェイトに上目使いで頼まれてそのまま了解しちゃったって訳だ。

Ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？

で、いきなり俺達は質問責めにあってるわけだ

ま、俺は

火彩「す…すまん…時差ボケですげぇ眠いんだ…あ、後にしてくれ…休み時間は…眠らせてくれ…」

と、嘘を言って逃げた

だがフェイトはそんな事は出来ないので質問責めにあってるわけだ

フェイト「あの…えと…その…」

火彩「……」

しかし眠いのはマジだ

だが…これは助けた方がいいのか…？

――――――――――――――――――――――――――――――――

すずか「フェイトちゃん、人気者…」

なのは「でも、あれはちょっと大変かも…」

氷雨「しかも火彩は上手く逃げたし」

火彩…ちょっとひどいよ…

アリサ「ハァ…しょうがないな…ハイハイ！転入初日の留学生をそんなにみんなで揉みくちゃにしないの！」

フェイト「アリサ…！」

アリサ「それに質問は順番に、フェイト困ってるでしょ？」

氷雨「さすがアリサ、ああ言うのを仕切るのは得意だね…」

僕にとってはああいうのはちょっと羨ましいかな…

――――――――――――――――――――――――――――――

で、今は昼休み

すずか「二人とも、初めての学校の感想はどう？」

「歳の近い子がこんなにたくさん居るのは初めてだから、なんだがもう、ぐるぐるで…」

火彩「ん…まぁ…悪くはないな…なかなか面白そうだ…」

アリサ「まぁ、すぐになれるわよ、きっと」

フェイト「だといいな…」

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーー

シャマル「それじゃあ、はやてちゃんの病院の付き添い、よろしくねシグナム」

シグナム「ああ、ヴィータとザフィーラはもう？」

シャマル「出掛けたわ」

零夜「もう行ったのか…」

シャマルは箱を手に取り、中身を取り出す

零夜「カートリッジか…」

シャマル「ええ、昼間のうちに、作り置きしておかなきゃ…」

シグナム「すまんな…お前ひとりに任せっきりで…」

シャマル「バックアップが私の役目よ、気にしないで」

そう言って、カートリッジに魔力を込めるシャマル

零夜「じゃあ…シグナム、シャマル…少し行ってくる…」

シグナム「頼む…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

火彩「さて…帰るか…」

フェイト「うん…」

なのは「二人とも、クロノ君からメールが来てるよ」

火彩「マジか」

なのは「レイジングハートもバルディッシュも来週には修理は終わるって。あと…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

零夜「…」

もう何体からリンカーコアを奪っただろうか

だがしかし、未だ４ページほどしか集まってない

零夜「…なにか…はやてを助ける術は無いのか…」

夜天の書は…なぜ闇の書と言われている…？

まぁ…何があったかはだいたい予測はできる…

そして…監視してくるだろう存在…

恐らく前の主がなにかやらかしたのだろう…

…だが知ったこっちゃねぇ…

…今度監視者を引きずり出して捕まえるか…

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

高町家…

氷雨自室…

氷雨「火彩…あの騎士たちの事はどう思う…？」

火彩「…なにか厄介な事情があるように思える…」

氷雨「僕もそう思う…何か…ある…悪意みたいなのは感じないから…ね…」

火彩「…多分相当な意志なんだろう…かなり面倒な事態だ…強い意志を持つと、周りの声が聞こえなくなる…」

氷雨「…あの二人には…多分まだ辛いんじゃないかな…まずは話を聞こうとするから…彼女たちには多分話を聞こうたって無理だ…」

火彩「いや、あの二人はそこまでヤワじゃないさ…多分話が聞けないなら戦って、それから話を聞こうとするんじゃないか？」

氷雨「そうだね…なのはは絶対そうすると思うな…」

火彩「フェイトもその影響を少なからず受けてっからな…」

氷雨「まぁ、僕らはそれを助けるだけさ…」

火彩「ああ…」

フェイト「じゃあね、なのは」

なのは「うん、バイバーイ！」

火彩「じゃあな」

氷雨「うん、じゃあ…」

火彩「さてと…本職に戻るとするか…」

フェイト「ねぇ…火彩…私は…強くなれるかな？」

火彩「俺は今のままでも十分強いと思うけどな…ま、お前はもっと強くなるさ…それに、強くなりたいなら夢と誇りを持て…夢を持つヤツは夢に向かってまっすぐ進む…だから強くなれる…」

フェイト「夢…か…」

火彩「ま、これは俺の親友の言ってたことなんだがな。」

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一

俺達は以前倒した岩龍と同種の生物を俺とヴィータとザフィーラで倒した

ヴィータ「ハァ…ハァ…ハァ…」

ザフィーラ「闇の書、蒐集」

闇『Ｓａｍｍｌｕｍｇ』

零夜「ふぅ…」

カチャ…カチャ…カチャ…

ヴィータがカートリッジをグラーフアイゼンに再装填（リロード）する

ザフィーラ「今ので、3ページか…」

ヴィータ「クッソ…でっけぇ図体して、リンカーコアの質は低いんだよな…」

零夜「…下手に魔導師を相手にするよりはマシだ…むしろ思っていたより効率はいい…」

ヴィータ「次行くぞ」

零夜「まて、ヴィータ。少し休め。」

ヴィータ「別にいいよ、あたしだって騎士だ。この程度の戦闘で疲れるほど柔じゃないよ」

零夜「休めるときに休んでおかないと、死ぬぞ。騎士ならそれがよく分かるはずだ。」

ヴィータ「……」

零夜「悪いが俺はもう戻らねばならない…はやてが帰った時に俺が居ないと不自然だからな…ザフィーラ、ヴィータを頼む…」

ザフィーラ「わかった…」

零夜「すまない…ヴィータ、無理だけは絶対にするなよ…それと、早く帰るんだぞ…」

ヴィータ「…うん…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

零夜「…遅い…」

ヴィータ…早く帰って来いって言ったはずなんだが…

はやてはシャマルと買い物に行ってるが…

そう言えば、今日ははやての友達が遊びに来るんだったな…

誰だっけ…たしか……すずか…だったか？
よく図書館ではやてと話してる子だったな…

…とにかく…しばらくは待つか…

はやて「みんな…遅いなぁ…」

遅すぎる…！シャマルが探しに行ったが…それでも…！

零夜「…」

シャマル「（零夜君…ちょっとマズい事になったわ…）」

零夜「（管理局に見つかったか…すぐ行く…４５分以内に帰るぞ…！）はやて、少しみんなを探してくる。４５分で帰るから。」

はやて「うん、頼むな。」

続く…

Ａ' ｓ第５話　非日常の日常の１日「ややこしいな…」（後書き）

夜影ラジオ、Ｌｅｔ' ｓ　ｒｏｃｋ　！

《ＢＧＭ：更に闘う者達　ＦＦ？ＡＣｖｅｒ．》

Ｄ０「以前は戦う事でしか自分を表現出来なかった作者、デスサイズ・０です」

秀吉「いつも通り、俺はここにいる。俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

Ｄ０「…」

秀吉「なぁ、なんで二人しかいないんだ？」

Ｄ０「全員の視点で書いてしまったからな。」

秀吉「わかりにくいな…」

Ｄ０「…基本的に

―――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

が入れば視点変更だ

なおかつ視点は零夜、火彩、氷雨、三人称のいずれかにしかならない。

今回から視点変更の時は何も書かない。

もし主人公ｰ　ｓ以外に移行する場合はｓｉｄｅ～と書く。」

秀吉「なるほど…戦闘はどうすんだ？」

Ｄ０「わからん…恐らく三人称で書くと思う…」

秀吉「それと次、なんでＢＧＭ流してんだ？」

Ｄ０「いや、書きながら聞いてるし、いい曲だから流した。」

秀吉「…そうか…なら最後だ…こんな事してて大丈夫か？今日英検３級の二次試験だろう？」

Ｄ０「まあいいじゃん」

秀吉「よくねぇよ！お前、前回後一点で落ちただろ！」

Ｄ０「くっ…仕方あるまい…寝るか…」

続かなければ生き残れない！

A's第6話　それは小さな一つの願い（前書き）

今回は俺史上最長

Let's rock!!

A's第6話　それは小さな一つの願い

零夜（結界に閉じこめられたか…無事でいてくれ…！）

少し前…

――――――――――――――――――――――――――――――――

ヴィータ「クッ…」

ザフィーラ「管理局か…」

ヴィータ「でも、チャライよコイツ等…返り討ちだ！」

その瞬間、周囲を取り囲んでいた十数人の管理局員が一斉にその場を離れた

ヴィータ「ハッ？」

ザフィーラ「上だ！」

上空に魔力で形成した剣を無数に配置したクロノがいた

クロノ「スティンガーブレイド、エクスキューションシフト！」

剣が一斉に回転し

クロノ「てぇ！」

発射される

ザフィーラ「チィッ！」

ザフィーラがヴィータの前に出て障壁を張る

障壁に剣がぶつかり、爆発する。

クロノ「ハァ…ハァ…ハァ…少しは…通ったか…」

ヴィータ「ザフィーラ！」

障壁で防ぎきれなかった剣をザフィーラが自分の体を盾にし、腕に数本剣が刺さっていた

ザフィーラ「気にするな…この程度でどうにかなるほど…柔じゃな

いッ…！！」

腕に力を込めると刺さっていた剣がガラスのように砕け散った

ヴィータ「上等！」

クロノ「クッ…」

エイミィ「武装局員、配置終了！ｏｋ！クロノ君！」

クロノ「了解！」

エイミィ「それから今、現場に助っ人を転送したよ！」

クロノ「あれは…なのは！フェイト！」

ビルの上に、二人が立っていた。

ヴィータ「アイツら！」

なのは「レイジングハート！」

フェイト「バルディッシュ！」

「「セーット！アーップ！」」

なのは「え？こ、これって…」

フェイト「今までと…違う…」

レイ『Order of the setup was accepted.』

バル『Operating check of the new syrtem has started.』

レイ『Exchange parts are in good condition, completely cleard from the NEURO－DYNA－IDENT alpha zero one to beta eight six five.』

バル『The deformation mechanism conformation is in good condition.』

レイ『Main system, start up.』

バル『Haken form deformation preparation is in good condition.』

レイ『An accel and a buster: the modes switching became possible. The percentage of synchron

ｉｃｔｙ，ｎｉｎｅｔｙ，ａｒｅ　ｍａｉｎｅｔａｉｎｅｄ．』

バル『Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ，ａｌｌ　ｇｒｅｅｎ．Ｇｅｔ　ｓｅｔ．』

レイ『Ｓｔａｎｄｂｙ，ｒｅｄｙ．』

なのは「レイジングハート・エクセリオン！」

フェイト「バルディッシュ・アサルト！」

『『Ｄｒｉｔｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ．』』

――――――――――――――――――――――――――――――――

火彩「Ｈａ…あれが新しくなった二機か…」

氷雨「あの子達が自分の意志で選んだ力…レイジングハート・エクセリオン…」

火彩「バルディッシュ・アサルト…ねぇ…フェイトらしい名付けだ…」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ヴィータ「アイツらのデバイス…あれってまさか！！」

バル『Assalt form, cartridge set,』

レイ『Accel, standby, ready.』

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

シグナム「強壮型の捕獲結界…ヴィータ達は閉じこめられたか…」

レバ『Wahlen Sie Aktion!（行動の選択を）』

シグナム「レヴァンティン、お前の主はここで引くような騎士だったか？」

レバ『Ｎｅｉｎ．（否）』

シグナム「そうだレヴァンティン。私は、今までずっとそうしてきた！」

レヴァンティンはシグナムの言葉に答えるようにカートリッジをロードする。

シグナム「……」

――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイト「私達は、貴方達と戦いに来た訳じゃない。まずは話を聞かせて」

なのは「闇の書の完成を目指してる理由を…」

ヴィータ「あのさぁ…ベルカのことわざにこーゆーのがあんだよ。」

ザフィーラ「……」

ヴィータ「〝和平の使者なら槍は持たない〟」

なのは「…？」

フェイト「…？」

ヴィータ「話し合いしようってのに、武器を持ってくるやつが居るかバカ！って意味だよ！バァーカ！！」

グラーフアイゼンを突きつけながら言いつける

なのは「なぁっ！？いきなり有無を言わさずに襲いかかってきた子がそれを言う！？」

ザフィーラ「…それにそれはことわざではなく、小話のオチだ…」

ヴィータ「うっせぇ！同じようなもんだろ！いいんだよ、細かいことは！」

刹那、上空の結界から侵入する者がいた

フェイト「ッ…シグナム…！」

なのは「ユーノ君！クロノ君！氷雨君！手出さないでね！私、あの子と1対1だから！」

ヴィータ「クッ…」

クロノ「マジか…」

ユーノ「マジだよ…」

フェイト「（アルフ、火彩…私も……彼女と…）」

シグナム「……」

アルフ「ああ…あたしも野郎に、ちょいと話がある。」

ザフィーラ「ム…」

火彩「…ああ…」

――――――――――――――――――――――――――――――――

クロノ「（ユーノ…火彩…氷雨…それならちょうどいい…僕らで闇の書の主を探すんだ…）」

ユーノ「（闇の書の？）」

クロノ「（連中は持っていない…恐らく…もう1人の仲間か、主かが何処かにいる…僕は結界の外を探す…）」

火彩「（俺と氷雨はこの位置から動く訳にはいかん…）」

氷雨「（この狙撃ポイントから下手に動けば、ばれてしまう…）」

火彩「（あの黒いコートに、顔半分を仮面で隠したヤツ…アイツが来たらおしまいだ…ヤツの実力は恐らく俺と同格…いや…それ以上かもしれん…ヤツを抑えられるのは俺だけだ…）」

クロノ「（なら仕方ない…ユーノ…君は中を…）」

ユーノ「（わかった）」

レイ『Ｍａｓｔｅｒ，ｐｌｅａｓｅｃａｌｌ　ｍｅ”Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｌｏａｄ”（『カートリッジロード』を命じてください）』

なのは「うん！」

なのははレイジングハートを構え

なのは「レイジングハート！カートリッジロード！」

レイ『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

レイジングハートに新たに取り付けられたカートリッジシステムのカートリッジが入ったマガジンからレイジングハートに装填される

バル『Ｓｉｒ．』

フェイト「うん、私もだね」

フェイトもバルディッシュを構え

フェイト「バルデッシュ、カートリッジロード」

バル『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

バルディッシュに取り付けられたカートリッジシステムのリボルバーが回転し、カートリッジが装填される

ザフィーラ「デバイスを強化していたか…気を付けろ、ヴィータ」

ヴィータ「言われなくても!!」

全員が飛び出した

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ヴィータは、少し飛んだ後、振り返り後ろを見た

ヴィータ「ハッ！結局戦んじゃねーかよ」

なのは「私が勝ったら、話を聞かせてもらうよ！良いね！」

ヴィータ「やれるもんなら！」

ヴィータは４つの鉄球を取り出し

ヴィータ「やってみろよ！」

グラ『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ．（シュヴァルベフリーゲン。）』

ヴィータ「えい！」

鉄球を打ち出した

レイ『Ａｘｅｌｆｉｎ．（アクセルフィン）』

鉄球はなのはが足から出た羽根によって避けられる

だが、ヴィータはすぐさま突撃する

ヴィータ「アイゼン！」

グラ『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ．（ラケーテンフォルム）』

グラーフアイゼンが変形し、ハンマーのヘッドの片側がエンジンに、片側からはピックが飛び出した

エンジンはすぐに起動し、

ヴィータ「でえぇぇぇぁぁぁぁぁ！」

回転しながらなのはへ突撃する

なのは「あっ…！」

以前、同じ攻撃でやられた事をなのはは思い出して、動きが止まる

だが

レイ『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ.』
以前より強化されたプロテクションをレイジングハートが張った
ヴィータ「ッ…堅ぇッ…！」
なのは「…ホントだ…！」
レイ『Ｂａｒｒｉｅｒ　ｂｕｒｓｔ.』
レイジングハートがプロテクションを爆発させ
ヴィータ「うおぁぁ…」
ヴィータを吹き飛ばした
なのは自身も吹き飛ばされたがすぐに体制を立て直した
レ『Ｌｅｔ's　ｓｈｏｏｔ　ｉｔ，Ａｘｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ.（アクセルシューターを撃ってください）』
なのは「うん、アクセルシューター！」
なのはは小さく頷き、アクセルシューターの発射をレイジングハートに命ずる
レイ『Ａｘｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ.』

足元に、ミッド式の魔法陣が展開され、レイジングハートの先端に光が集まり、

なのは「シューート！！」

なのはの合図で12発の魔力弾が発射される。

なのは「あっ！」

あまりに多いアクセルシューターの数に、放ったなのは自身が驚く。

ヴィータ「クッ…うわっ！？」

ヴィータの表情が一変する。

レイ『Ｃｏｎｔｒｏｌ，ｐｌｅａｓｅ．（コントロールをお願いします）』

なのは「うん…」

なのはは目を閉じ、コントロールに集中する。

しかし、ヴィータの周囲をぐるぐると飛び回るだけになっている。

ヴィータ「アホか、こんな大量の弾、全部制御できる訳が！」

ヴィータが手をかざすと周囲にあった鉄球が４方向からなのはを襲う

レイ『Ｉｔ　ｃａｏ　ｂｅ　ｄｏｎｅ，ａｓ　ｆｏｒ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．（出来ます。私のマスターなら）』

なのは（大丈夫…私ならできる…氷雨君に教えてもらった、心で…！！）

すると四発のアクセルシューターが動きを変え、接近していた鉄球を打ち砕いた

ヴィータ「ぁ…！！」

再度ヴィータの表情が驚愕に染まる

氷雨（そう…君が放った弾だ…絶対に言うことを聞かないなんて事はない…だって、君自身の心なんだから……僕の教えをちゃんと理解して、物にしたんだね…なのは…）

なのは「約束だよ！私達が勝ったら、事情を聞かせてもらうって！！…アクセル！！」

グラ『Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ．（パンツァーヒンダーニス）』

ヴィータの周りを紅い障壁が覆う
なのは「シューーート！！！」
なのはの合図でアクセルシューターが加速、ヴィータの障壁に連続でダメージを与えていく

何度も食らい、ひびが入る
ヴィータ「あっ…クッ…」
更にひびは増えて行く
ヴィータ「こんのぉ…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

上空

フェイトとシグナムは何度もぶつかり合っては離れ、再度衝突するのを繰り返していた。

フェイト「はぁぁぁぁぁぁ！！」

バルディッシュを振りかぶり、

シグナム「たあぁぁぁぁぁぁ！！」

レヴァンティンを振りかぶり、

衝突する

シグナム「クッ…グゥッ…」

フェイト「うぅ…」

また離れ

バル『Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ．』

フェイトの足元に金色のミッド式魔法陣が現れ、左右に魔力スフィアが８つ現れる

シグナム「……」

シグナムはレヴァンティンを構えたまま、待ち構えている。

フェイト「プラズマランサー…ファイア！！」

フェイトの合図でスフィアから高速の魔力弾が射出される

それらは一斉にシグナムへと向かう。

シグナムは、カートリッジをロードし、剣に炎を纏わせる

シグナム「…ハァッ！」

タイミングを合わせ、プラズマランサーを弾き飛ばす。

フェイト「ターン！」

プラズマランサーが反転し、再びシグナムへと襲いかかる。

シグナム「ハッ…！」

シグナムは上空へと飛び、回避する。

プラズマランサー同士でぶつかり合うも、更に向きを変え、シグナムへ更に襲いかかる。

シグナム「レヴァンティン！」

カートリッジをロードする。

レバ『Ｓｔｕｒｍｗｉｎｄｅ．（シュトゥルムヴィンデ）』

バル『Ｂｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ．』

シグナム「てえぇぇぇぃ！！」

炎を纏った一閃、紫電一閃でプラズマランサーを打ち砕く

その瞬間、フェイトがバルディッシュを振りかぶりながら背後から迫っていた

さらに

バル『Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ！（ハーケンフォルム！）』

バルディッシュはカートリッジをロード、魔力刃を出し鎌、ハーケンフォルムに変形する

レヴァ『Ｓｃｈｌａｎｇｆｏｒｍ！（シュランゲフォルム！）』

レヴァンティンも同様に、カートリッジをロードし、連結刃、シュランゲフォルムに変形する。

互いの得物がぶつかり合い、爆発を起こす。

煙の中から飛び出したフェイトは体の左側と二の腕が傷ついていた

同様に飛び出したシグナムは胸を斬られていた

空中で対峙する二人

シグナム「強いな…テスタロッサ…」

レヴァ『Ｓｃｈｗｅｒｔｆｏｒｍ．（シュヴェアトフォルム）』

レヴァンティンを通常の剣に戻しながら言う

シグナム「それに、バルディッシュ…」

バル『Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．』

フェイト「貴女と、レヴァンティンも…シグナム…」

レヴァ『Ｄａｎｋｅ．』

シグナム「この身に、成さねばならないことが無ければ、心躍る戦いだったはずだが…仲間達と我が主のため、今はそうも言ってられん…殺さずに済む自信がない…この身の未熟を、許してくれるか？」

フェイト「構いません、勝つのは…私ですから…」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

アルフ「うおぁぁぁぁぁ！！！」

ザフィーラ「グッ…！」

アルフが魔力を込めた拳でザフィーラを殴る

ザフィーラは両手でガードする

アルフ「デカブツ…！アンタも誰かの使い魔か！？」

ザフィーラ「ベルカでは、騎士に使える獣を使い魔とは呼ばぬ…！」

アルフ「っ…？」

ザフィーラ「主の牙、そして盾！守護獣だぁぁぁ！！！」

アルフ「同じような！もんじゃんかよぉぉぉぉぉ！！」

アルフの拳がザフィーラの障壁を破り、その瞬間に爆発を起こす

ザフィーラは後ろに飛んで下がる

ザフィーラ「（状況は、あまり良くないな…シグナムやヴィータが負けるとは思わんが…ここは引くべきだ…シャマル、何とかできるか？）」

シャマル「（何とかしたいけど…局員が外から結界維持して…私の魔力じゃ破れない…シグナムのファルケンか、ヴィータのギガント級の魔力を出さないと、破れない…）」

ザフィーラ「（二人とも手が離せん…どうする…）」

シャマル「（大丈夫、さっき零夜君に連絡したから。４５分以内に帰るぞって言ってたわ。）」

ザフィーラ「（なら、あと少し持ちこたえる！）」

シャマル「（ええ、おねが…）」

ザフィーラ「（シャマル？どうした！シャマル！？）」

クロノが自身のデバイス、Ｓ２Ｕを突きつけ、シャマルの背後に立っていた

クロノ「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します。抵抗しなければ、貴女には弁護の機会がある、同意するなら武装の解除を。」

次の瞬間

零夜「ットゥア！！」

クロノ「ガハァッ！」

零夜がクロノを蹴り飛ばしていた。

零夜「シャマル、大丈夫か？」

シャマル「ありがとう、れ「シッ！…本名を出すな…」…うん…」

クロノ「ぅ…仲間…？」

零夜「これがその結界か…なるほど…確かにかなりの強度だ…」

シャマル「どう？」

零夜「問題ない、だがまずはあの黒いヤツを黙らせてからだ…少しだけ待っていてくれ…」

――

クロノ「何者だ！連中の仲間か！？」

零夜「……」

クロノ「答えろ！！」

零夜「…俺は…闇の書の主……ミッドナイト…」

クロノ「何！？」

零夜「悪いが少し黙っていてくれ…」

刹那、クロノの周囲、前後上下左右全てを魔力で形成された刀が取り囲んだ

クロノ「ッ…！？」

零夜「…さて…（いいか…全員、よく聞いてくれ…今から俺が結界を斬り裂く…恐らく余波が凄まじいだろうが…上手く凌いで逃げてくれ！その後、俺が殿（しんがり）をする！）…」

「「「（（（（おう！））））」」」

零夜（まだ…成功はしたことはないが…やるか…次元斬り…！）

極夜『（焦るな…刀夜がどうやっていたか…思い出せ…！）』

零夜「ハァァァァァァ！！！！！」

行動そのものが見えない速さの抜刀術

虚空を斬った一閃は何も起こらない…

1秒…

2秒…

3秒…

刹那、結界の周囲の空間が歪み始めた

零夜（成功だ…！）

――

ユーノ「はっ…！マズい…防御を…！」

いち早く異変に気付いたのはユーノだった

フェイト「な、何！？」

シグナム「すまんテスタロッサ…この勝負…預ける！」

フェイト「シグナム！？」

ヴィータ「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータ。アンタの名は？」

なのは「なのは…高町なのは！」

ヴィータ「高町なぬ…な…ええい！呼びにくい！！」

なのは「逆ギレ！？」

ヴィータ「ともあれ勝負は預けた！次は殺すからな！ぜってーだ！」

言うことだけ言ってヴィータは飛び去った

なのは「あ…えと…ヴィータちゃん！？」

ザフィーラ「仲間を護ってやれ！余波とは言え、直撃を危険だ！」

アルフ「ええっ！？あ…ああ…」

空間がさらに歪み、捻れる

そして

一気に元に戻り、結界が斬り裂かれる

零夜「（今だ！全員、撤退しろ！今ならレーダーなども使えん！）」

「「「「（（（（（了解！）））））」」」」

クロノ「何が起きているんだ…」

零夜「…知りたいか？」

クロノ「！？」

零夜「簡単だ…次元を斬り裂いただけだ…」

クロノ「バカな！そんな事が出来るはずが！」

零夜「もう一度見せてやろうか？なんなら、次は貴様の体で体験してみるか？」

クロノ「クッ…」

火彩「ハァァァァァァ！！」

零夜「…！グゥッ！」

火彩「クロスケ！死にたくなかったら誰にも手を出させるな！解ったな！？」

クロノ「あ、ああ…！」

火彩「炎龍爪！」

蒼炎を刀に纏わせ、一閃する

零夜「雷龍爪！」

黒雷を刀に纏わせ、迎え撃つ

刀同士が衝突し、爆発する

氷雨「ターゲット、確認…吹雪、やるよ…」

吹雪『はい。モード４－１、スナイパー』

スナイパーライフルを匍匐姿勢で構える

氷雨「…目標を撃ち抜く…！」

Ｂａｎｇ！

零夜「…！？クッ！？狙撃か…！？どこからだ…！」

火彩「気づかせると思うか！？白夜！モード２！」

白夜『了ォ解だァ！』

バスターソードを構え、火彩が突撃する

零夜「極夜…モード３…」

極夜『極めて了解』

長刀を構え振りかぶる。

氷雨「今だッ…！」

巨大な長刀を振りかぶる事で発生した極僅かな隙

そこを狙い、氷雨は狙撃した。

通常の人間には隙とも言えない隙だが、彼にとっては十分な隙だった。

零夜「ガハァッ！」

火彩「テリャアアアアアアア！」

バスターソードに蒼炎を纏わせ、縦に振りかぶる火彩

零夜「チィッ！ハァアアアアアアア！」

零夜も対抗して黒雷を纏わせ、回転斬りをする

火彩「デヤアアアアアアアア！」

零夜「ハァアアアアアアアア！」

零夜が右薙に長刀を一閃すれば、火彩はバスターソードで防ぎ、火彩がバスターソードを縦に振れば、零夜は長刀で受け流し、蹴りを繰り出す

火彩は蹴りを拳で迎え撃ち、長刀の一閃をバスターソードで弾く

長刀の一撃が火彩に当たりそうなとき、氷雨の狙撃が長刀に直撃し、太刀筋を大きくずらす

零夜「つあああああ！！雷龍牙！」

黒雷を纏い、強力な突きを繰り出す

火彩「炎龍牙！」

火彩も蒼炎を纏った強力な突きを放つ

突きが衝突し、そこから激しく斬り結ぶ

右薙、斬り上げ、袈裟斬り、左薙、逆袈裟、斬り下ろし、突き、神速の太刀筋は誰にも捕らえられず、ひたすら斬り結ぶ。

零夜「うおぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

火彩「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ガァン！ガキン！キン！ガキン！シャキン！ガキン！ガァン！キン！ガキィン！ガァン！シャキン！ガキン！ガキン！ガァン！ガキン！シャキン！キン！キン！キン！キン！ガァン！

さらに、二人は激しく斬り結びながらも全て防ぎ、受け流し、回避し、一撃も食らっていなかった

フェイト「すごい…！これが…火彩の本気…」

なのは「…氷雨君…あんな細い刀に正確に…すごい…」

ユーノ「多分…ものすごい集中力だ…」

アルフ「火彩も、あんなスピードとパワー…初めてみたよ…何で今まであれを出さなかったんだろうねぇ…」

フェイト「多分、本気を出さなかったんじゃなくて、出せなかったんだと思う…本気をだす程の相手が居なかったから…」

火彩「（零夜…いいか…今から炎龍覇斬をする…お前は雷龍覇斬で相殺して、爆風で煙が晴れる前に逃げろ…！）氷雨！今から派手に決める！すぐ離れろ！！」

氷雨「解った！」

火彩「白夜！カートリッジロード！」

白夜『了ォ解！カートリッジロードォ！』

刀に戻した白夜にカートリッジをロードする

今までとは比べものにならない蒼炎が鞘に納めた刀身に集まる

零夜「極夜！カートリッジロード！」

極夜『極めて了解！カートリッジロード！』

通常の刀に戻し、鞘に納めた極夜の刀身に黒雷が集まる

火彩「炎龍！」

零夜「雷龍！」

「「覇斬！」」

互いに抜刀術をぶつけ合う

全てを焼き尽くす蒼炎

全てを撃ち抜く黒雷

極限まで圧縮された黒雷と蒼炎がぶつかり合い、大爆発を起こす

火彩「（今だ！）」

零夜「（済まない！火彩！）」

火彩「（気にするな！急げ！）」

零夜「（じゃあ、また会おう！）」

零夜はそのまま誰にもばれず、撤退する事に成功した。

――――――――――――――――――――――――――――――

零夜「ただいま～っと。」

はやて「あ、おかえりー！零夜君！」

すずか「おじゃましてまーす！」

零夜「おう、どうだ？４５分以内に帰ったろ？」

はやて「うん！さぁ、たべよか！今日はお鍋や！」

零夜「おう！すずか…だっけか？今夜はゆっくりしていってくれよ」

すずか「うん！」

ヴィータ「あ！あたしの肉！」

シグナム「フッ…油断するからだ…って！私の魚がっ！」

シャマル「残念ね…貴女が一番油断してるわ…」

零夜「はい、二人とも。」

はやて「ありがとう、零夜君。」

すずか「ありがとう！」

零夜「ああ…」

ヴィータ「だぁぁぁぁ！またあたしの肉が！」

零夜「…美味いな…」

続く…

A-s第6話　それは小さな一つの願い（後書き）

夜影ラジオ！Ｌｅｔ-ｓ　ｒｏｃｋ！！

（ＢＧＭ：カルマ）

ＤＯ「さぁ始まりました！夜影ラジオ、今回はちょっと頑張った俺！作者のデスサイズ・０です！」

秀吉「俺はどうすればいい？俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

ＤＯ「よくやった！俺！」

秀吉「あのクソ長い英語をよく携帯だけで書いたな…お疲れさん…」

ＤＯ「手がイかれたぜ…右手の親指がめちゃくちゃいてぇ…」

秀吉「それ、腱鞘炎になってないか？」

ＤＯ「大丈夫だ、問題ない…」

秀吉「ところで、ＢＧＭは今実際に流してるのか？」

ＤＯ「おう。うごぁぁぁぁあ…指がぁぁぁ…」

秀吉「…ゆっくり休め…」

ＤＯ「そ、そうさせてもらう…」

あ、アンケート…結局誰一人答えてくれなかったので俺の妄想ワールドを書きますので。

続かなければ生き残れない！

A's第7話　事件の後は何もない（前書き）

今回で氷雨の事が少しわかる

Let's rock!!

A-s第7話　事件の後は何もない

夕食も食べ終わり、今はみんな思い思いの時間を過ごしている

俺は庭で椅子に座りながらコーヒーを飲んでいる

零夜「ふぅ…」

零夜「…美味い…」

インスタントなのだが、どう言うわけかこの時は非常に美味く感じた…

シャマル「零夜君、今日は本当にありがとう。おかげで闇の書のページを減らさずにすんだわ…本当にありがとう」

零夜「フッ…家族を助けるのは当然だろう…？」

シグナム「それでも、だ…」

零夜「…だが…少々厄介なことになった…」

シグナム「ああ…管理局も、本腰を入れてくる…」

零夜「とにかく、管理局には闇の書の主は俺だと言った…これからは何かあれば俺を使ってくれ……」

シグナム「わかった…恩に着る…」

そう言って二人は家へと戻った

…さて…そろそろ良いだろう…

零夜「そろそろ出てきたらどうだ…？居るのは分かっている…」

以前から監視して来るヤツを…捕らえる…

結界は張った…

準備は…コーヒーの最後の一口だ…

「…いつから気づいていた…」

顔全体を仮面で隠した男が現れた

零夜「…もう1人も出て来いよ…居るんだろ…？おっと、不意打ち

は無駄だからな？」

「…クッ…なぜわかった…」

零夜「…至極単純、この家の周囲一定範囲には俺の魔力を薄く広げている…魔力を持った侵入者が居れば一瞬でわかる…いわば常にセンサーが反応し続けている状態だ…俺がこの家に来てしばらく立ってから始めたから…6月の末には分かったな…まぁ、姿が見えないことから、普段は何かに変身してるんだろう…」

「……」

零夜「そうだな…この家でよく見る…猫に…とか…」

「…」

零夜「まぁ…手を出さなければどうだって良い…だが俺の家族に手を出して見ろ…その時は……殺す……俺はヴォルケンリッター達とは違い…容赦はせん…！」

仮面の男は姿を消した…

零夜「…コーヒー…もう一杯飲むか…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

火彩「…このままじゃ勝てねぇな…」

刀夜…いや、零夜は確実に強くなっている…

火彩「本気を出してこのザマか…」

本気はだしたが、全力は出してない

俺と零夜が全力を出したら、この世界が吹き飛びかねん。

火彩「どうしたもんかねぇ…」

まぁ…今回は本気でヤバかった…氷雨が狙撃で長刀の太刀筋をずらしてくれなかったら斬られるところだった…

フェイト「火彩」

火彩「ん？」

フェイト「珍しいね…火彩がそんなに考え込むなんて」

火彩「お前な…俺だってバカじゃねぇんだから…」

フェイト「バカだよ…火彩は…あんな勝てるかわからない人に突っ込んでいくなんて…心配したんだよ…」

火彩「…悪かった…だが…アイツを抑えられるのは俺だけだ…だが次は…逃がさん…」

フェイト「…勝てるの？」

火彩「…ヤツのスピードはフェイト並かそれ以上だ…だが…パワーなら負けねぇ…次は俺が叩き落とす…あの闇の書の主を…」

正直、勝てるかどうかは解らない…いや、負ける可能性の方が大きい…

フェイト「じゃあ、火彩が戦ってたのは…闇の書の主だったの！？」

火彩「”自称”…な…」

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーー

火彩「奴らの目的は闇の書の完成…闇の書の力で主の足を治す…」

…俺は今1人でデータを整理しながら、これからの計画を立てていた

火彩「…闇の書…いや、夜天の書のデータがもっとあれば……クロスケに何かないか聞いてみるか…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

クロノ「あの騎士たち、闇の書の守護者の性質だ」

リビングに俺が行くと、クロスケが闇の書の事をフェイト達に話していた

クロノ「彼らは人間でも使い魔でもない、闇の書に合わせて魔法技術で作られた疑似人格、主の命令を受けて行動する…ただそれだけのプログラムに過ぎないはずなんだ…」

フェイト「あの…使い魔でも、人間でもない疑似生命って言うと…私みたいな…」

火彩「…！違う…！フェイト！お前はお前だ…他の誰でもない…フェイト・テスタロッサと言う1人の人間だ！どんな生まれ方だろうと…！あの時俺は言っただろ！”フェイトは他の誰でもない！フェイトはたった一つの命を持ってる1人の人間だ！”って…！……俺とは違ってな…」

俺はフェイトの肩を掴みながら言った。

だが最後は誰にも聞こえない小さな声で呟いた

俺自身に言い聞かせるように…

クロノ「検査の結果でも、ちゃんとそう出てただろう…変なことを言うものじゃない…」

…フェイトはまだあの時の事が…無理もないか…

俺に…俺にもっと力があれば……！

俺は知らぬ間に、部屋を出ていた…

――――――――――――――――――――――――――――――――

火彩「ハァ…どうするかねぇ…」

家の外の自動販売機へ缶コーヒーを買いに出たのはいいが、少しばかり戻りづらいな…

氷雨「火彩」

火彩「氷雨か…」

氷雨「…火彩…フェイトはやっぱり…あの時の事を…」

火彩「…ああ…おそらくな…」

氷雨「…なのはも気にしてたよ…」

火彩「あのサ…氷雨…闇の書の事なんだけどな…俺全部じゃないが知ってるんだわ」

氷雨「…何か隠してると思ったらそう言う事か…」

火彩「あ？気付いてたか？」

氷雨「まあね」

火彩「まぁいいや、とりあえずこれは絶対に誰にも言うなよ…まだお前にしか言わねぇから…なのはやフェイトにも追々話していくつもりなんだが……」

氷雨「なるほどね…」

火彩「まぁ…なのはとユーノにはまだ言わないでくれ…」

氷雨「わかった…けど…どうして僕に言ったんだい？君が一番信頼してるのは僕よりフェイトやアルフだろう？」

火彩「いや…みんな同じぐらい信頼してるさ…そうだな…お前に話した理由は…お前の力が”俺達”と同じだと感じたから…だな…」

氷雨「…どうしてそう思ったのかな？」

火彩「第1に魔法を発動する際に魔法陣が出ない、第2にデバイスが俺達と同タイプ、第3にお前の操る紅の氷…この3つから推測できる答えは一つ。お前は戦士（ソルジャー）だ、そして答え合わせと行こう。まず一つ目、これはソルジャースタイルだな？」

氷雨「…ああ…」

火彩「2つ目、デバイスは原初期のモノで代々受け継がれてきた、どうだ？」

氷雨「…正解だよ…」

火彩「3つ目…紅の氷は…紅氷龍（こうひょうりゅう）のモノだな…？」

氷雨「…多分…」

火彩「…Ｈａ…ハハハハハハハハ！！」

氷雨「ど、どうしたんだい火彩！？」

これが笑わずにいられるかよ！！

紅氷龍を倒してその力をその身に宿したのはたった1人…

―

―

龍神傭兵団、団長…

”水川凍地（みずかわとうじ）”

だけだ！

火彩「久々に面白い事を体験した！蒼炎龍、黒雷龍、紅氷龍と言えば龍の中でも最強クラスと言われていた（らしい）ヤツを倒した龍神傭兵団最強メンバーの再来だ！」

氷雨「火彩は僕の先祖の事を知ってるのかい！？お願いだ！教えてくれ！」

火彩「いいぜ！まさかとは思ったが団長の子孫だとはな！全部話してやるよ！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

零夜「へっくし！」

はやて「風邪か？気ぃ付けなあかんで？」

零夜「あいや…多分…風邪じゃないと思う…誰か噂してるんじゃないかな…」

はやて「もぅ…そんな迷信やで？」

零夜「…ま…少なくとも風邪ではないよ…」

実際に噂されているのに全く気づかない零夜だった…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

火彩「オイ、クロスケ」

クロノ「ハァ…いい加減その呼び方は止めてくれないか？」

火彩「いいじゃねぇか別に…んなことより、管理局にはなんか…情報をめちゃくちゃ調べられる場所はねぇのか？」

クロノ「あるにはあるが…そうだ、明日ユーノと一緒に来てくれれば、良い場所に連れて行こう、検索魔法を用意しておいてくれ…」

火彩「…んなもん使えねぇよ…」

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

続く…

A'ｓ第7話　事件の後は何もない（後書き）

夜影ラジオ、Ｌｅｔ'ｓ　ｒｏｃｋ!!

（ＢＧＭ：閃光）

Ｄ０「最近の口癖は”砕け散れ!”作者のデスサイズ・０です」

零夜「仮面を付けたら別人格、メイン主人公の影宮零夜だ。」

はやて「零夜君ともう一歩先へ行きたい、メインヒロインの八神はやてや。」

秀吉「俺のリロードは革命（レボリューション）、木下秀吉だ。」

零夜「砕け散れってどんな口癖だよｗｗｗ」

Ｄ０「いらっとしたらつい言っちまうのさ…」

秀吉「１０００００００回突き刺してから言うのか？」

Ｄ０「違う違う、違います…」

はやて「その場合は英語で言わんとあかんで、Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ!!って」

零夜「…はやて…どうしたんだ…」

ＤＯ「とにかく、砕け散れ」

零夜「お前は黙っとれ」

バゴッ！

ＤＯ「ぶべらっ！？」

ドサッ

はやて「久々にコレ使ったな」

秀吉「なんだ？ハリセンか！」

はやて「鉄板入りや」

秀吉「恐っ！！はやてはいつからそんなに恐ろしくなった！？」

続かなければ生き残れない！

A's第8話　これはただの1日「と言う名のネタ話だな」（前書き）

今回はかなり短い

そしてネタばっかり

Let's rock!!

A' s第8話　これはただの1日「と言う名のネタ話だな」

火彩「クロスケに今日とか言われたけど俺今日学校じゃねぇか！！」

はい、見事にクロスケに嵌められました…

注：火彩がバカなだけです

火彩「…」

…めんどくせぇ…

火彩「…Ｚｚｚ…」

……

フェイト「火彩…起きなきゃ駄目だよ…」

火彩「…Ｚｚｚ…」

アリサ「起きろこのバカ！」

ゴシャァァァ！

火彩「がはっ！？」

誰だ！俺の頭を明らかに鈍器で殴ったヤツは！

アリサ「授業中に寝ないの！」

火彩「うるさいッ！俺は眠いんだよッ！」

まぁ夜中までデータ整理はしていたのもあるからな…

アリサ「声が大きい！」

火彩「うっ…」

しまった…

フェイト「ちゃんと起きて授業受けなきゃ駄目だよ…」

火彩「はい…」

アリサ「なんでフェイトの言うことは聞くのよ…」

なのは「にゃはは…火彩君はフェイトちゃんの事が大好きだからね…」

はい、そうですがなにか？

にしても…完全に分かり切ったことをもう一度教えられるというのは…結構つらいものだ…

分かり切ってるから聞く気にならねぇ…

…そう言えば氷雨はどうしてるんだ…？

そう思って、振り返った先には

氷雨「なのは…そこ間違ってるよ…」

なのは「え？どこ？」

氷雨「ほら…ここ…」

なのは「うーん…わかんない…」

氷雨「此処はこうするんだよ…」

なのは「ありがとう…氷雨君…／／／／／／」

氷雨「どういたしまして…／／／／／／」

…ナチュラルにイチャついてやがる…

つか、誰か止めろ！あの二人の周囲が砂糖まみれになる！

「ゴハッ…」

既に被害者が出てやがったーーーッ！！

マズい、マズいぞ…！！このままではこの教室全体がッ…！

どうする！どうする！どーすんの俺！

手元のカード

・気にせずスルー

・諦める

・寝る

まてぇぇぇぃ！！

まともに解決できるのがねぇぇぇぇ！

つーか全部諦めてんじゃねぇか！！

ええい！次だ！

・ぶっ飛ばす

・蹴り飛ばす

・昇竜拳！

おいいいいいいいい！！何でこんなバイオレンスなんだ！！全部実力行使かよ！それしかねぇのかよ！！

ってか何だよ最後！昇竜拳って！出来るわけ……無いこともないけど！！

周りへの刺激が強すぎるわァァァァァァァァァァ！！

マズい…詰んだ…クソッ…！！

「…ろ」

やはり実力行使か！？

「ひ…ろ！」

やるしか無いのか！？

フェイト「火彩！」

火彩「ウェイッ！？」

どこぞのオンドゥルみたいな声が出てしまった

フェイト「授業…終わったよ？」

火彩「なん…だと…？」

フェイト「お昼御飯…食べないの？」

火彩「お、おう…今行く…」

…そんなに長く考えてたのか俺…

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

火彩「俺の帰宅最速理論に揺るぎはないッ！！」

現在全力疾走で帰宅中

フェイト達は携帯を買いに行くらしい

俺か？いらん。持っててもどうせ使わんし。
持ってるだけで金がかかるなら持つだけ無駄だ。

火彩「ただいまァ！！いるかァァァァァァァァ！！！クロスケェェェェェェェェ！！！」

クロノ「居るよ…全く…一度本局から戻って来たんだぞ…」

火彩「よくやったクロスケ！直ぐ着替えて来る！」

自室へダッシュ

着替え時間、１５秒

火彩「よし！クロスケ行くぞ！」

クロノ「は…速すぎる…」

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
—
—
—

ーーーー時空管理局ーーーー

火彩「…で…どこだ…？その、色々調べられる場所ってのは…」

クロノ「いや、その前に会う人物が居る…」

火彩「…どうしても会わなければ駄目か？」

クロノ「いや、別に強制はしないが…会って損は絶対に無い…何せ、あの人は…

”時空管理局最強の魔導師”と言われているからな…」

続く…

A's第8話　これはただの1日「と言う名のネタ話だな」（後書き）

夜影ラジオ、Ｌｅｔ's　ｒｏｃｋ!!

（ＢＧＭ：ＷＩＬＤ　ＦＡＮＧ）

Ｄ０「無理を通して道理を蹴っ飛ばす、作者のデスサイズ・０です」

火彩「最近出番が多い、闇咲火彩だ」

フェイト「火彩の出番に比例して出番が多くなってるフェイト・テスタロッサです」

火彩「…ネタばっかりだな」

フェイト「この話のいろんなネタわかる人いるのかな…」

Ｄ０「さあ？べつに居ようが居まいが気にはしないね、俺は。」

火彩「ＢＧＭも知ってる人居るのか？」

Ｄ０「居るかもな、一応ロックマンＸ８のテーマ曲だったんだが、ライダー好きの友人いわく、仮面ライダーＷにも使われていたらしいからな…確か…ファングジョーカーがどうとか…」

火彩「さっぱりわかんねぇ…」

Ｄ０「俺の中では仮面ライダーは龍騎で止まってるからな…」

火彩「戦わなければ生き残れない！」

続かなければ生き残れない！

番外編1　超カオスな1日（前書き）

今回はあしゅきさんの作品、俺が秀吉で化物級、ＰＥＲＳＯＮＡ３
―俺とシャドウと時々ナンパ、あと弓兵―
とコラボしてます
というか、依頼もありましたし

では、超カオスな一日

Ｌｅｔ' ｓ　ｒｏｃｋ!!

番外編1　超カオスな1日

零夜「…えーと…何でアンタらがここにいるんだ?」

秀吉「…色々あってな…」

星司「わかんねぇ」

零夜「…」

…何故秀吉と星司がいる…

秀吉「…俺は伊野宮の妙な発明品せいでな…」

星司「タルタロスからいつも通り帰ろうとしたんだが…帰ったと思ったらここにいた…」

零夜「…作者達の陰謀だな…」

どこからともなく”計画通り…!”とか二人分の声で聞こえてきた

…ウチの作者とあしゅきか…

零夜「……お疲れ……美味いコーヒーでも奢ろう…」

秀吉「…サンキュー…」

星司「…助かる…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

零夜「ただいま～…」

はやて「おかえりー♪あれ？その二人は…って…なんで零夜君は私以外の女の子とそんなに仲良さそうにしてんのかな～…」

いかん、はやてから黒いオーラがッ…！

秀吉「いや、俺は男だ…こんなんだけど…」

星司「まぁ…最初は俺も可愛い女の子だとおもってナンパしてしまったからな…」

はやて「…けど実はやっぱり女の子だったり「「「しねぇよ」」」…」

秀吉「おっと、自己紹介が遅れた、俺は木下秀吉、よろしく」

星司「稲垣星司だ…よろし…」

星司が自己紹介した時、偶々シグナムとシャマルがなかなかリビングへ来ないのを心配したのか様子を見に来たのだが…

星司「お付き合い前提に結婚してください」

とんでもないことを言いやがったァァァァァァァァァァァァ!!

いや、まず順番がおかしいから!!付き合うのを前提に結婚してくださいって先に進みすぎだ!!逆だ逆!

ま、まぁ…シャマルはともかく…シグナムは軽くあしらうか…スルーだろうが…

シグナム「へっ!?い、いや…そんな事を急に言われてもだな…その…／／／／／／」

!?　　Σ（。□。；）

シャマル「う、嬉しんだけど…ちょっと急…だけど…／／／／／／」

！？　　Σ（。□。；）

シ、シグナムが…顔を赤らめてモジモジしている…だと…！？

はやて「おぉ！珍しい！写真とっとこ。」

！？Σ（。□。；）

はやてェ…

もう訳わかんねぇ…

――

零夜「…何故こうなったし…」

何故だ…シグナムとシャマルは星司に落とされ…

秀吉「おっ！このアイス美味いな！」

ヴィータ「そうだろ！あたしの取って置きだからな！」

…ヴィータは秀吉に…落とされている…

こいつら何しに来たんだ…

――――――――――――――――――――――――――――――――

星司「シグナムさんは剣を使うんですか…俺も剣を使うんですよ、まぁ…普段は弓なんですけどね…」

シグナム「私も、弓は使えるぞ…まぁ…あまり使わないが…通常の刃と連結刃を使用する…」

星司「連結刃…ですか…出せるかな…ペルソナッ！！」

パキィン！

星司「お、出た。」

シグナム「…かなり長いな…」

マテ星司、他人の家で何出してやがる

ペルソナなぞ召還するな

星司「３ｍくらいありそうですね…ってかどうやって使うんだろ…」

シグナム「し、仕方ないな…私が教えてやろう…／／／／／／／」

おいいいいいい！！みんなどうしたんだよォォォォォォ！！！

はやて「零夜くーん、私らも二人でなんかしよー！♪」

零夜「何かって言われてもn…あぐぼぁ！！」

な、何だ今の抱きつくときの威力は…！

ソファーまで一撃で吹き飛ばされて押し倒されたぞ…

はやて「はふぅ…／／／／／／」

零夜「ぅ…／／／／／／」

はやて、頼むから抱きつきながらそんな可愛い声を出さないでくれ…俺の理性が…

はやて「んふぅ…／／／／」

零夜「…誰か止めてくれ…」

秀吉「俺…アイス作ってみようかな…」

ヴィータ「じゃあ、あたしも手伝う！主に味見！」

ヴィータ、それは手伝いとは言わん

お前はただ食いたいだけだろ

星司「オリャァァァ！！」

シグナム「そうだ！引き戻す際に自分に当たらないようにしろ！」

シャマル「はい、二人とも、スポーツドリンク。」

星司「ありがとうございます！（ニコッ）」

シャマル「はぅぅぅ…／／／／／」

おいいいいいいいい！なに他人の家で連結刃振り回してんだァァァ！！

零夜「ザフィーラァァァ！あれを止めてくれぇぇぇぇぇ！！」

ザフィーラ「無茶を言うな…あんなところに飛び込んだらバラバラにされてしまう…」

くそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！

零夜「ヴィータァァァ！！アイツ等を止めてくれぇぇぇぇ！！」

ヴィータ「はい、これ」

秀吉「おっ、ありがとうよ（ナデナデ）」

ヴィータ「はふぅ…／／／／／」

ちくしょぉぉぉぉぉぉぉぉ！！俺の言葉が届いてすらねぇぇぇ！！完全に秀吉に落とされてやがる！！

なら仕方あるまい！

零夜「はやて！アイツ等を止mうぉぉっ！？」

はやて「はむ…／／／／／／／／／／」

はやてぇぇぇぇぇぇ！！俺の耳を噛むなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！甘噛みだからなんかくすぐったいから！！止めてくれ！！

ってか…何でこうなったんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！

零夜「結局お前ら何なんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

俺は心の底から絶叫した…

Ｐｒｒｒｒ

秀吉「あ？電話？」

「もしもーし！聞こえる！？」

秀吉「おい！何で電話が通じるんだよ！！」

「何ゆうてんねん！ウチの科学力は全次元一やで！ウチの携帯は次元を超えて繋がるんや！」

秀吉「何その無茶苦茶！つーか俺は帰れるのか！？」

「当たり前や！後数時間で自動的に帰れるで！！」

秀吉「そうか…そりゃ良かった…」

「じゃ、そう言う事でな！」

秀吉「ああ。」

ヴィータ「誰から？」

秀吉「伊野宮からだ…全く…あの『天災』め…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

零夜「……」

はやて「…スゥ…スゥ…」

零夜「…みんな寝ちまったよ…」

零夜「…もうじき…午前零時か…」

秀吉「…うおっ！？」

突然秀吉の体が光り始めた

零夜「…そろそろ帰れるんじゃないのか？」

秀吉「みたいだな…わりぃな、突然邪魔して」

零夜「ヴィータが悲しみそうだな」

秀吉「ま、仕方ねぇさ冷凍庫に俺が作ったアイス入れておいたから食べてくれ」

零夜「そうか…そりゃあ全部ヴィータの物だな」

秀吉「ははは！だろうな！…おっと、そろそろだな…」

零夜「じゃあ…いずれまた会おう…」

秀吉「ああ…じゃあ…」

そう言って、秀吉は消えた

パキッ

零夜「……あ…？」

星司「影時間、かな？多分これで帰れるはずだ。」

零夜「お前もか…」

星司「秀吉はもう？」

零夜「おう、ついさっきな。」

星司「そうか…ハァ…」

零夜「なーに落ち込んでんだよ…」

星司「いや…帰ったらシグナムさんとシャマルさんに会えなくなるからさ…」

零夜「…そこかよ…」

星司「それに帰ったら…ハァ…」

零夜「…レンガ…か…」

星司「…だろうな…多分一日消えてたから…」

パキッ

零夜「ん？」

星司「そろそろだな」

零夜「そうか…」

星司「…さて…ペルソナッ！！」

パキィン！

零夜「…じゃあな…」

星司「おうよ！お二方によろしく！！」

パリィィィィン！！

何かが割れた音と共に星司は消えてしまった

零夜「帰ったか……

明日…いや、今日の朝が大変だ…

…泣けるぜ…」

…終わり…？

番外編1　超カオスな1日（後書き）

ＤＯ「計画通り…！」

あしゅき「ええ…」

「「ふはははははははは！！」」

何処かの空間で作者二人は笑っていた…

零夜「雷龍覇斬！」

秀吉「オレ流、英雄（ヒデオ）の右ストレート！」

星司「いけ！偽・螺旋剣（カラドボルグ）！！」

「「アーーーッ！！」」

続く…のか…？

A、s第9話　最強ってのは力だけで決まる訳じゃない「その通り！」（前書き

新キャラ登場！

Ｌｅｔ' ｓ　ｒｏｃｋ！！

A、s第9話　最強ってのは力だけで決まる訳じゃない「その通り！」

火彩「管理局最強の魔導師？」

クロノ「そう、現時点では最強だ。ランクは総合ＳＳＳ、一応執務官なのだが…本来ならもう少将くらいになっていてもおかしくない功績なのだが…本人が全て辞退したり、他人に功績を譲っているんだ…」

火彩「…ずいぶん変わったやつだな…年齢は？」

クロノ「確か…１７だったはずだが…」

火彩「若いな…なんでまたそんな奴に会うんだ？」

クロノ「…今回の闇の書事件に協力を頼んであるんだ」

火彩「俺とどっちが強いかな？」

クロノ「…さあ…？君も相当強いからな…」

火彩「…（…零夜とならどっちが強いかな…）」

俺はそんなことを考えながら、その人物のもとへ向かっていた

クロノ「失礼します。」
ついにたどり着いた…いったいどんなヤツだ…

「ハラオウン執務官…久しぶりだな…」

クロノ「…お久しぶりですね…・スカイライン執務官…」

紅いバンダナを付け、長い黒髪の青年がいた

「…その少年は…？」
クロノ「今回の事件で、協力してくれているんですよ。」

「…少年…名はなんと言う…？」

火彩「…闇咲火彩だ」

「私は、ヴィンセント・スカイライン。ヴィンセントと呼んでくれて構わない。」

火彩「ああ…」

ヴィンセント「…いい眼をしているな…」

火彩「は…？」
ヴィンセント「迷いが無く、真っ直ぐ未来を見ている…それでいて、強い戦士の眼をしている…」
火彩「…アンタは…」
ヴィンセント「…さて…そろそろ仕事の話をしよう…」
火彩「…」
クロノ「…では、これを…」
ヴィンセント「…資料か…助かる…」
ヴィンセント「…なるほど…わかった、私もそちらへ向かおう。」
クロノ「ありがとうございます…」
ヴィンセント「…だが…解せんな…」
クロノ「何が…でしょうか…？」

ヴィンセント「闇の書の主と言うのは、これまでの事を考えれば、騎士たちが蒐集している間、何処かに隠れているものだ。だが、わざわざ自分が出向いて蒐集に参加するなどあり得ないはず…そもそも、コイツでは闇の書の主には不適格のはずだ…」

火彩「不適格？」

ヴィンセント「そうだ、闇の書は基本、魔力が少ない者を主に選ぶ傾向がある。だがしかし、コイツは…自称闇の書の主は明らかにSランクオーバーの魔力持ちで、ハラオウン執務官を圧倒し、数十人による結界を一撃で破壊した。…明らかに異常…」

クロノ「つまり、コイツは闇の書の主じゃ…ない？」

ヴィンセント「その可能性が非常に高いな。そしてもう一つ、騎士たちの言動が明らかにおかしい。」

火彩「おかしい？どこが？」

ヴィンセント「…わからないか？もしこの仮面をつけた黒いコートの男が主なら、敬語で話すのが今までの例だ。それに、騎士たちが最初は主に秘密で蒐集を行っていたように思える。そして…何よりも騎士たちの発言が…明らかに違う。彼女たちの発言は、まるで自分たちの意志で蒐集を行っているようにしか思えん……この事件…思ったより厄介な事件になりそうだ…」

クロノ「厄介…と言いますと？」

ヴィンセント「もしかしたら主は蒐集の事を一切知らずに居る可能性が非常高い。そして、主は…おそらくだが、何らかの病にかかっ

ているのかもしれん…彼女たちは主を助けようとしているように見える…」

クロノ「つまり…彼女たちが主に秘密で蒐集している…と…？」

ヴィンセント「そうだ…私はこれまでのデータや映像からそう推測した…まぁ、あくまで可能性の話なのだが…」

火彩「…面倒な事になってきたな…」

コイツ…どんだけ勘が鋭いんだよ…何者だ…コイツ…

ヴィンセント「…一度自分の眼で確かめたい、すぐにそちらへ向かおう…」

クロノ「…お願いします…」

ヴィンセント「…それと…この…協力してくれていると言う少女達…彼女達にはまだこの話の内容は隠していた方がいい…」

クロノ「…？何故ですか？」

ヴィンセント「この子達はまだまだ純粋だ…故に戦えるのだろう…そんな所に話をややこしくして見ろ…迷って戦えなくなる可能性がある…」

…な訳ねぇだろ…

火彩「…アイツ等はそんなに子供じゃありませんよ…迷うどころか、むしろ助けたいと願うはずです…」

ヴィンセント「…（やはり…この少年は…）…そうか…だが、万一の事もある、もう少し先にしておこう…」

俺とクロスケは頷いた。

そして、ヴィンセントは少し荷物を取ってくると言って一度自宅へと帰った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

火彩「…なぁ…クロスケ…色々調べられる場所には何時連れてってくれるんだ？」

クロノ「…ユーノが先に行ってる…ここだ…後は自分で頼む…」

火彩「…？お前はどうするんだ？」

クロノ「…僕は先に帰る…」

火彩「…？そうかい…」

クロノ「…じゃあ…」

火彩「…ああ…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

火彩「…スゲェ…」

なんつー本の数だ…

火彩「とりあえず、ユーノはどこだ？」

「ありゃ？」

火彩「ユーノはどこだ～っと…」

「お～い！そこの君～！」

火彩「ん？」

「君がクロスケの言ってた子かな？」

火彩「ああ…確か…アンタらはクロスケの…」

ユーノ「火彩！」

火彩「お、居たか。」

「ん～…」

…なんだ？俺の顔をじっと見て…

「「…格好いい」」

火彩「…は？」

最高に意味がわからねぇ……

火彩「…なるほどねぇ…クロスケの師匠か…えと…リーゼアリアとリーゼロッテ…よし…覚えた！」

ユーノ「火彩はなんでこの無限書庫に？」

火彩「まぁ、今回の事件についてちょっと個人的に調べたいことがあってな。お前が見た資料でいいから、読み終わったら俺に回してくれ。」

ユーノ「うん。」

リーゼアリア「ていうか、自分で調べたほうが早いんじゃない？」

火彩「…悲しいことに検索魔法が一切使えませんので…」

リーゼロッテ「あぁ…納得…」

火彩「…はぁ…」

そして、調べ物を探すことにした。

続く…

A、s第9話　最強ってのは力だけで決まる訳じゃない「その通り！」（後書き

夜影ラジオ
Ｌｅｔ'ｓ　ｒｏｃｋ！！
（ＢＧＭ：蒼穹のｆｌｉｇｈｔ）

Ｄ０「もう今回はすっ飛ばし！作者のデスサイズ・０！」

火彩「Ｈａ！」

バゴッ！

Ｄ０「ひでぶ！！」

ドゴォォン！

秀吉「いきなりドロップキック！？」

火彩「なぁぁぁぁにキャラクター増やしてんだコラぁぁぁぁ！」

Ｄ０「前から出すのは決めてた！設定はつい最近出来たけど！！」

火彩「コノヤロー！本編で俺の仕事が増えるじゃねぇか！！」

フェイト「まぁまぁ、火彩落ち着いて。」

火彩「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ……」

ＤＯ「いてて…」

秀吉「今回はいきなり凄まじいな…」

ＤＯ「さて…今回から登場するヴィンセント・スカイライン。実はあるゲームのキャラを元にしてます。」

火彩「ほとんど全部だろ？」

ＤＯ「違うわっ！全部じゃねぇ！！一部だ一部！まぁ名前で分かる方がいるかも…ちなみに、スカイラインとは、俺の大好きな車の名前ですｗｗｗ」

秀吉「日産スカイラインＧＴ－Ｒだな。」

ＤＯ「そうだ、俺はＲ－３２が好きだ。もちろん色は黒！」

秀吉「板金７万円コースだなｗｗ」

ＤＯ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

続かなければ生き残れない！

A'ｓ第１０話　体格の差が戦力の決定的差でないことを教えてやる！「通常の三倍の人」

今回のサブタイのネタ分かる方居るでしょうか

ヒントは赤くて仮面で通常の三倍の人

Ｌｅｔ'ｓ　ｒｏｃｋ！！

A'ｓ第１０話　体格の差が戦力の決定的差でないことを教えてやる！「通常の

零夜「はぁぁぁぁ！！」

ザシュッ！

俺は蒐集のため、バカでかいイカかタコみたいな生物と戦っていた

零夜「チッ…足が邪魔だな…夢幻刀・八閃！！」

ヒュンヒュンと音を立てながら掲げた左手の上で八つの夢幻刀が高速回転する

零夜「ハァッ！」

八つ全てがイカタコもどきの足を切り裂いて行く

零夜「ライトニングドライヴ！」

モード２にした極夜に雷を纏わせ、剣を逆手に持ち、振り上げる

剣に纏わせた雷を飛ばし、イカタコもどきにぶつける

さすがに聞いたのか雄叫びを上げながら海の上で浮かびながらおそらく気を失っている

零夜「ザフィーラ、頼む」

ザフィーラ「わかった。闇の書、蒐集。」

闇「Ａｎｆａｎｇ.」

零夜「ふぅ…次行くか…」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

零夜「…ありゃあ…なんだか…」

ザフィーラ「さあ…？」

目の前の海中にはサメみたいなのが一匹

ただ…

零夜「でかすぎるにも程があるだろう！！」

その体長

目測１００ｍオーバー

零夜「…これでリンカーコアの質が低かったら俺は泣くぞ…」

と、言いながらも既に仕留めにかかっているのだが

零夜「…雷龍牙…！」一転突破の突きで体に突き刺す

バチバチと稲妻が走るが、まだ痺れて動かなくなる様子はない

零夜「チッ…なかなかタフだな…」

ザフィーラ「うおおおおぉぉぉ！！」

ザフィーラが雄叫びを上げながらサメもどきに噛みつき、攻撃する。

しかし、ザフィーラはヒレにより吹き飛ばされる

なんとか空中で踏みとどまる事には成功したようだ

零夜「雷龍爪！」

刀を突き刺したまま、体をの上を駆け抜け、体を切り裂いて行く

零夜「っらぁ！！」

駆け抜け、飛び上がり振り向けばブシュー！と血が噴水のように吹き出していた

零夜「雷龍破！」

刀から撃ち出した雷が黒い龍の形で襲いかかる。

その龍の顎（あぎと）がサメもどきの傷へ食らいつき、全身に黒い稲妻を走らせる

サメもどきは体を反り返らせ、雄叫びを上げた。

さらに

零夜「ハァァァァ！！」

悪魔の右腕（デビルブリンガー）を展開し、土手っ腹にアッパーを打ち込む

サメもどきは上に吹き飛ぶ

さらに、巨大な牙を展開した悪魔の右腕（デビルブリンガー）で掴み、俺自身をサメもどきの上へ引っ張り上げ

零夜「雷龍破！」

口の中へ雷を撃ち込む

全身に電撃が走り、雄叫びを上げながら海へ落下し、気絶して浮か

び上がる

零夜「…ふぅ…蒐集、頼む。」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

零夜「…今何ページ集まった？」

ザフィーラ「…４ページだ」

零夜「チッ……もう少しは行くとは思ったんだがな…」

ザフィーラ「だが…我々だけで蒐集する時よりもページの増える速さは倍にはなっている…」

零夜「そうか…それならいいのだが…（…蒐集を急ごうが、遅くしようが、闇の…いや…”現在の”夜天の書ではどの道はやてを助けることは出来ない…何か無いのか…！）」

この先どうなるか解っているのに何も出来ない自分に腹が立つ…！！

だが、決して希望を見失う訳にはいかない…！！

必ず…はやては助けてみせる…！！

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

火彩「…何か…何かないのか…！夜天の書を救う術は…！」

もう何冊の本を読んだだろうか…

未だに明確な解決法が見つからない。

夜天の書に関する情報自体はかなり出てきた

しかし、そこで止まっている

…やはり、管理局が…

火彩「チッ…やはり…これしかないか…」

一つだけ、解決出来そうな方法を見つける事は出来た

火彩「…時間が足りれる…とは言い難いが…やるしかないのか…！」

…明日の朝、零夜と氷雨と三人で会議としゃれ込むか…

続く…

A's第10話　体格の差が戦力の決定的差でないことを教えてやる！「通常の

夜影ラジオ！
Ｌｅｔ's　ｒｏｃｋ！！

ＤＯ「どうも、気が付いたらもう後わずかで期末テスト、作者のデスサイズ・０です」

零夜「ある意味、無限の電源、影宮零夜だ」

はやて「出番が減って寂しい、八神はやてや」

秀吉「…もうレギュラーでいいのか？…俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ」

ＤＯ「…あのさぁ…今更だが、ここでコーナーを作ろうと思うんだが…」

零夜「ほぅ…どんなコーナーだ？」

ＤＯ「そうだな、名付けて！『一度言ってみたい台詞！』だ！」

はやて「な、なんやそれ…」

ＤＯ「ルールは簡単、こちらがお題を出すからその状況で言ってみたい台詞を読者の方から募集する！そして、それに俺達がツッコんだり、共感したりする！ただそれだけ！」

秀吉「なるほど…」

Ｄ０「そうだな…まず最初のお題は…そうだな…まだまだだが、まぁすぐ来ちまうクリスマスに関するお題、『クリスマスの夜、部屋でたった１人寂しく過ごし、雪が降る外を窓越しに見ての一言』だ！」

秀吉「それはまた随分と…」

はやて「て言うかそれ、作者の状況やないんか？」

Ｄ０「ウグッ！」

零夜「だろうな」

Ｄ０「…とにかく、もしこのコーナーに参加して頂ける方は、感想、メッセージ、どんな方法でも構いませんので俺まで一言を書いて送ってください！ネタだろうが真剣に考えたものでも何でも構いません！よほどたくさん来ない限り全てやりますので！後、感想はどなたでも書けるよう制限を外してますので！よろしくお願いします！」

続かなければ生き残れない！

A's第11話　作戦会議は極秘で行うから意味がある（前書き）

タイトル通り

Let's rock!!

A'ｓ第１１話　作戦会議は極秘で行うから意味がある

翌日、早朝

零夜「…まだか…」

俺は昨日の深夜に火彩に、いつもより少し早くいつもの場所に来てくれと言われ、いつもより３０分早くきたのだが、まだ火彩は来ていなかった。

零夜「遅い…よし、帰って寝ｒ「寝るなぁ！！」あだっ！」

何者かに後頭部を蹴り上げられた

何故蹴り上げられたか解るかって？

こんな強烈なサマーソルトをするのは…

零夜「火彩…何しやがる…！」

火彩「お前が帰って寝るとか言い出すからだろうが！！」

零夜「お前が来るのが遅いんだよ！！」

火彩「お前どんだけ早く来てんだよ！」

零夜「いつもより３０分早くだ！」

火彩「早すぎんだろ！」

零夜「少し早く来いって言ったのはお前だろ！」

火彩「少しってのは１０分くらいだろ！」

零夜「ふざけるな！それでは遅すぎだ！」

氷雨「ま、まぁまぁ二人とも…落ち着いて…」

火彩「お前の基準がおかしいんだよ！」

零夜「お前がだろ！」

氷雨「だから、落ち着いて…」

火彩「だいたいお前は…！」

零夜「なんだと…！」

その瞬間

プチッ

何かがキレる音がした

そして

Ｂａｎｇ！！

突然銃声が鳴り響いた

氷雨「…落ち着いてって…僕言ったよね…」

「「……」」

…Ｗｈａｔ'ｓ　ｈａｐｐｅｎ!?

氷雨「…二人とも……頭、冷やそう…」

ヤバい、なんかまわりが凍り付いている…

火彩「ヤバい…ってこいつ…いつの間にか結界を張ってやがる…」

零夜「…マズいな…」

火彩「…死ぬなよ…」

零夜「……お前もな……」

氷雨「……凍てつけ……」

「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

零夜「あー…あのまま凍りづけで死ぬかと思った…」

火彩「俺が氷を溶かさなかったらな…」

氷雨「ごめん、さすがにやりすぎた。」

火彩「…俺が居たからいいものの…零夜だけなら凍り付けで凍死してたところだ…」

氷雨「ホントごめん、やりすぎた。」

零夜「…まぁそれは置いといてだ…火彩、こんな朝早く呼び出したからには何かあるんだろうな？」

火彩「…いいニュースと悪いニュースがあるが、どっちから聞きたい？」

零夜「悪い方から」

火彩「…わかった……管理局最強の魔導師がここに来た。」

零夜「…最強…？」

火彩「…ありゃあ、ただもんじゃねぇ。勘も鋭い、お前が闇の書の主じゃない事や、騎士達が本来の主に秘密で蒐集している事も気付

きやがった…唯一救いなのは、確信が持てていないという事だな…」

氷雨「…その人は…どんな人？見た目とか…喋り方とか…後、名前は…」

火彩「名前はヴィンセント・スカイライン。喋り方ｈ「ズガン！」どうした氷雨…いきなりずっこけて…」

氷雨「……その人の事は僕が一番知ってるよ…………僕の師匠だ……」

「「……な、なんだってぇ～～～～～～～～～～～！！！」」

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

ヴィンセント「ここか…部屋はどこだったか…」

私はマンションにたどり着いたのはいいが、部屋の番号を再度確認するのを忘れてしまい、うろ覚えで来てしまっていた

ヴィンセント「…仕方ない…確か…上の方だったはずだな…一つ一つ探すしかあるまい…」

…久々に私らしくもないミスをした…

普段ならこんなミスを犯すことは無いのだが…

まぁ…良いだろう…

――――――――――――――――――――――――――――――――

僕らは、臨海公園で作戦会議をまだやっていた

火彩「…で…そのお前の師匠とやらはどれくらい強いんだ？」
氷雨「そうだね…まず確実に僕は勝てない、火彩は…互角か…いや、師匠の方が強いかも…」零夜「俺は？俺とならどうなりそうだ？」
氷雨「さぁ…僕は零夜の力をまだまだ把握してないからね…」
火彩「コイツは俺よりも強いぞ、確実な。」
氷雨「じゃあ…互角ってところかな…」
実はこれも希望的観測だったりする
だって、師匠の全力を僕でさえ一度も見たことはないから…
火彩「おいおい…冗談じゃねぇぜ…零夜と互角に戦ったのはいままで三人しか居ねぇぞ…」
三人？誰だろう…僕の先祖がその中の1人だったりするのかな…？
零夜「火彩と…団長と…”親父”か…？あいや、”父さん”と”母さん”もそうだったかな…」
火彩「…ああ…そう言う事か…」

氷雨「…？」

零夜「ああ…お前はまだ知らなかったな…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

ヴィンセント「…ここか…」

部屋を見つけるのに２０分かかってしまった

…妙に広かったからな…

インターホンを鳴らして早く合流するとしよう

ヴィンセント「…と言う訳で…本日から、一時的ですが…この部隊の所属になります…」

リンディ「ええ、クロノから話は聞いています。」

ヴィンセント「…今回は…私もミスを犯す訳には行きません…11年前のような…！」

リンディ「…あれは、貴方のせいではないわ…」

ヴィンセント「いや…私が最後の封印確認をもっとしておくべきでした…そうすれば…少なくとも死傷者は出なかったはずです……私のミスです…」

あの悲劇を…繰り返す訳には行かない…

リンディ「…封印したはず闇の書が暴走したのは事故…誰もあんな事態を予測なんで出来なかったわ…例え貴方でも…」

ヴィンセント「…」

…11年前…私がまだ…”普通の人間”だった頃…

あの後から…私の時は動いていない…

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－

零夜「で？いいニュースってのはなんだ？」

火彩「ああ、闇の書を夜天の魔導書に戻す方法だ。まぁ、実は俺の予測だが…」

零夜「それでもいい、話してくれ」

火彩「まず、夜天の書が闇の書と呼ばれるようになった原因は、歴代の持ち主の誰かが改変したからだ。それにより、元々あった機能の旅をする機能と破損自己修復の機能が暴走させられている。…転生と無限再生はコイツが原因だ…」

零夜「なる程な…言ってしまえば、バグが中にあるわけだな…」

火彩「その概念で良いだろうな。で、ここからが重要だ。バグを取り除こうにも闇の書は外部アクセスを受け付けない…無理矢理アクセスしようとすれば主を吸収して転生しちまう…闇の書を直すためにはまず主を闇の書に真の主と認識させ、管理者権限を使うしかな

い…だが、闇の書が完成すれば主が目覚めることはない…」

氷雨「じゃあ、結局無理なんじゃ…」

火彩「いや、逆に言えば主を無理矢理目覚めさせてやればいいわけだ。」

零夜「どうやって？」

火彩「そりゃあ、俺達の得意技だろ？」

氷雨「…やっぱり結局それなんだ…」

零夜「それしかないなら…俺は迷わない…」

「「「全力の一撃でぶっ飛ばす！！」」」

続く…

A'ｓ第１１話　作戦会議は極秘で行うから意味がある（後書き）

夜影ラ（ｒｙ

ＤＯ「作者のデスｓ（ｒｙ」

秀吉「省略すんなよ…」

ＤＯ「ヒャッハァァァァァァァァァ！」

秀吉「何があったし」

ＤＯ「感想こない」

秀吉「…そうか…」

ＤＯ「ぶっちゃけ寂しい。コーナー作った意味ないじゃねぇか。こうすりゃ感想来ると思ったんだがなぁ。」

秀吉「アクセス数とユニークは？」

ＤＯ「アクセス約７００００、ユニーク約８０００くらい」

秀吉「まぁまぁか。」

ＤＯ「…頼みます、書いてください。」

続かなければ生き残れない！

A's第12話　タイムリミット（前書き）

後半、零夜、バーサー化ー

Let's rock!!

A'ｓ第１２話　タイムリミット

零夜「ただいま…」

はやて「お帰り！」

零夜「はやて…」

俺ははやてを見つめて…

はやて「…？どないしたん？」

はやてが首を傾げてこちらを見つめる…

俺は…俺は…

はやて「ふぁッ！？／／／／／／／／／／／／」

俺は…はやてを抱き締めた

はやて「ちょ、ちょ、れ、零夜君！？／／／／／／／／／／／／」

零夜「…俺が…必ず助けてみせるからな…！！」

はやて「え、ちょ、いきなりどないしたん？／／／／／／／／／／／／」

突然抱き締めてしまったのはやはりアレだったか…

零夜「……はやてがあまりにも可愛かったからな…」

はやて「ぁ…うぅぅ…／／／／／／／／／／」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

零夜「はやて、体は大丈夫か？」

はやて「いや、なんもないけど…」

零夜「そうか…良かった…」

はやて「…？どないしたん？さっきから怖い顔して…？」

零夜「え？あいや、ちょっと考え事をな…」

はやて「そう…ならええんやけど…」

零夜「うん…あ、はやて、おかわり…」

はやて「はい。」

零夜「ありがとう…」

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

零夜「俺はどうすればいいのだろう…」

救える確率は５０％…

賭けに頼るほかない

極夜『ならば、来るべき時に備えて、力をつけるべきではないのか？』

零夜「刀を振るい続けて、力がつくわけじゃない…」

極夜『だが、他に何がある？』

零夜「…」

極夜『とにかく、それしかあるまい』

――――――――――――――――――――――――――――――

火彩「ただいま～ッと…」

ヴィンセント「…どこかへ出かけていたのか…」

火彩「…朝のランニングに…」

ヴィンセント「…それにしては、遅かったそうじゃないか。彼女が心配していたぞ…」

火彩「…まあ、今日は少し距離を伸ばしたもんでね…それよりアンタ、自分の弟子に会いに行かなくていいのかよ」

ヴィンセント「…何故私に弟子がいたことを知っている…」

火彩「本人から直接聞いた…」

ヴィンセント「そうか…」

火彩「で？いつ会いに行くんだ？なんなら、道案内を引き受けるが…」

ヴィンセント「いや、いい。氷雨は今日ここに来るのだろう？」

火彩「そりゃ、まあ、そうだが…」

ヴィンセント「なら、私が出向く必要はない。」

火彩「おいおい…そんなんでいいのかよ…」

ヴィンセント「現在は作戦行動中だ…大した用も無くわざわざ捜査本部を開けて出ていくほど私はばバカではない。もし仮に私がいない間に敵が現れたらどうする?」

火彩「俺とフェイトとアルフがいる。」

ヴィンセント「では、もしその敵が君らよりはるかに強い場合はどうする?もし大多数で来ればどうする?三人で対応できなければどうする?」

火彩「…」

ヴィンセント「人数は少ないよりも多いほうがいいだろう…それに「わかったわかった!アンタの言うとおりだ!」…」

火彩「ハァ…」

こういうのを考えるのは全部刀夜に任せてたからなぁ…

俺にはよくわかんねぇ

敵が来たらとにかくぶっ飛ばす、勝てそうになくてもとにかく一発ぶん殴る、そんでもって逃げる

それが俺のポリシーだ

火彩「そろそろくるんじゃねぇかな」

ヴィンセント「…」

なのは「こんにちは～！」

氷雨「お邪魔します…」

火彩「ほら来た」

ヴィンセント「よく解ったな…」

火彩「俺の勘は良く当たるんでね」

氷雨「…あー…やっぱりか…」

ヴィンセント「久しぶりだな…氷雨…」

氷雨「…ハイ…」

なのは「？氷雨君、この人と知り合い？」

氷雨「僕の師匠…」

なのは「…」

火彩「…全員、全速力で耳をふさげ…」

なのは「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

うわぁ…相変わらず凄い叫び声だ…

なのはが驚きすぎたときは絶叫するからなぁ…

氷雨「み、耳が…」

ヴィンセント「す、凄まじいな…」

フェイト「な、なのは…声大きすぎだよ…」

火彩「相変わらずすげぇな…」

なのは「ご、ごめん…でも…凄いびっくりしちゃって…」

火彩「まぁ…解らなくはないが…」

フェイト「ううう…耳が痛い…」

火彩「大丈夫だ…すぐ治る…」

ヴィンセント「…あの二人は放置しておくか…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

零夜「黒雷龍爪！」

俺は…技のレベルを一つ上に上げるため、蒐集のついでに暴れていた

というより、もともとのレベルへ戻す、と言った方が良いだろう

零夜「黒雷龍牙！」

ついでに、名前も少し変えることにした

と言っても”黒”と言う文字を追加しただけなのだが。

零夜「黒雷龍翼！」

今倒したやつで合計５ページは集まった

零夜「黒雷龍破！」

まだだ！こんなペースでは遅い！もっと！もっと速く！

零夜「雷龍覇斬！」

ダメだ！スピードが足りない！

零夜「黒雷龍爪！」

昔はこの程度ではなかった！もっと威力も高く、もっと速かった！

零夜「夢幻刀・雷！」
雷を帯びた魔力刀を展開し

零夜「行けぇ！」

多数の生物へ　投げつける

零夜「もっと速く！もっと強く！八刀一閃！」

刀を長刀へ変え、切り裂く

もっとだ！

零夜「モード2！フラッシュセイバー！」

長刀を両刃の大剣へ変え、高速の踏み込み斬りをする

いつの間にか、俺は周囲の生物全てを打ち倒し、蒐集していた

零夜「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…」

シグナム「随分と派手に暴れたものだな…」

零夜「速く蒐集を終わらせて、はやてを助けなきゃならないからな…そろそろ時間もマズいだろう…」

シグナム「主の体はもう…どれくらい持つか…」

零夜「俺が…俺達が頑張らなきゃな…」

続く…

A'ｓ第１２話　タイムリミット（後書き）

夜影ラジオ
Ｌｅｔ'ｓ　ｒｏｃｋ!!

ＤＯ「皆さんこんにちは!もしくは、こんばんは!作者のデスサイズ・０です!」

零夜「…最近微妙に出番が減り始めてるような気がするのは何故だ？主人公、影宮零夜だ…」

はやて「…だんだんアニメみたいに出番が少なくなってきた気がする…ヒロイン、八神はやてや…」

秀吉「ご愁傷様としか言いようがない…あ、秀吉だ」

ＤＯ「うぁぁぁぁぁぁ!結局コーナー作った意味ねぇじゃん!感想あれから一回しか来ねぇし!コーナーは参加する人いねぇし!」

零夜「自業自得だ。」

ＤＯ「チクショウめぇぇぇ!!…やはり、あれをやるしかないのか…!!」

はやて「あれ?なんやそれ。」

ＤＯ「零夜ＴＳ化計画。」

零夜「何考えとんじゃボケぇぇぇぇ！！」

ＤＯ「友人の妄想から生まれた計画だよ！最初、なんとなく勉強の息抜きに描いた零夜がなんか凄い女の子みたいになって、それを友人に見せたらこうなったんだよ！！」

秀吉「……うッ…」

ＤＯ「ちなみに絵も描いたよ！友人いわく、下手なヒロインより可愛く見えるらしい！」

零夜「うぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

はやて「ちょ、その絵見せて…」

ＤＯ「下手くそだからヤダね」

秀吉「じゃあ俺達にだけでも…」

ＤＯ「しかたねぇなぁ…ホレ…」

「「…悪くないかも…」」

零夜「な、なんだってぇーーーーーッ！！」

ＤＯ「ちなみに、俺の脳内では一度妄想してみたところ、はやてと凄い百合な感じになっちまったＺＥ☆！」

零夜「なっちまったＺＥ☆！！じゃねぇよ！！ふざけんなぁぁぁ！！」

はやて「で、作者さん作者さん。」

Ｄ０「なんだ？」

はやて「計画は実行するん？」

Ｄ０「いつか必ずな。」

はやて「…うへへ…」

続かなければ生き残れない！！

A's第13話　過去の後悔は後から辛くなる（前書き）

辛くなる

Let's rock!!

A' s第13話　過去の後悔は後から辛くなる

火彩「…眠い…」

相変わらず学校は眠い…

かと言って寝るわけにもいかねぇ…

暇極まりねぇな…

目を開けたまま寝る事が出来りゃあいいんだが…

あいにく俺にそんな特殊能力は備わっちゃいない…

…作者の友人は立ったままそれが出来るらしいが…

あ～…何とか何ねぇかな…全く…

火彩「やっと帰れる…」

フェイト「火彩…そんなに早く帰りたかったの？」

火彩「いや、そういう訳ではないんだが…妙に一日が長く感じてな…前はこんな事は無かったんだがなぁ…」

フェイト「私は…そんなことないんだけど…」

火彩「なんでかねぇ…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

火彩「ありゃ？もう出かけちまったか…」

ヴィンセント「…ああ」

フェイト「アースラの武装の追加が済んだから、試験航行だって」

氷雨「アースラに武装追加？」

ヴィンセント「…アルカンシェルだそうだ…」

火彩「…なんだそりゃ？」

エイミィ「あんな物騒なもの、最後まで使わずに済めばいいんですけど…」

ヴィンセント「…あんなものをここで使ってしまえば、この星が壊滅するとしか思えん…それがわかっていながら、何故管理局はあんなものを…」

火彩「…要は凄まじい破壊兵器か…」

ヴィンセント「まぁ…その考えで間違ってはいないな…」

管理局もムチャクチャだな…

確か向こうじゃ飛ぶこともまともに出来ないうえに許可されたとき以外は非破壊、非殺傷の設定でしか戦闘は許可されていない…

…強いヤツにあったらひとたまりもねぇな…

そのくせに、惑星(ほし)一つ軽く破壊出来る兵器を作って使用の許可も出す…

ムチャクチャだな…

ヴィンセント「…やはり…管理局は最悪の事態になればこの惑星(ほし)ごと闇の書を消し去るつもりか…」

氷雨「…でしょうね…」

火彩「…その前に解決しなきゃな…」

…惑星(ほし)が壊される前に俺達で全てを終わらせてしまわなきゃな…

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

零夜「この惑星ごと闇の書を消し去るつもりかもしれんだと!?」

火彩「ああ、管理局は本気だ。最悪の事態になれば、だろうがな…」

氷雨「このままじゃマズいよ…」

零夜「はやての状態もかなりマズいだろう…時々胸を押さえている時があるんだ…」

火彩「…無駄だと解っているが…病院には…?」

零夜「いや…はやてはずっと隠しているからな…」

氷雨「気付いてるなら、病院に連れて行った方が「駄目だ…」なんで!?」

零夜「病院に行ったところで進行が遅くなる訳じゃない、ましてや病院だとストレスが溜まっていく…ただでさえ弱っているはやての命を削る羽目になるかもしれん…」

氷雨「…」

火彩「今はなるべく、その子と一緒に居てやれ…その方がまだ安心するだろう…」

零夜「…そのつもりだ…」

氷雨「…やっぱり、闇の書を夜天の書に戻すには…あの方法しかないのかな…？」

火彩「…おそらく…あれ以降、何も見つからないからな…」

氷雨「…今思ったんだけど…元に戻すのに…原型の設計図的な物がないと戻せないんじゃ…」

火彩「あ…そうか…しまった…！！」

零夜「クソッ！肝心な事が抜けていた…！！”原典”が解らなければ元には戻せん…！」

火彩「振り出しに戻っちまった…」

零夜「クソッ！クソッ！クソッ！クソッ！」

火彩「零夜…」

氷雨「火彩、無限書庫には原典の事について書いた物は無かったの？」

火彩「残念ながら…俺が調べた限り見つからなかった…後でユーノに頼んでおくが…期待は出来んだろうな…」

零夜「…美月…」

今やどうにも出来ない

会う事も話す事も叶わない

かつての自分の恋人の名を呼んだ

だけど、何も変わらない

美月…お前が作ったんだろ…？

だったら…教えてくれよ…

夜天は明けることのない闇なのか？夜は明けることはないのか？

原典…最初にお前が持っていた夜天の書…

俺の封印された記憶にあるのか？

刀夜が持っているのか？

…俺にはやては救えないのか…？

…やはり、生きて帰ると言う約束を破った俺が悪いのか？

だとしたら…許してはくれそうにないな…

…それでもはやては助けてくれ…

はやてが死ぬ所なんて絶対に見たくない…

お前にそっくりな…あの子だけは…

続く…

A' s第１３話　過去の後悔は後から辛くなる（後書き）

夜影ｒ（ｒｙ

Ｄ０「作者ｎ（ｒｙ」

零夜「オイ…省略しすｇ（ｒｙおいやｍ（ｒｙ」

Ｄ０「Ｈａｈａｈａｈａ♪」

零夜「Ｈａｈａｈａｈａ♪じゃねぇよ！！ふざけｒ（ｒｙおい！強制省略やｍ（ｒｙ」

Ｄ０「Ｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａ♪」

続かなければ生ｋ（ｒｙ

A' s第１４話壊れた過去と現在と（前書き）

久々だ…色々忙しかったからな…

A' s第１４話壊れた過去と現在と

ーーーー管理外世界ーーーー

ーーーー砂漠ーーーー

シグナム「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ヴィータが…手こずるわけだな…コイツは…少々厄介な相手だ…」

巨大なムカデのような生物と対峙し、予備のカートリッジを取り出すシグナム

その瞬間、背後の砂の中からから尻尾が飛び出し、シグナムに襲いかかった

シグナム「ッ！」

上空に飛んで回避しようとするが、触手に捕まり、体を締め付けられた

シグナム「ぅ…しまった…」

ギリギリと締め付けられ、さらに尻尾が襲いかかる

瞬間

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｂｌａｄｅ.』

金色の雷を帯びた魔力剣が飛来し、巨大なムカデの体のあちこちに突き刺さり、放電する

フェイト「…ブレイクッ！！」

シグナムが見上げた先には黒い服の魔導師、フェイトが居た

フェイトの合図で、魔力剣がさらに激しく放電し、爆発した

――――――――――――――――――――――――――――――――

ザフィーラ「…」

人の形態のザフィーラが雲の中…激しく雷が鳴っている方をむいていた…

アルフ「ご主人様が気になるのかい？」

ザフィーラ「お前か…」

アルフ「ご主人様は1対1、こっちも同じ。」

ザフィーラ「…シグナムはわれらが将…主ではない…」

拳を構えながら、静かに言う

アルフ「アンタの主は、闇の書の主…って言う訳ね」

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

零夜「…やはり来たか…」

火彩「ああ、騎士達が動いていることが解ったからな、主が動くのも予測くらいは出来る。」

氷雨「半分の仮面、どうせなら取ればいいと思うけど?どうせ今から捕まる訳だし」

零夜「…吼えるなよ…〝人間〟…」

ヴィンセント「…それはこちらの台詞だ…〝人間〟…」

火彩「は?」

零夜「……」

ヴィンセント「一つ問おう、お前は本当に闇の書の主なのか?」

零夜「…ああ」

ヴィンセント「…やはり嘘だな…」

零夜「何…!?」

ヴィンセント「…お前は今まで一度も自分自身の命令で蒐集を行ったことがない…もし本当に主ならば自分自身で蒐集する事も可能なはずだ。」

零夜「…」

ヴィンセント「それに、騎士達よりも主が強いなら自分で闇の書を持っていた方が安全なはずだ…だがお前は…一度も闇の書に触れていない…必ず騎士達の誰か1人が持っている…」

零夜「…ハァ…全てお見通し…と言う訳か…まぁいい…確かに俺は主じゃない…」

ヴィンセント「…本来の主はどこだ…」

火彩「さっさと言えよ（いいか…絶対に隠せよ…）」

零夜「（解っている…）答えるはずが無いだろう…」

ヴィンセント「ならば力ずくで聞かせてもらおう。…ケルベロス…」

『Ｓｅｔ　ｕｐ』

銃口が3つのリボルバー式の銃を手に取り、真紅のマントを纏った

零夜「来い…全員同時にな…！」

長刀を構えながら、挑発した

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

―――――再び砂漠―――――

砂埃が立ちこめる中、フェイトとシグナムはにらみ合っていた

フェイト「…」

シグナム「…」

エイミィ「フェイトちゃん！助けてどーすんの！捕まえるんだよ！」

フェイト「あ…ごめんなさい…つい…」

シグナム「礼は言わんぞ、テスタロッサ」

フェイト「お邪魔でしたか…」

シグナム「…蒐集対象を潰されてしまった…」

レヴァンティンにカートリッジをリロードするシグナム

フェイト「まぁ…悪い人の邪魔が、私の仕事ですし…」

シグナム「そうか…悪人だったな…私は…」

ガシャン、と音を立て、レヴァンティンの柄が元に戻った

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

―――――モニター室―――――

アラートを知らせる大きな音が鳴り響いていた

エイミィ「もう一カ所！？」

モニターには赤い服の騎士、ヴィータが映し出されていた

エイミィ「本命はこっち…！なのはちゃん！」

なのは「はい！」

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

―――――砂漠―――――

シグナム「預けた決着は、できれば今しばらく先にしたい。速度ではお前の方が上だ…逃げられないなら…戦うしかないな…」

フェイト「はい、私も…そのつもり出来ました…」

フェイトがバルディッシュを構え

シグナムがレヴァンティンと鞘を構え

同時に飛び出した！

バルディッシュとレヴァンティンがぶつかり、離れる

すぐ切り返し、すれ違いざまに攻撃する

シグナムの一撃は障壁によって防がれ、

フェイトの一撃もまた、障壁によって防がれた

同時に着地した瞬間、シグナムの前からフェイトの姿が消えた

一瞬にして背後に回り込み、フェイトは一撃を狙う

シグナムは、レヴァンティンを鞘に瞬時に納め、バルディッシュを防ぐ

鞘で攻撃を受け止め、抜刀したまま斬りつける

フェイトはバルディッシュでガードしたが後ろに吹き飛ばされる

シグナム「…」

『Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！』

レヴァンティンはカートリッジを一発ロード、連結刃シュランゲフォルムへと姿を変える

シグナム「てぇあっ！！」

とてつもなく長くのびた刃はフェイトを狙いながら迫って来る

その様は、まるで、地を這う大蛇の如く

フェイト「クッ…」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｉｄｇｅ，Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ.』

バルディッシュがカートリッジを一発ロードし、先端部から金色の魔力刃が伸び、鎌、ハーケンフォルムに変形する

フェイト「ハーケン、セイバー！！」

鎌を低く構えながら、連結刃のわずかな隙間を狙い、刃を打ち出す

『Ｂｒｉｚ　ｒｕｓｈ．』

再び金色の魔力刃が伸びる

シグナム「ハァァアッ！」

巧みに連結刃を操り、魔力刃の直撃を防ぐ

さらに追尾してくる魔力刃を空に上がることで回避する

が、

フェイト「ハァァァァァ！！」

すでに上空からフェイトが迫っていた

『Ｈａｋｅｎ　ｓｌａｓｈ．』

魔力刃がさらに一回り大きくなった

フェイトは鎌を振り下ろした

が、

フェイト「ッ…鞘！？」

レヴァンティンの鞘によって防がれた

シグナム「ッ…ハァァァァ！」

一瞬の隙をつき蹴りを放つ

フェイトは蹴り飛ばされながらも何とか障壁で防いでいた

『Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ.』

バルディッシュから高速の魔力弾が撃ち出され、シグナムに当たる

地面に着地したフェイトはシグナムが落下して来るであろう地点をみていた

『Ａｓｓａｕｌｔ　ｆｏｒｍ.』

鎌の形態から杖であるアサルトフォルムに戻るバルディッシュ

シグナムは地面に着地し

『Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ!』

レヴァンティンを連結刃から通常の剣へ戻した

フェイトはカートリッジを再びロード、足下にミッド式の魔法陣が

展開され、左腕と自身の前方にリングが形成される
そして、強力な一撃を撃つべく、左手に溜まっていく金色の雷の魔力を構える

フェイト「プラズマ…」

シグナムはレヴァンティンを鞘に納めた状態で同様にカートリッジをロード、
足下にベルカ式の魔力が展開され、周囲を薄紫に魔力が吹き出す

シグナム「飛龍…」

フェイト「スマッシャー！！」

金色の雷の砲撃が撃ち出され

シグナム「一閃！！」

抜刀した瞬間、魔力が込められた連結刃を地面に叩き付け、衝撃波を発生させる

砲撃と衝撃波がぶつかり大爆発が起きる

そして、ぶつかった瞬間、互いに空へ上がり、

シグナム「ハァァァァァァァァァ！！」

フェイト「ハァァァァァァァァァ！！」

互いの得物にカートリッジをロードし、ぶつかる

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

零夜「クッ…さすがにキツいか…？」

火彩「っらあぁぁぁぁぁ！！」

バスターソードの横薙の一閃を上体をそらすことで回避しながら零夜はつぶやいた

氷雨「…」

Ｂａｎｇ！

零夜「チッ！」

狙撃で飛んできた弾を魔力で作った刀で弾く

ヴィンセント「…ウインドバレット－Ｈ」

ヴィンセントが3つの銃口から通常の魔力弾から、自身の魔力変換資質、風の魔力弾を放った

風の弾は零夜を襲い、体に切り傷を増やして行く

ヴィンセントの風の魔力による鎌鼬（かまいたち）の影響だ

零夜（厄介だな…仕方ない…アレやるか…）
バックステップで一度距離をとり、長刀を腰の辺りに構える

零夜「…さぁ…来い…」

ヴィンセント「…ケルベロス…」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

再び風が撃ち出される
しかし、今度は先ほどとは違い、３つの銃口から同時に撃ち出された

零夜「…来た！」

弾が当たる直前、零夜の前方に黒い靄のようなモノが薄く広げられ、
風はそこに吸い込まれ、消滅した

ヴィンセント「…！？何だ…今のは…！？」

零夜「…居合、風斬（かぜきり）…！」

長刀を振りぬいての一閃、しかしその一閃には異常な事態が発生した

風が発生し、かまいたちが発生したのだ

ヴィンセント「なんだ…今のは!?奴は2つ変換資質を持っているのか!?」

火彩「炎龍!爆炎波!」

大剣を地面にたたきつけ、地面を這うように炎を撃ちだす

零夜「……」

再び黒い靄のようなモノが広がり、炎を飲み込む

火彩「チッ…」

零夜「居合、炎斬(ほのおぎり)…！」

炎が居合とともに撃ちだされる

火彩「なにィ！？」

ヴィンセント「変換資質を３つ持っているのか！？」

氷雨「下がって！氷龍！氷刃剣！」

真紅の氷が地面に沿って刃に変わり、飛び出す

零夜「ハァッ！」

再び黒い靄が発生し、氷が飲み込まれる

零夜「居合、氷斬(こおりぎり)…！」

居合と共に今度は氷が撃ちだされる

氷雨「うわっ！？」

ヴィンセント「４つ！？奴はいったい何者だ！」

零夜「言っておくが…俺は…ほぼ全ての変換資質を扱える…」

ヴィータ「（シグナム達が！？）」

シャマル「（うん、砂漠で交戦してるの。テスタロッサちゃんとそ

の守護獣の子と、それに、零夜君は3対1で、しかも相手はかなり強くて…それでも互角には戦ってるけど…）」

ヴィータ「（けど…長引くとマズいな…助けに行くか…あっ…！）」

空を飛んでいたヴィータの前に、白い服の魔導師、なのはがいた

シャマル「（ヴィータちゃん？）」

ヴィータ「（クッソ…こっちにも来た…例の白服…）高町なんとか！！」

なのは「にゃっ！？なのはだってばー！！な・の・はー！！」

思いっきり自分の名前を忘れられていたなのはだった…

なのは「ヴィータちゃん…やっぱり、お話聞かせてもらうわけにはいかない？もしかしたらだけど…手伝えることとか…あるかもしれないよ？」

一瞬、ヴィータの脳裏をはやての笑顔がよぎった

…が

ヴィータ「うるせぇ！！管理局の人間の言うことなんか信用出来るか！！」

なのは「私、管理局の人じゃないもの。民間協力者。」

両手を広げ、笑顔でまるで受け止めようとするかのような体制のなのは

ヴィータ（闇の書の蒐集は魔導師1人につき一回…つまり、コイツを倒してもページにはなんねぇな…カートリッジの無駄遣いも避けたいし…）

なのは「ヴィータちゃん」

ヴィータ「ブッ倒すのは！！また、今度だぁ！！」

足下にベルカ式の魔法陣が展開され、ヴィータの左手には魔力が球体状に集まっている

なのは「あっ！」

ヴィータ「吠えろ！！グラーフアイゼン！！」

『Ｅｉｓｅｎｇｅｈｅｕｌ！（アイゼンゲホイル！）』

左手の魔法の球体をグラーフアイゼンで殴る

すると凄まじい爆風と爆音と閃光が発生した

なのははたまらず耳と目をふさいでしまった

ヴィータ「脱出…！」

その隙にヴィータは離脱し、飛び去ろうとした

なのは「ぅぅ…あっ！」

爆風が収まり、視界が確保できた所でなのははヴィータが遙か遠くにいることに気付いた

『Ｍａｓｔｅｒ．』

なのは「うん。」

ヴィータ「よし、ここまで離せば攻撃も来ねぇ！次元転送…！…あっ…！？」

『Ｂｕｓｔｅｒ　ｍｏｄｅ．Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ．』

三枚の翼を展開したレイジングハートを構えたなのはがヴィータにははっきりみえた

なのは（…氷雨君みたいに正確じゃないけど…よく…狙って…！）

スコープで照準を付け

なのは「いくよ！久しぶりの長距離砲撃！！」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｄｇｅ．』

二発のカートリッジを消費し、リングを展開、魔力のチャージを開始する

ヴィータ「まさか…撃つのか！？あんな遠くから！？」

さらにレイジングハートの先端部に魔力が集まって行く

『Ｄｉｖｉｅｎ　ｂｕｓｔｅｒ．Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ．』

なのは「ディバイィィィィィン！！」

集まった魔力が一気に収束され、

なのはは「バスタァァァァァァァァ！！」

ヴィータに向かって砲撃を放った

ヴィータ「うそぉ！？」

ヴィータの視界がピンク色の光に覆われ

大爆発を起こした

レイジングハートは余剰魔力を排出し、冷却する

『Ｉｔ' ｓ　ｄｉｒｅｃｔ　ｈｉｔ.（直撃ですね。）』

なのは「…ちょっと…やり過ぎちゃったかな…？」

『Ｄｏｎ' ｔ　ｗｏｒｒｙ.（いいんじゃないでしょうか。）』

よくねぇよ、と突っ込みたいが、気にしないでおく

とにかく、煙で何も見えなかった

しばらくして、煙が晴れるとヴィータの前には仮面を付けた男がいた。

以前、零夜と接触した男の片方である

ヴィータ「ア、アンタは…」

「行け…闇の書を……完成させるんだろ…？」

ヴィータ「…ッ…」

仮面の男の言葉を聞き、ヴィータは次元転送を再開する

なのは「ディバイィィィィィン！！」

再びディバインバスターのチャージを開始するなのは

だが、

「…」

仮面の男がカードを取り出した

『Ｍａｓｔｅｒ！！』

なのは「っあ！？バインドッ…！？そんなッ…！あんな距離から、一瞬で…！？」

仮面の男はなのはが長距離砲撃を行った距離と同じ距離から、一瞬でバインドをすると言う荒技をやってのけたのだ。

その隙に、ヴィータは次元転送を終え、なのははバインドを解除したが、ヴィータも仮面の男も、もういなかった

『Ｓｏｒｒｙ　ｍａｓｔｅｒ．』

なのは「ううん、私の油断だよ…」

なのははもう誰も居ない空を眺めていた

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

零夜「っ…なかなかやるな…！」

氷雨「それはどうも…！」

氷雨は零夜の長刀の一閃を刃のついたハンドガンを指先で回転させながら刃を受け流し、もう片方の手のハンドガンから弾を一発撃つ

零夜は左手に魔力の刀を作り、弾を斬り裂く

火彩「いけ！」

火彩がリボルバーのハンドガンを握り、引き金（トリガー）を引く

ガガゥン！という銃声と共に上下二つに連なった銃口から二発の弾が撃ち出される

零夜「グッ！」

すぐさま横へ飛び、回避する

ヴィンセント「ウインドバレットオフ、ノーマルバレット、ケルベロスシフト。」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

ヴィンセント「唸れ、地獄の番犬（ケルベロス）」

３つの銃口から三本の深紅の砲撃が放たれ、岩場の大地を抉りながら零夜へ殺到する

零夜「八刀一閃！！」

シャリン！という高い音と共に八回の斬撃が同時に迫り、三本の砲撃を切り裂く

零夜（このままじゃケリはつかない…！仕方ない…〟アレ〟やるか…）

氷雨「ッ！」

突然、零夜が立ち止まり、両手を広げ目を閉じた

ヴィンセント「…何か仕掛けてくるつもりか…！」

火彩「そうはさせねぇ…！炎龍破！」

蒼炎が龍になりながら迫る

「ーーーー刺し貫く刀は全てを包むーーーー」

「ーーーー夢幻（ムゲン）の刀は夢幻（ユメマボロシ）ーーーー」

「ーーーー闇をも穿つ無限の刃ーーーー」

「ーーーー夢幻（ユメマボロシ）の包む影の刀ーーーー」

「ーーーー夢幻包影刀（ムグンホウエイトウ）ーーーー」

刹那、炎龍破が零夜に直撃、大爆発を起こした

が、次の瞬間

火彩「な、なんじゃこりゃあ！！」

氷雨「…これは…刀…？」

三人の周囲に、大量の魔力で作られた刀が配置されていた

いや、大量と言う言葉では表せないほどの刀だった

刀は空を埋め尽くし、ドーム状になっている

零夜「夢幻包影刀。絶対に回避も防御も不能な現時点で俺の最強魔法だ。」

火彩（オイオイ…こんな隠し玉があったのか…）

氷雨「回避不能防御も不能？じゃあ、どうすれば…」

ヴィンセント「簡単だ…破壊すればいい…」

ケルベロスを構え、再び砲撃を撃ち、刀を破壊する

零夜「無駄だ」

破壊された刀が再び再生し、再び覆い尽くす

零夜「さぁ、決着をつけよう。夢幻包影刀、滅殺！」

零夜の合図で刀が一斉に発射される

ただ発射されるのではなく、連続で撃ち出された刀が再び現れ、全方位からマシンガンのように連続発射される

零夜「この技は回避しようにも回避する隙がなく、防御しようにも刀は切れ味と貫通力のみを極限まで高めたため、いかなる防御をも貫く。」

火彩「じゃあ全部同時にぶっ壊しゃ良いだけだろうがよ！！」

零夜「何！？」

火彩「うらあァァァァ！！！！」

地面に向かって大爆発を起こし、刀を全て同時に破壊する

ヴィンセント「ファントムダッシュ！」

ヴィンセントの深紅のマントが広がり火彩と氷雨を抱え、飛び上がる

その姿は、まるで幽霊のように飛び回り、捕らえることができない

零夜「チッ！」

火彩「ヘッ！やっぱりか！全部ぶっ壊しちまえば再展開に時間はかかる！」

ヴィンセント「だからと言ってさすがに今のはやりすぎだろう…」

氷雨「僕が障壁を張るのが少しでも遅かったら危なかった…」

火彩「大丈夫だって！俺が生きてっから！」

「「それは君だけだ！」」

零夜「…よし、今のうちに…」

零夜の背後に無数の刀が現れる

火彩「げ…なんかヤバくね？なんか王の財宝みたいなもんが見えるんだが…」

氷雨「…いやな予感しかしない…」

ヴィンセント「…」

零夜「…夢幻刀・掃射形態！」

「「うおあああああああああああああああああ！？」」

「…ハァ…」

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

空中で斬り合い、再び着地するフェイトとシグナム

激しく肩を上下させながら着地したシグナムは左腕から血を流し、フェイトも同様に肩を上下させながら左足から血を流していた

シグナム「…ハァ…ハァ…ハァ…（ここに来て…なお速い…目で追えない攻撃が出てきた…早めに決めないとマズいな…）」

レヴァンティンと鞘とを構える

フェイト「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…（強い…クロスレンジも、ミドルレンジも圧倒されっぱなしだ…今は、スピードでごまかしてるだけ…まともに食らったら、叩き潰される…！）」

バルディッシュを構える

シグナム（シュツルムファルケン…当てられるか…）

フェイト（ソニックフォーム…やるしかないかな…）

数分の沈黙の後、二人同時に飛び出した

次の瞬間、フェイトの胸から白い手が突然出てきた

シグナムは突然の事に驚き、途中で立ち止まった

気が付けば、フェイトの背後に仮面の男が立っていた

シグナム「テスタロッサ…」

仮面の男が拳を握り、青い光が放たれ

フェイト「ぅあ…あああああああああああああ！！！」

シグナム「貴様！」

仮面の男のにはいつの間にか、金色に輝くフェイトのリンカーコアがあった

シグナム「ッ！？」

フェイトは激痛のあまりなのか、気を失っていた

「さぁ…奪え…」

シグナム「クッ…」

「…どうした…何を躊躇う…ッ！？」

突然、刀が仮面の男の左腕へ超高速で飛んでくる

「クッ！」

仮面の男は仕方なく、リンカーコアを元に戻し、左腕をフェイトから引き抜いて回避した

零夜「…余計な事はするなと言ったはずだ…ましてや騎士の1対1の戦いに水を差すなど……やはり今ここでしとめさせてもらう…」

零夜が左腕を掲げ、

「ーーーー貫く刃は矢となりてーーーー」

「ーーーー切り裂く刃は閃光にーーーー」

「ーーーー刃を以て断絶するーーーー」

「ーーーー夢幻絶刀(ムゲンゼットウ)ーーーー」

左手の上に薄く、長い刀が現れた

零夜「…貫け！夢幻絶刀！」

刀を掴み、仮面の男に投げつけた

しかも音速に近い速度で、だ

「ぐぁっ！」

音速に近い速度で飛来する刀を簡単に避けられるはずはなく、心臓を狙うはずだった刀は右腕を斬りつけた

零夜「チッ…それなりにはやるようだな…今の刀で致命傷を避けるとは…だが…2度目はない…」

「ーーーー貫く刃は矢となりてーーーーー」

「ーーーー切り裂く刃は閃光にーーーーー」

「ーーーー刃を以て断絶するーーーーー」

「ーーーー夢幻絶刀ーーーーー」

再び薄く、長い刀が現れる

「…クッ！」

零夜「…！？」

仮面の男がバインドを仕掛けた

が

零夜「…フン…」

零夜は力業だけでバインドを引きちぎり、再び刀を投げた

が、仮面の男は転送をギリギリで終え、すでに居なくなっていた

零夜「チッ…しくじった…俺も弱くなったものだ…」

シグナム「さっきの仮面の男は…「シグナム、この子から少し蒐集をしてから悪いが先に戻っておいてくれ…」…わかった…」

零夜「…来たか…」

火彩「テメェ…」

零夜「勘違いするな…バカな仮面が余計な事をしたからだ…」

火彩「ハァ？」

零夜「…ほらよ…」

火彩「あ…おい…」

零夜「…大切にしてやれよ…」

火彩「…？」

零夜「…じゃあな…」

火彩「あ、おい！」

続く…

A' s第14話壊れた過去と現在と（後書き）

はぁ…夜影…以下略

零夜「オイコラちゃんとやれ」

「…いや…今年ももうすぐ終わりか…」

零夜「まぁ…そうだな…」

「…技…整理しとくか…」

零夜「は？」

「最終決戦（クリスマス）が近いからな…」

零夜「ヲイ」

続く…らしい…

A's第15話　悲しい決意、勇気の選択、戦士の覚悟（前書き）

…やべえ…クリスマスまでにあと3話は書かないと…

ま、とにかく

Let's rock!!

A's第15話　悲しい決意、勇気の選択、戦士の覚悟

火彩「アイツ…何のつもりだ…」

零夜の奴…なんでまたフェイトを助けた……まあ、しっかり蒐集はしてやがったが…

ま、大したことは無かったからいいが…

火彩「現在、最も厄介なことはあの仮面の男か…」

ちなみに、今他のメンバーは会議中である

で、俺はアースラの医務室でフェイトにつきっきりなわけだ

え？何故かって？

ややこしい話はわけわからんからな

全部他のメンバーに任せる

…やっぱ…少しくらい顔出すか…

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

氷雨「じゃあ、システムを外部からクラッキングしてダウンさせた、と言う事ですか？」

リンディ「ええ、しかも駐屯地で使ってる機材はすべて管理局で使用しているものと同じなのに…」

エイミィ「防壁も、警報も、全部素通りで…」

なのは「それだけ、すごい技術者がいるってことですか？」
ヴィンセント「…あるいは、組織だって行動してる可能性もある…」

火彩「そうとも限らないぜ」

火彩…いつの間に…

ヴィンセント「…どういうことだ？」

火彩「管理局内に、裏切り者…あるいはスパイ的な何かがいるという可能性もある…」

氷雨「…まさかス〇ーク的なのが…」

火彩「いや、雷〇かも…」

ヴィンセント「グ〇イ・フォックスかもしれんな」

なのは「ってなんでメ〇ルギア話になってるの！？」

火彩「…ともかく、システムを再構築したほうがいいだろう…同じことが起こらないとは限らない…」

エイミィ「もっと強力なシステムにしないと、どうにもなりそうにないかな…」

ヴィンセント「…私も協力しよう…ある程度私も知識を持っている…」

なのは「ギャグからいきなりシリアスになるってどういうことなの！？」

僕も一瞬思ったけど、と言うか僕が原因なんだけど…

クロノ「フェイトの時もよくわからないな…」

なのは、気にしたら負けだよ

アルフ「ああ…あたしが駆け付けた時には…仮面の男はいなかった

…」

火彩「俺が来たときにも、だ…だが、あいつは、あの時フェイトを助けていた…」

クロノ「助けた？」

リンディ「映像をみる限り、その通りよ…フェイトさんを背後から襲った仮面の男を刀を投げつけて助けているわ」

ヴィンセント「…ますます訳が分からないな…」

火彩「さて、俺はそろそろ行くとしようかね」

なのは「え？」

火彩「そろそろ眼を覚ますんじゃないかと思ってな」

――

シャマル「助けてもらった…って言っていいのかしら…」

シグナム「少なくとも、ヤツが闇の書の完成を望んでいるのは確かだ。」

ザフィーラ「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれんな…」

ヴィータ「ありえねぇ！だって、完成した闇の書を奪ったってマスター以外には使えないじゃん！」

零夜「…あるいは…恨みがあるのかもしれんな…はやて以前のマスターが何かやらかしたのではないか？」

シャマル「えっと…あれ…？」

シグナム「…何も…思い出せない…？」

零夜「…思い出せないなら仕方あるまい……とにかく、あの仮面の男は敵だ。数日前、この家を監視していた。…あの時、余計なことはするなと警告はしておいたのだがな…無駄だったようだ…」

シグナム「監視されていただと？」

零夜「ああ。」

シャマル「…セキュリティを強化しておいた方が良さそうね…」

ザフィーラ「念のため、主のそばに常に誰かいた方が良さそうだな…」

零夜「…なるべく、俺が居るようにしよう…そうすればはやても安心するだろうし、いざという時は、ある程度の相手でも俺ならばはやてを無事に逃がすくらいなら出来る…」

（（（（（…絶対負けないだろうな…））））

…何か…４人が何か言いたそうな顔でこちらを見てくる…

…気にしないでおこう…

ヴィータ「ねぇ…闇の書を完成させてさ…はやてが本当のマスターになってさ…それではやては幸せになれるんだよね…？」

シグナム「…何のことだ？」

シャマル「闇の書の主は大いなる力を…守護者である私たちは、それを誰よりも知っているはずでしょ？」

ヴィータ「そうだけど…そうなんだけどさ…あたしはなんかさ…大事な事を忘れてる気がするんだ…」

零夜「…以前の記憶が無いのも、何か関係有るのかもしれんな…」

「「「……。」」」

…願わくば…記憶が無い事がプラスに働いてほしいものだ…

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――

カーテンの隙間から朝日が差し込み、はやては目を覚ました

隣でヴィータが寝ていないことに少し寂しさを感じつつも、起き上がりカーテンを開ける

窓から朝日が差し込み、部屋を明るく照らす

はやてはベッドから車椅子に移ろうとした瞬間

はやて「っ…！」

ドクン、と心臓が音を鳴らしたと感じた刹那、はやての胸に激痛が走った

はやて「う…ぁ…ぁ…ぁ…」

激痛により床に倒れ、車椅子も横倒しになってしまった

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

零夜「……！なんだ！今の音は！！」

俺はリビングから飛び出し、はやての部屋へ俺の最高速度で駆け抜けた

零夜「はやて！！」

やはり、はやては倒れていた

まず、首に指を当て、脈を計る

…昔から仲間が倒れたり、倒れた人を助けるときなどに、まず脈を計っていたせいか、ついやってしまった

はやては生きていて、目の前で苦しんでいるというのに…

しかし、よかったかもしれない

心拍数が非常に高い

非常にマズい状態だ…

ヴィータ「はやて！はやて！」

零夜「起こすな！すぐ病院に連れて行く！連絡を頼む！！」

シャマル「救急車を呼んで…」

零夜「その時間もないかもしれん！だから俺が最速で走った方が速い！頼む！１０分以内に到着してみせる！」

瞬時にはやてを抱きかかえ、バリアジャケットだけを展開し、窓から飛び降りる

全身をバネにして、衝撃を和らげたのではやてには衝撃は伝わってはいないはず

足全体、足の裏に闘気を集中させ、一気に爆発させ、俺は飛び出した

全身に闘気を纏い、最小限の動作で最短の距離を目で瞬時に選択、家の屋根、電柱、壁

様々なモノを足場に、はやてを抱きかかえたまま出せる最高速度で駆け抜ける

…頼む…はやて…持ってくれ…！！

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

フェイト「ん…」

火彩「お目覚めかい？」

フェイト「火彩…？」

火彩「おっと…無理すんな…まだ寝てろ…」

フェイトが起きあがろうとするのを俺が寝かせる

フェイト「アルフ…」

フェイトのベッドにアルフがもたれ掛かりながら眠っていた

火彩「昨夜からずっとお前に付いてたからな…」

フェイト「…あれ…？私…」

火彩「ここはアースラさ。フェイトは砂漠での戦闘中に背後からいきなり襲われて、気絶して、リンカーコアを吸収されて今に至るって訳だ。…あぁ、リンカーコアはすぐ治るらしいから…心配はするな…」

フェイト「私…やられちゃったんだね…」

火彩「気にするな…管理局のサーチャーでも発見できなかった程の不意打ちだ…俺ならともかく、普通は気付けないさ…」

フェイト「…」

火彩「…良かった…お前が無事でいてくれて…」

俺は手をずっと握っていた

火彩「…うなされてたからな…」

フェイト「…ありがとう…」

火彩「…まぁ…しばらくはゆっくり休め…学校には、なんとか適当に言っとくからさ…」

フェイト「うん…」

火彩「ああ、そうだ…腹、減ってるだろ?何か持ってくるわ…何が良い?」

フェイト「いや…そんな…」

火彩「遠慮すんなって…」

フェイト「…うん…火彩に…おまかせしようかな…」

火彩「よし、ちょいと待っててくれよ、すぐ戻るからな！」

久々に俺の腕前を振るう事にするか

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

零夜「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…」

はやて「もぉ…無理するからやで？」

数１０分前から…現在絶賛息切れ中…

さすがに疲れた…

…やはり体が幼くなっている分、昔のようには行かないな…

…調整が必要みたいだ…

…あと…どうでも良いが…

バリアジャケットで居たため、かなり妙な目で見られた…

いや、確かにコートなのだが…一応肩に防御の為のアーマーを装備しているし、腹にもアーマーは装備しているし、全身真っ黒だし…

零夜「あのな…ハァ…いきなり…ハァ…ぶっ倒れられたらなぁ…ハァ…無茶苦茶…心配するんだよ…」

はやて「みんなして大事にして…ちょう胸とてがつって、めまいがしただけやって、言ったやん」

シャマル「でも…頭打ってましたし…」

シグナム「何かあったら大変ですし…」

ヴィータ「はやて…」

…胸と手がつるなんざ、そうそう起こるもんじゃねぇぞ…

…と言うか…見たことねぇよ…胸と手が同時につるって…

それにあの痛がり様は異常だ…

…つってめまいがしたくらいで意識を失いかけるか？

…明らかにマズい…

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――

はやて「入院？」

夕方、はやての入院が決まった事を伝えた

シャマル「ええ…そうなんです…」

はやての表情が一気に暗くなりうつむく

シャマル「あ、でも、検査とか、念のためとかですから、心配無いですよ！…ね？」

シグナム「はい」

シグナムが花瓶の花を取り替えながら答える

はやて「それはええねんけど…」

零夜「心配するな…飯なら俺が作るし、毎日会いに来るしな…」

ヴィータ「あたしも！毎日会いに来るよ！」

はやて「ヴィータはええ子やなぁ…せやけど毎日や無くてもええよ、やること無いし、ヴィータ退屈や。零夜君も、無理に来んでもええよ」

零夜「いや、むしろ俺ははやてと居たいのだが…」

はやて「ほんなら私は、三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ」

入院を休暇って…

はやて「あ！あかん！すずかちゃんがメールくれたりするかも！」

シャマル「私が、連絡しておきますよ。」

はやて「お願い…」

零夜「火彩にも言っとくよ。アイツ、結構仲良いみたいだからな」

シグナム「では、戻って着替えと本を持ってきます、ご希望がかりましたら…」

はやて「何にしようかな～…うん…今はええわ」

零夜「ああ、俺はもうしばらく残る…」

シャマル「そう、ならはやてちゃんの事、よろしくね」

零夜「ああ。」

…今の”よろしく”は確実に　はやてを守って　と言う意味だな…

…そう言えば火彩…携帯か何か持ってんのか…？

念話があるから良いか…

みんなが一度家戻って数十分後…

零夜「…はやて…ごめんな…」

はやて「え？」

椅子に座りながら、俺ははやてに謝った

零夜「…俺が助けるって言っときながら…俺は何も出来ていない…」

はやて「…そんな事無い…零夜君は…ずっと私のそばに居てくれる…それだけで十分や…」

はやては優しいよな…けど…もっと自分に素直になってほしい…

零夜「…はやて…本当は…胸と手がつって、めまいがしたんじゃないんだろう…？」

はやて「…！！」

零夜「…本当は…もっと別の…何かわからない痛みなんだろう？」

はやて「ぅ…」

零夜「…誰もいない」

はやて「え？」

零夜「…今…此処には俺とはやて以外誰もいない…だから…だから無理はしなくていい…」

はやて「ふぇ…」

零夜「全部…俺が全部…受け止めるから…」

俺の言葉を聞いた途端、はやてはついに泣き出した

はやて「…ぅ…うあああぁ…グスッ…いやや…死にたくない…私は…まだ…死にたくない…！」

零夜「…絶対に…俺が絶対に…死なせはしない…！！俺の命に変えても…！」

泣いているはやてを抱きしめ、俺は窓の外を見ていた

続く…

A's第15話　悲しい決意、勇気の選択、戦士の覚悟（後書き）

夜影ラジヲ！Ｌｅｔ's　ｒｏｃｋ！！

「フ…フハハ…ハハハハハハ…フゥーハハハハハハハハハ！！！ついに！ついにこの日が来たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

零夜「うるせぇな！本編のシリアスぶち壊しじゃねぇか！」

「なぁにをいっておるかぁ！！今日は！魔法少女リリカルなのはＡ's　Ｐｏｄａｐｌｅ　ＧＥＡＲＳ　ｏｆ　ＤＥＳＴＥＮＹ　の発売日ではないかぁ！！テンションが上がらざるを得ないだろうがァ！私のテンションは天元突破だぁぁぁぁぁぁぁ！！フゥーハハハハハハハハ！！」

零夜「…つーか早く寝ろよ…」

「このテンションで眠れるかァァい！」

はやて「でも、確か作者さんは学校から帰って昼ご飯食べた後、晩ご飯まで熟睡してたやん」

「…し…仕方ないだろ！今週まともに寝てないんだからさぁ！朝まで３日朝までＦＦ１３やっててやっとクリアしたんだからさぁ！」

零夜「なかなか更新しなかったのはたしか忙しいのもあっただろうが、中古購入した頭文字Ｄのゲームにはまっていたからだろう？」

「ぐはっ！？」

零夜「しかもＥＫ９に全く勝てないから挫折したらしいしな」

「あぐぼぁ！！」

零夜「で？さらには今回の話のラストの俺がはやてを抱きしめるシーンを絵で描いたらしいな？」

「…何か違う絵になったから捨てたけどな…」

はやて「無理ならやめとけばええのに…」

「…血迷った…それに、別に下手だったから捨てたわけじゃない…何故か…零夜がはやてをお姫様抱っこしてる絵になったからなんだ…」

「「…はい？」」

零夜「どうやったらそうなるんだよ…」

「あ、ありのままにあの時起こった事をはｎ（ｒｙ」

零夜「…で？結局いま執筆に追いつめられてると…」

「…はい…」

零夜「…アホだ…」

続かなければ生き残れない！！

A's第16話　友と仲間と魔導師と（前書き）

間に合え！間に合えぇぇぇぇぇぇ！！

では

Ｌｅｔ's　ｒｏｃｋ！！

A's第16話　友と仲間と魔導師と

数日後…フェイトも学校に来れるようになった

まぁ…まだ魔法は使えないけど…僕としてはしばらく忙しくはなるかも…

で、教室

なのは「入院?はやてちゃんが?」

すずか「うん、昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合は悪くないそうなんだけど…検査とかいろいろあって、しばらくかかるって…」

アリサ「そっか…じゃあ、放課後、みんなでお見舞いとか行く?」

すずか「いいの?」

アリサ「すずかの友達なんでしょ?紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いも、どうせなら賑やかな方がいいんじゃない?」

いや…お見舞いが賑やかって…

なのは「うーん…それはちょっとどうかと思うけど…」

氷雨「まぁ、良いとおもうよ。」

…まぁ…さすがに、うるさくはしないだろうしね…

フェイト「火彩も行くよね？」

火彩「いや…俺は…」

フェイト「行　く　よ　ね　？」

火彩「…ハイ…」

…火彩はフェイトに頭が上がらないみたいだね…将来面白いことになりそうだなぁ…

…僕もなのはにはあまり頭が上がらないけどね…

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

八神家…

シャマル「～♪～♪～♪～よいしょっと…」

鼻歌を歌いながらお弁当を作るシャマル

…今回は暗黒物質（ダークマター）は精製されなかったようだ…

シャマル「～♪～♪～♪…あら？」

ポケットの携帯に着信が入った

ポケットから取り出し、携帯を開く

シャマル「すずかちゃん…」

すずかからのメールだった

内容は、放課後に友達とお見舞いに行きたいと言うものだった

シャマル「すずかちゃん…いい子ね…」

携帯を操作し、文を読み進める

しかし

”もしご都合が悪いようでしたら、この写真をはやてちゃんに見せてあげてください。”と書かれた文章の下に添付されていた写真に驚愕し、目を丸くした

そう、現在、敵対関係であるはずのなのはとフェイト、火彩と氷雨が”早く良くなってね”と書かれた横断幕と共に写っていたのだ

驚きのあまり、箸を落としてしまったシャマルだった…

シグナム「何？テスタロッサ達がどうしたって？」

シャマル「だから！テスタロッサちゃんとなのはちゃん、それと零夜君がいつも戦ってる二人の魔導師の子の４人がはやてちゃんに会いに来ちゃうの！すずかちゃんのお友達だから！ハァ…どうしよう！どうしよう！」

とりあえず、シャマルはシグナムに通信をして聞いてみることにしていた

凄まじい慌てようだが。

シグナム「落ち着けシャマル！大丈夫だ！幸い、主はやての魔法資質は闇の書の中だ！詳しく検査されない限り、バレはしない！それ以前に、零夜が影で魔力反応をゼロにしているからバレる事はない！つまり、私達が鉢合わせる事が無ければいいだけだ」

シャマル「ぅぅぅ…顔を見られちゃったのが失敗だったわ…零夜君みたいに変身魔法使うか…仮面でも付けておけば良かったわ…」

シグナム「今更悔いても仕方ない、ご友人のお見舞いの時は、私達は外そう」

シャマル「うん…」

シグナム「後は、主はやて、石田先生に我らの名を出さぬようにお願いを…それから、零夜にも…」

シャマル「はやてちゃん…変に思わないかしら…」

シグナム「仕方あるまい…零夜なら、バレてはいないから、零夜に任せよう…」

シャマル「うん…私から連絡しておくわ…」

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

零夜「（ああ、知ってる。）」

シャマル「（え？な、なんで？）」

零夜「（あー…俺がいつも戦ってるヤツで、茶色い髪で、大剣を持って蒼い炎を使うヤツが居るだろう？アイツが俺の親友だ。…ああ、心配するな…はやて以外のみんなの事は伏せてある…）」

シャマル「（じゃあ、今までずっと親友と戦ってきてたの！？）」

零夜「（まぁ、そうなるな。）」

）」

シャマル「（…ごめんなさい…そんな…）」

零夜「（気にするな…昔から暇さえあれば良く戦ってたからな…その時と何ら変わり無いさ…それに、アイツの性格なら気にしないだろうし、俺も気にしない…）」

シャマル「（じゃあ、とにかく、私達の事は、隠しておいてね）」

零夜「（極めて了解）」

はやて「零夜君、どないしたん？さっきからぼーっとして」

零夜「ん？はやてがどうやったら早く元気になるかな～って考えてた」

はやて「もぉ…／／／／」

零夜「あ、そうだ。友達がお見舞いに来てくれるってさ。」

はやて「へ？」

――――――――――――――――――――

夕方…

コンコン、と扉をノックする音がなった

来たか…

はやて「はぁい！どうぞ！」

「「「「「「こんにちは！」」」」」」

やはりだったか…珍しいな、火彩がいる…昔からこういう事にはあまり来なかったんだがな……

はやて「こんにちは！いらっしゃい！」

零夜「どうも。」

すずか「お邪魔します。はやてちゃん、大丈夫？」

はやて「うん、平気や。」

はやては笑顔で答えた

零夜「珍しいな、お前がこういう場にくるなど、ほとんど無かったはずだが？」

火彩「…まぁ…そうなんだが…な…うんまぁ…その…いろいろあったわけだ…」

零夜「…ああ…そう言うことか…あぁ、みんな、座ってくれ」

火彩「おう、ありがとよ」

零夜「あぁ、コート、預かるよ」

なのは「あ、ありがとう。それと、これね、うちのケーキなの」

はやて「そうなん！？」

零夜「ああ、あれは美味かったな。」

はやて「ってこれ翠屋のケーキ！？」

火彩「零夜、そう言えば」

零夜「ん？」

火彩「…なんでコート着っぱなしなんだ？」

零夜「…朝くるときに寝坊して慌てて上着着るの忘れた…」

火彩「お前ってヤツは…」

…止めてくれ…俺も自分でびっくりしたから…

アリサ「なんかあの二人凄い馴染んでるんだけど」

フェイト「二人共、昔からの親友なんだって」

アリサ「ふ～ん…」

零夜「ああ、そうだはやて、前々から紹介しようと思ってなかなか紹介出来なかったからな、こいつが俺の親友」

火彩「闇咲火彩だ。よろしく！」

はやて「八神はやてです。よろしく」

なのは「氷雨君もあの二人の中に入れば？」

氷雨「まぁ…そうなんだけど…せっかくの親友の再会みたいだからね…水を差しちゃ悪いかな～と思って…まぁ、何度か会ったことはあるしね…」

なのは「そうなの？」

氷雨「まあね」

零夜「（よし、火彩、氷雨、適当に話合わせといてくれよ）」

「「（（了解！））」」

と言う訳で、みんなでいろいろ話ながら過ごしていた

火彩も氷雨も適当に言った話に無理矢理話を合わせ、アドリブだけのでっち上げの話（もしくは茶番とも言う）に合わせると言う無茶をやってのけてくれた

本気でコイツ等すげぇと思った…

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一

しばらくして、みんなは家に帰った。

俺は面会時間ギリギリまでは病室にいる事にしている

零夜「どうだった？友達のお見舞いは？」

はやて「うん、みんなええ子ばっかしやったなぁ。零夜君の親友にも会えたし。」

零夜「俺も、火彩に会ってほしかったんだ。良かったよ、アイツ、かなりバカだからな。」

はやて「あぁ…ちょっとそんな所もあったかも…」

零夜「まぁ、昔はもっとひどかったけどな…ま、良いヤツなのは俺が保障する。なんてったって、何百年間の親友だからな。あ、この何百年間とか、魔法の事とかは、みんなには内緒な？」

はやて「わかってるって」

零夜「頼むな」

はやて「また、時々来てくれるのは嬉しいなぁ…」

零夜「ああ…」

はやて「せやけど、もうすぐクリスマスやなぁ…みんなとのクリスマスは初めてやから、それまでに退院して、パーッと楽しく出来たらええんやけど…」

零夜「フッ…そうだな…出来たら…いいな…」

はやて「フフフッ♪」

はやては先ほどみんなから送られた本を眺めながら、楽しそうに笑っていた

…俺はこの笑顔を…必ず守ってみせる…

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一

夜、

零夜「さて…行くか…」

俺はいつも通り、顔半分を仮面で覆い、、髪をあげ、変身魔法で身長を伸ばし、声も大人っぽくする

シャマル「零夜君、コレ…」

零夜「ああ…ありがとう…」

俺専用の特殊カートリッジを受け取る

極夜は遥か昔のデバイス故に、無理矢理つけたカートリッジシステムなので、通常のカートリッジではなく、特殊な方法で魔力を通常の2倍込められたカートリッジを使用する。

故に一度に作れる数は少ない

だが、銃を使用しているときはともかく、刀や剣の時は2発しか装填できない上に、雷龍覇斬以上の技で無い限りカートリッジは使わない。

まぁ無くても問題は無いのだが、使って魔力を温存するに越したことはないので使っている

結局、火彩達か、よほど厄介な獲物で無い限り使わないので数は貯まっている

シャマルには魔力と時間の余裕があったときのみに作ってもらっているが、普段は自分で作っている。

零夜「じゃあ、行ってくる」

2発のカートリッジを受け取り、俺は自分を転送をする

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

零夜「…早速獲物の大群だ…！」

以前、ヴィータとザフィーラと共に蒐集した岩龍の大群である

零夜「さぁて！みんな纏めてくたばりやがれぇぇぇぇぇぇぇ！！」

雷を纏い、刀を振り回しながら俺は大群へ突っ込んだ

続く…

A'ｓ第１６話　友と仲間と魔導師と（後書き）

夜影ラジヲ！Ｌｅｔ'ｓ　ｒｏｃｋ！！

「フゥーハハハハハハハハ！ストーリー完全制覇！全キャラ使用可能！フゥーハハハハハハハハ！！」

零夜「はよ小説書けや」

「フゥーハハハハハ！わずか半日でストーリー完結！１日で完全制覇、全キャラ使用可能！俺何やってんだあああああああああああ！！」

零夜「自分を見失ってやがる…」

「ストーリーは良かった！マテリアルッ娘達が凄かった！そしてはやて強くて凄くて可愛い！そう！はやて最高！ラストにはまさかのｙ「ネタバレ止めろ！！雷龍覇斬！」アーーーーーーーッ！！！」

続かなければ生き残れない！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8266w/

魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

2011年12月24日01時58分発行